

占部治邦教授退官記念  
占部治邦教授業績ならびに指導業績



九州大学医学部皮膚科教室 編纂  
占部治邦教授退官記念事業会

## 医学部のシンボルマーク

九州大学医学部は昨年秋、創立 80 周年を祝いましたが、その記念事業の一つとして、医学部のシンボルマークが制定されました。

同窓会員、学生、看護婦、看護学生さん達に公募して寄せられた作品を昨年 9 月、九州芸術工科大学デザイン専門の佐藤優助手にみてもらい、選定と補作を依頼しました。2 週間後に候補作品 2 点が出来上がりましたが、その中に私の描いた松葉が入りました。それが後に当選作と決り、同窓会評議委員会、教授会で正式に九大医学部のシンボルマークとして認められました。

九州大学医学部は明治 36 年 (1903) 福岡県筑紫郡千代村大字堅粕東松原に設置されています。いわゆる千代の松原の真中に誕生したわけですから、何とか松をデザインしてシンボルマークを作りたいと考えました。しかし中々名案もなく、手が出ませんでした。そのうち、日本の伝統である家紋に何かヒントがあるのではないかと思い当り、岩田屋デパートの呉服部に足を運び、紋帳を見せてもらいました。

松をテーマとした 10 数個の家紋がみつかりましたが、その中の「細輪に変わり一つ折れ松葉」というのがすっきりしており、何とかものになりそうでした。これは松葉がさかさに描いてあり、その 2 本の葉が途中で折りまがって M 字形をとっていました。

折れ松葉は縁起が悪いので、私は松葉を 2 つ組合せて、医学部 (Faculty of Medicine) の M を象徴しました。2 本の松葉は医学部と附属病院、基礎医学と臨床医学を意味するといってもよいでしょう。

九大病院長 占部 治邦  
(九大学報・昭和 59 年 8 月号掲載)

謹

呈

右

江

增

隆

教

授

殿

占

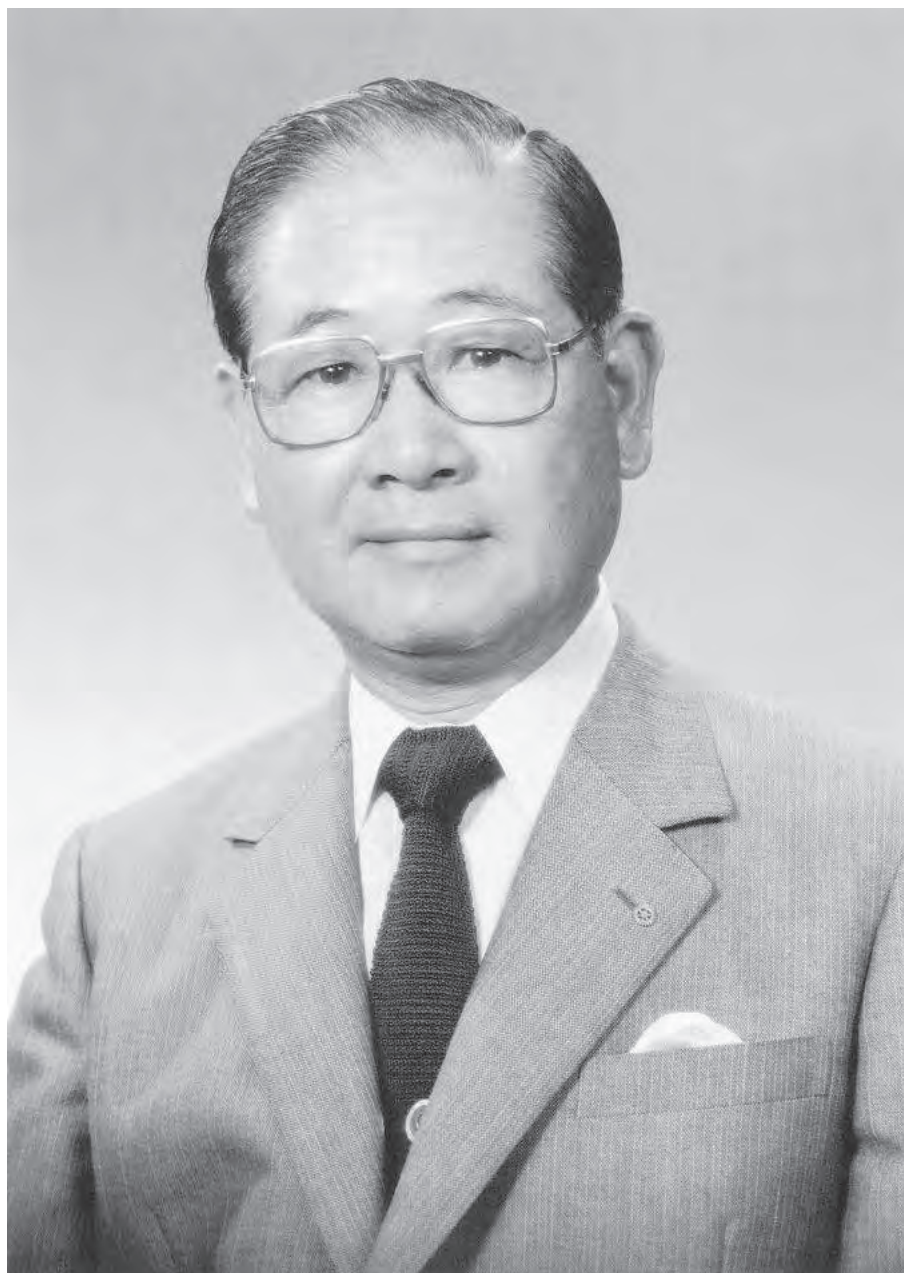
部

治

邦

占部治邦教授退官記念  
占部治邦教授業績ならびに指導業績

九州大学医学部皮膚科教室  
占部治邦教授退官記念事業会 編 纂



占部治邦教授

## 占部治邦教授略歴

大正13年 1月	福岡市西中洲にて出生
昭和23年 9月	九州大学医学部卒業
昭和24年 4月	九州大学大学院特別研究生
昭和29年 4月	九州大学医学部皮膚科助手
昭和29年 5月	九州大学医学部皮膚科講師
昭和30年 4月	九州大学医学部皮膚科助教授
昭和34年 9月	ロックフェラー財団研究員として欧米へ留学
昭和36年 1月	久留米大学医学部皮膚科教授
昭和46年 7月	九州大学医学部皮膚科教授
昭和47年 8月	油症治療研究班班長
昭和50年 4月	九州大学医師会長
昭和51年 4月	第75回日本皮膚科学会会頭
昭和55年11月	第24回日本医真菌学会会長
昭和56年 8月	油症鑑定人団代表者
昭和56年11月	第2回日韓合同皮膚科学会会長
昭和57年 2月	第8回国際医真菌学会副会長
昭和57年 5月	第16回国際皮膚科学会副会長
昭和57年 6月	第6回日本小児皮膚科学会会長
昭和58年 4月	九州大学医学部附属病院長
昭和60年 5月	国際医真菌学会会長
昭和61年 6月	第4回国際小児皮膚科学会会長
昭和62年 3月	定年退官

## 現在の役職

国際医真菌学会会長（1988年まで）  
国際小児皮膚科学会会長（1989年まで）  
米国皮膚科学会国際名誉会員  
大韓皮膚科学会名誉会員  
ドイツ皮膚科学会客員教授  
フランス皮膚科学会客員教授  
日本リディアオリリー協会理事  
日本毛髪協会名誉理事

## 定年退官にあたって

占 部 治 邦

私が九大医学部を卒業したのは昭和23年9月、終戦直後の社会情勢の悪い時代でした。1年間のインターンを終えて、九大皮膚科教室に入り、大学院学生となって樋口謙太郎教授の指導を受けることになりました。

私のテーマは真菌症とその病原菌の研究で、これは今日まで引きつづき教室の主要研究テーマのひとつとなっています。一方昭和28年、樋口教授が会長となって、第52回日本皮膚科学会総会が福岡で開催されることが決定し、その宿題報告として「抗生物質による梅毒の治療」がとりあげられましたので、その方面の研究も手伝うことになりました。これがきっかけで、性病とくに梅毒の実験的、臨床的研究が私の第2の研究テーマとなりました。

第3のテーマは形成外科学です。今でこそ国立大学の数ヵ所、私立大学ではそのほとんどが形成外科学の講座ないしは診療科目を標榜していますが、昭和30年ごろ、国立大学が「美容整形外科」に手をつけるなどということは邪道であると考えられていました。樋口教授は先見の明をもって、いち早く形成外科の重要性を見抜き、教室員を東京に派遣して本格的にその手技を学ばせ、九大皮膚科にその基礎をきずかれました。今日では皮膚科、性病科と並んで、形成外科はわが教室の診療面における三つの柱のひとつとなっていますが、残念ながら講座としての独立はまだ達成されていません。

私は昭和35年、九大助教授として欧米へ留学中に久留米大学皮膚科教授に選出され、久留米で10年半を過ごし、昭和46年7月九大皮膚科教授として復帰しました。学園紛争のひとつかけらもなかった久留米大学より帰ってみると、母校九大は人心は荒廃し、教授会もしばしば学外で開かれ、病院の総合外来の二階から赤い垂れ幕がいくつも下っていて、鉢巻をした人達がホールに坐りこんでいました。一度は教授会にヘルメットをかぶった連中が二十数名扉を排して押し入ってきて占拠され、夜間機動隊に助け出されるという一幕もありました。

一方病院では、カネミ油症患者とその支援者団体とのトラブルが、患者認定基準をめぐって絶間なく蒸し返され、さらにマスコミもこれに加わって、私が九大油症治療研究班長を

担当した昭和47～49年は、その絶頂期に当たる頃でした。団交は1,2ヵ月おき繰り返され、一部の患者と支援者の集団が私を探して講堂になだれ込んできて、学生達に訴える場面もありました。

その後大学は次第に落ち着きを取り戻し、診療、研究、教育に専念できる日々が、やっとやって来ました。

九大在職中には日本皮膚科学会、日本医真菌学会、日本小児皮膚科学会などの会長を命ぜられました。また国際的には国際医真菌学会、国際小児皮膚科学会、日韓合同皮膚科学会の会長に選ばれ、なお任期が残っているものもあります。

お蔭様で、大過なく、元気に定年退官の日を迎えることができましたが、これもひとえに良き恩師、先輩、同僚、後輩の皆様の御指導、御支援の賜と心から有難く感謝しております。

なお退官後は父の業を継ぎ、西中洲で皮膚科・性病科を開業しますが、まだ公職をいくつも持っていますので、当分の間は両方を兼務しなければなるまいと考えております。



# 業 績 目 録

## 1) 九州大学教授就任前の業績

### 著 書

- |     |                         |  |  |                      |
|-----|-------------------------|--|--|----------------------|
| 1.  | 樋口謙太郎<br>奥野 勇喜<br>占部 治邦 | 各科最新常用処方と治療方針。<br>皮膚科の部  | 大道学館出版   | 1955.                |
| 2.  | 樋口謙太郎<br>占部 治邦          | 抗生物質駆梅療法—重金属療法との<br>比較について—。   | 医学の動向,<br>第8巻  | P. 45-81, 1956.      |
| 3.  | 占部 治邦                   | 皮膚結核の化学療法。   | 皮膚科最近の進歩,<br>第2集, 医歯薬出版  | P. 339-351,<br>1956. |
| 4.  | 樋口謙太郎<br>占部 治邦          | 小児皮膚疾患。  | 小児科学, 高井俊夫編,<br>文光堂  | P. 907-997, 1958.    |
| 5.  | 樋口謙太郎<br>占部 治邦          | 性病の現段階。  | 皮膚科最近の進歩,<br>第2集 医歯薬出版   | P. 697-707,<br>1960. |
| 6.  | 樋口謙太郎<br>占部 治邦<br>利谷 昭治 | Dermatological Candidiasis. Sta-<br>tistical Observation of Moniliasis<br>in the Field of Dermatology.       | Studies on Can-<br>didiasis in Japan   | P. 12-18, 1961.      |
| 7.  | 占部 治邦                   | 皮膚科学・樋口謙太郎篇 (分担執筆<br>—色素異常, 爪の疾患, 腫瘍, 囊胞)。   | 南山堂  | 1962.                |
| 8.  | 樋口謙太郎<br>占部 治邦          | 真菌病学。  | 金原出版   | 1964.                |
| 9.  | 占部 治邦                   | 新皮膚科学・樋口謙太郎篇 (分担執<br>筆—皮膚真菌症, 動物寄生性皮膚症,<br>毛髪 of 疾患, 脂腺分泌異常, 発汗異<br>常, 爪病, 線維腫ならびに類似疾患,<br>物質代謝沈着症, 皮膚悪性腫瘍)。 | 南山堂  | 1966.                |
| 10. | 占部 治邦                   | 真菌症の内用療法。  | 皮膚科学の動向, 南山<br>堂   | P. 405-420,<br>1967. |
| 11. | 占部 治邦                   | 梅毒血清反応のみかた。  | 日本医師会医学講座,<br>金原出版   | P. 565-570,<br>1968. |
| 12. | 占部 治邦                   | 皮膚科学特論・樋口謙太郎篇 (分担<br>執筆—正常皮膚の生化学的組成,<br>汗・皮脂の生化学, 感染論および病<br>原微生物検査法, 皮膚真菌症, 動物<br>寄生性疾患, 汗腺及び脂腺の疾患)。        | 南山堂  | 1969.                |
| 13. | 占部 治邦                   | 皮膚真菌症の臨床。  | 臨床皮膚科全書<br>第5巻, 金原出版   | P. 105-136,<br>1969. |
| 14. | 占部 治邦                   | 皮膚真菌症の治療。  | 臨床皮膚科全書<br>第5巻, 金原出版   | P. 137-164,<br>1969. |
| 15. | 占部 治邦                   | 皮膚病アトラス・樋口謙太郎篇。  | 南山堂  | 1970.                |
| 16. | 占部 治邦                   | 熱傷の治療方針。   | 日本医師会医学講座,<br>金原出版   | P. 424-423,<br>1971. |
| 17. | 占部 治邦<br>中原 哲士          | A Study on Sporotrichum schenc-<br>kii Isolated from Soil.   | Proceedings Vth Con-<br>gress Internatinal<br>Society of Human<br>and Animal<br>Mycology, Excerpta<br>Medica | P. 149-150,<br>1972. |

18. 占部 治邦  
名嘉真武男 A Case of Chromoblastomycosis with Special Reference to Budding Cells in Tissue. Yeasts and Yeast-Like Microorganisms in Medical Science, Univ. Tokyo Press P. 254-259, 1972.
19. 占部 治邦  
名嘉真武男 真菌性皮膚疾患. 基本皮膚科学III, 医歯薬出版 P. 681-770, 1976.

## 論 文

20. 占部 治邦 病原糸状菌の抗菌作用. 日皮会誌. 61 : 174-181, 1951.
21. 占部 治邦 結核と誤診された鼻上体石について. 皮と泌. 13 : 49-51, 1951.
22. 占部 治邦  
桐生 博光  
小松 茂公  
松本 忠 児童の皮膚病調査成績. 臨皮泌. 5 : 371-372, 1951.
23. 占部 治邦  
坪井 尚 ヒデゾールの白癬にたいする治験. 皮と泌. 13 : 419-422, 1951.
24. 樋口謙太郎  
占部 治邦  
坪井 尚 足菌腫, ことに本症に対するガントリジン剤の効果. 皮と泌. 13 : 357-366, 1951.
25. 占部 治邦  
坪井 尚  
岩崎 博  
波多野裕敏 寒の地獄冷泉, 星生温泉, 中野温泉調査記. 皮と泌. 14 : 14-22, 1952.
26. 樋口謙太郎  
占部 治邦  
弘中 哲也  
平田 晴夫 色素失調症について. 皮と泌. 14 : 108-112, 1952.
27. 北村 憲一  
占部 治邦  
坪井 尚  
岩崎 博 広島県児童福祉施設収容児における先天性梅毒の調査ならびに治療成績. 性病. 37 : 126-129, 1952.
28. 占部 治邦  
坪井 尚 陰囊皮膚白癬について. 臨皮泌. 6 : 488-489, 1952.
29. 占部 治邦 テラマイシンによる梅毒の治療 第1篇 経口投与による家兎梅毒の治療. 性病. 37 : 257-262, 1952.
30. 富川 梁次  
占部 治邦 悪性腎盂乳頭腫について. 皮と泌. 14 : 397-399, 1952.
31. 占部 治邦  
波多野裕敏 新湯 (鹿児島県) 温泉調査記. 皮と泌. 15 : 158-162, 1953.
32. 樋口謙太郎  
占部 治邦  
佐藤 一夫 軟下疳の抗生物質療法. 皮と泌. 15 : 404-407, 1953.
33. 樋口謙太郎  
占部 治邦  
岩崎 博 Treatment and Prevention of Syphilis by Antibiotics. Kyushu Memoirs Med. Sci. 4 : 115-130, 1953.
34. 樋口謙太郎  
占部 治邦  
佐藤 一夫 新しい抗生物質による性病の治療. 皮と泌. 16 : 73-81, 1954.

35.	占部 治邦 高野 広英	新ローション基剤ゲルミナについて。	皮と泌。	16 : 163-167, 1954.
36.	加生 丈夫 占部 治邦 他	水害による泥土皮膚炎。	皮と泌。	16 : 273-276, 1954.
37.	占部 治邦 佐藤 一夫	バイシリンによる性病の予防効果。	皮と泌。	16 : 378-382, 1954.
38.	樋口謙太郎 占部 治邦 佐藤 一夫	Aureomycin Triple Sulfas の淋疾 に対する治療。	皮と泌。	16 : 399-404, 1954.
39.	占部 治邦	毳毛部・爪甲白癬に関する研究補遺。	皮と泌。	16 : 473-482, 1954.
40.	占部 治邦	テラマイシンによる梅毒の治験 第 2篇 筋肉内注射による家兎梅毒の 治療および予防。	性病。	39 : 102-106, 1954.
41.	占部 治邦	テラマイシンによる梅毒の治療 第 3篇 臨床的駆梅成績。	性病。	39 : 224-235, 1954.
42.	占部 治邦 和田 竜男	小児湿疹のコーチゾン療法。	皮と泌。	16 : 568-573, 1954.
43.	樋口謙太郎 占部 治邦 佐藤 一夫	ビールス性皮膚疾患の抗生物質療 法。	治療。	37 : 65-69, 1955.
44.	占部 治邦	テラマイシンの再帰熱スピロヘータ に対する作用機序。	性病。	40 : 38-48, 1955.
45.	占部 治邦 岩崎 博 原 恒彦	アクロマイシンによる梅毒の治療。	皮と泌。	17 : 147-154, 1955.
46.	占部 治邦 岩崎 博 原 恒彦	Oral Treatment of Syphilis with Achromycin.	Kyushu J. Med. Sci.	6 : 129-132, 1955.
47.	占部 治邦 多山 博	梅毒血清診断法の現状、とくに潜伏 梅毒の診断について。	皮と泌。	17 : 451-461, 1955.
48.	占部 治邦 中尾 泰三	レオシリンによる急性淋疾の治験 例。	皮と泌。	17 : 791-793, 1955.
49.	樋口謙太郎 占部 治邦 高野 広英	皮膚結核最近の推移。	臨床と研究。	32 : 1239-1244, 1955.
50.	占部 治邦 坪井 尚	アイロタイシンによる梅毒の治療。	最断医学。	11 : 1207-1212, 1956.
51.	占部 治邦	アイロタイシン、マグナマイシン単 独および蒼鉛併用による駆梅実験。	最断医学。	11 : 694-699, 1956.
52.	樋口謙太郎 占部 治邦	梅毒および性病の変貌	最断医学。	11 : 1072-1077, 1956.
53.	占部 治邦	夏季に多い皮膚疾患とその治療。	臨床と研究。	33 : 763-769, 1956.
54.	占部 治邦 多山 博 利谷 昭 徳永 博己	佐賀古湯および熊の川温泉の調査と くに「湯子」について。	皮と泌。	18 : 637-644, 1956.

- |     |                                  |  |                        |                          |
|-----|----------------------------------|--|------------------------|--------------------------|
| 55. | 占部 治邦<br>和田 竜男<br>植松 一男          | 皮膚疾患にたいするアクサー・ゲル,<br>アクサー-Zの治効.  | 皮と泌.                   | 19 : 195-200,<br>1957.   |
| 56. | 樋口謙太郎<br>占部 治邦<br>高木 憲三          | Characteristics of the Scrotal Skin<br>for the Infection of Trichophyton.  | Kyushu J. Med. Sci.    | 8 : 83-103,<br>1957.     |
| 57. | 占部 治邦<br>植松 一男<br>阿部 志朗          | 皮膚疾患にたいするハーピタ (ピオ<br>チン) の治療.  | 皮と泌.                   | 19 : 550-554,<br>1957.   |
| 58. | 天児 民和<br>占部 治邦                   | 九大形成診療班懇談会 (第5回).  | 臨床と研究.                 | 34 : 655-661,<br>1957.   |
| 59. | 天児 民和<br>占部 治邦                   | 九大形成診療班懇談会 (第6回).  | 臨床と研究.                 | 34 : 1155-1163,<br>1957. |
| 60. | 天児 民和<br>占部 治邦                   | 九大形成診療班懇談会 (第7回).  | 臨床と研究.                 | 34 : 1269-1273,<br>1957. |
| 61. | 樋口謙太郎<br>占部 治邦<br>西尾 一方          | ダーマトームによる植皮術.  | 皮と泌.                   | 20 : 80-90,<br>1958.     |
| 62. | 天児 民和<br>占部 治邦                   | 九大形成診療班懇談会 (第9回).  | 臨床と研究.                 | 35 : 361-363,<br>1958.   |
| 63. | 樋口謙太郎<br>占部 治邦<br>徳永 博己<br>阿部 志朗 | 老人性皮膚疾患の統計的観察.   | 臨床と研究.                 | 12 : 1346-1356,<br>1958. |
| 64. | 樋口謙太郎<br>占部 治邦<br>利谷 昭治          | Statistical Observation of<br>Moniliasis in the Field of Derma-<br>tology. | Kyushu J. Med. Sci.    | 9 : 145-151,<br>1958.    |
| 65. | 樋口謙太郎<br>占部 治邦                   | オレアンドマイシンによる性病の治<br>療.   | J. Antibiotics Ser. B. | 11 : 140-141,<br>1958.   |
| 66. | 占部 治邦                            | 白癬   | 皮と泌.                   | 20 : 122-137,<br>1958.   |
| 67. | 占部 治邦<br>中野 進                    | 皮膚科領域における内用剤の使い<br>方.  | 臨床と研究.                 | 35 : 292-296,<br>1958.   |
| 68. | 樋口謙太郎<br>占部 治邦                   | 皮膚結核の統計と治療.  | 九大結研紀要.                | 4 : 27-31,<br>1958.      |
| 69. | 占部 治邦<br>植松 一男                   | アトピー皮膚炎の治療.  | 皮膚臨床.                  | 1 : 30-38,<br>1959.      |
| 70. | 占部 治邦<br>皆見紀久男<br>森田 耕作          | 九大ワッセルマン血清反応試験室に<br>おける梅毒血清反応.   | 臨床と研究.                 | 36 : 314-321,<br>1959.   |
| 71. | 占部 治邦                            | 真菌検査法.   | 臨床と研究.                 | 36 : 325-329,<br>1959.   |
| 72. | 占部 治邦<br>坪井 尚<br>利谷 昭治<br>中野 進   | 副腎皮質ホルモン療法の検討.   | 皮と泌.                   | 21 : 416-421,<br>1959.   |
| 73. | 占部 治邦<br>植松 一男                   | 結節性紅斑の治療とその諸問題につ<br>いて.  | 皮膚臨床.                  | 1 : 678-684,<br>1959.    |

- |     |                         |  |                     |                          |
|-----|-------------------------|--|---------------------|--------------------------|
| 74. | 占部 治邦<br>徳永 博己<br>植松 一男 | 学童の皮膚病変遷。  | 皮と泌。                | 21 : 519-521,<br>1959.   |
| 75. | 占部 治邦<br>皆見紀久男<br>他     | 抗療梅毒における臨床検査成績。  | 皮膚臨床。               | 1 : 581-589,<br>1959.    |
| 76. | 占部 治邦<br>中野 進           | 病原糸状菌の電子顕微鏡学的観察。   | 日皮会誌。               | 69 : 1676-1690,<br>1959. |
| 77. | 樋口謙太郎<br>占部 治邦          | Akute Dermatitis durch den giftigen Nachtfalter.                       | Hautarzt,           | 10 : 79-82,<br>1959.     |
| 78. | 占部 治邦<br>徳永 博己          | 皮膚結核にたいするヒドロキシサンの治療。   | 臨床皮泌。               | 14 : 143-147,<br>1960.   |
| 79. | 樋口謙太郎<br>占部 治邦<br>吉田 守男 | Some Problems on Seroresistant Syphilis.                               | Kyushu J. Med. Sci. | 12 : 283-299,<br>1961.   |
| 80. | 占部 治邦                   | アレルギー性皮膚疾患、とくに蕁麻疹について。   | 総合臨床。               | 10 : 1177-1182,<br>1961. |
| 81. | 占部 治邦                   | 寒さに向かつての皮膚の管理。   | 薬局。                 | 13 : 231-233,<br>1962.   |
| 82. | 占部 治邦                   | 皮膚カンジダ症の病因と治療。   | 皮膚臨床。               | 4 : 179-183,<br>1962.    |
| 83. | 占部 治邦<br>下津浦善藏          | Bifidus 菌製剤 (ラックビー) のストロフルス、慢性蕁麻疹にたいする効果。                              | 臨皮泌。                | 16 : 437-438,<br>1962.   |
| 84. | 占部 治邦<br>名嘉真武男          | ガラス板培養 (slide culture) とその標本の作り方。                                      | 皮と泌。                | 24 : 215-218,<br>1962.   |
| 85. | 占部 治邦                   | 外科的皮膚疾患 (癬痕、熱傷) の治療。   | 臨床と研究。              | 39 : 666-673,<br>1962.   |
| 86. | 占部 治邦<br>名嘉真武男          | パラメゾン錠 (Paramethasone acetate) の使用経験。                                  | 皮と泌。                | 24 : 438-442,<br>1962.   |
| 87. | 占部 治邦<br>安元 健児          | T. mentagrophytes と T. rubrum の鑑別とくに Griseofulvin-Sabouraud 培地の応用について。 | 真菌誌。                | 3 : 123-129,<br>1962.    |
| 88. | 占部 治邦<br>中島 権一<br>伊豆統一郎 | 陥凹せる顔面癬痕の形成手術。   | 皮と泌。                | 24 : 652-656,<br>1962.   |
| 89. | 占部 治邦                   | 結節性紅斑。   | 眼科。                 | 5 : 73-76, 1963.         |
| 90. | 占部 治邦                   | 湿疹、アレルギー性皮膚炎、とくにステロイド後療法としてのビタミンC大量療法。                                 | 実験治療。               | 327 : 108-109,<br>1963.  |
| 91. | 占部 治邦                   | 白癬の抗療性について。  | 皮と泌。                | 25 : 150-161,<br>1963.   |
| 92. | 占部 治邦<br>永嶋 哲二          | 色素失調症の母娘例。   | 皮と泌。                | 25 : 573-578,<br>1963.   |
| 93. | 占部 治邦                   | 化学療法最近の進歩—皮膚真菌症—。  | 臨床と研究。              | 40 : 1925-1931,<br>1963. |
| 94. | 占部 治邦                   | 小児のカンジダ症。  | 皮膚臨床。               | 6 : 181-186,<br>1964.    |

95.	占部 安元	治邦 健児	猫ひっかき病.	臨皮泌.	18 : 487-491, 1964.
96.	占部 中島 白水	治邦 権一 玄明	熱傷, とくにその開放療法における Povidone-Iodine の応用.	形成外科.	7 : 91-101, 1964.
97.	占部 永嶋	治邦 哲二	網状肢端色素沈着症(北村)一とくに 掌蹼紋理の変化について一.	臨皮泌.	18 : 547-549, 1964.
98.	占部 安元	治邦 健児	抗生剤による皮膚変化.	皮膚臨床.	6 : 97-100, 1964.
99.	占部 分山	治邦 宏道	皮膚科領域における遺伝性疾患.	臨床と研究.	41 : 2304-2308, 1964.
100.	占部 分山	治邦 宏道	血管類狼瘡 Angiolupoid (Brocq et Pautrier).	皮膚病図説	7 : 31-36, 1965.
101.	占部 永嶋 白水	治邦 哲二 玄明	九州地方におけるスポロトリクム 症. (自験 14 例を含む)	皮膚臨床.	7 : 539-553, 1965.
102.	占部	治邦	スポロトリクム症とは.	薬局.	16 : 1431-1434, 1965.
103.	占部	治邦	熱傷の新しい治療法.	メディカルカルチュア.	7 : 562-563, 1965.
104.	占部	治邦	抗真菌性抗生物質.	臨床と研究.	42 : 2046-2051, 1965.
105.	占部	治邦 他	頭部秕糠疹の治療.	皮膚臨床.	8 : 47-52, 1966.
106.	占部 永嶋	治邦 哲二	スポロトリクム症にたいするヨード カリの作用機序.	臨皮泌.	20 : 45-50, 1966.
107.	占部 分山	治邦 宏道	白癬のグリセオフルビン内服療法.	治療.	48 : 560-566, 1966.
108.	占部	治邦	梅毒の治療.	医人薬人.	15 : 6-9, 1966.
109.	占部	治邦	最近の梅毒の治療.	医学のあゆみ.	57 : 565-566, 1966.
110.	占部	治邦	梅毒のいろいろ.	薬局.	17 : 1061-1064, 1966.
111.	占部	治邦	抗真菌剤.	臨床と研究.	43 : 228-229, 1966.
112.	占部	治邦 他	カンジダ性爪郭炎の治療.	皮膚臨床.	8 : 657-664, 1966.
113.	占部 柿添富 松崎	治邦 久子 統	土壌より分離した <i>Microsporum</i> <i>cookei</i> について.	皮と泌.	28 : 834-836, 1966.
114.	占部 永嶋	治邦 哲二	Keratosis Punctata Palmaris の 1 例とその掌紋所見.	皮と泌.	28 : 829-833, 1966.
115.	占部	治邦 他	シンポジウム (III) 水疱症とくに天 疱瘡類を中心として一病理組織学的 立場から.	日皮会誌.	76 : 554-555, 1966.
116.	占部 分山 岸	治邦 宏道 正宏	水疱症とくに天疱瘡類を中心とし て. II 病理組織学的診断.	皮膚臨床.	8 : 899-910, 1966.

- |      |                                  |  |   |                       |
|------|----------------------------------|--|---|-----------------------|
| 117. | 占部 治邦                            | 熱帯における真菌性疾患.   | 日熱帯医誌,  | 8 : 1-4, 1967.        |
| 118. | 占部 治邦<br>伊豆統一郎                   | 白癬菌の電子顕微鏡的観察, とくに菌糸の二重構造について.  | 真菌誌.  | 8 : 49-53, 1967.      |
| 119. | 占部 治邦<br>永嶋 哲二<br>中島 権一          | Mechanism of Antifungal Action of Potassium Iodide on Sporotrichosis.  | Proceedings of XIII Congress International Dermatology. | 13 : 907-908, 1967.   |
| 120. | 占部 治邦<br>安元 健児<br>岸 正宏           | 癩風, 蕁麻疹, 乾癬, 皮膚結核—西日本における皮膚疾患の地理的分布—.                                  | 臨皮.   | 21 : 965-968, 1967.   |
| 121. | 占部 治邦<br>安元 健児<br>中島 権一          | 脳転移を伴うと考えられる Chromoblastomycosis                                       | 皮と泌.  | 29 : 1012-1021, 1967. |
| 122. | 占部 治邦<br>名嘉真武男                   | カスガマイシンの抗真菌作用.   | J. Antibiotics, Ser. B.                                 | 20 : 424-426, 1967.   |
| 123. | 占部 治邦<br>名嘉真武男<br>松崎 統           | 白癬の治療.   | 臨床と研究   | 44 : 2530-2535, 1967. |
| 124. | 占部 治邦                            | 皮膚真菌症の治療.  | 真菌誌,  | 9 : 7-12, 1967.       |
| 125. | 占部 治邦<br>安元 健児<br>丸田 宏幸<br>松本 厚生 | Mesh Skin Graft について.  | 皮と泌.  | 30 : 201-202, 1968.   |
| 126. | 占部 治邦<br>安元 健児                   | 梅毒の治療.   | 皮と泌.  | 30 : 517-526, 1968.   |
| 127. | 占部 治邦                            | Sporotrichose.   | Hautarzt.   | 19 : 474-475, 1968.   |
| 128. | 占部 治邦<br>伊豆統一郎                   | Electron Microscopic Observation of Trichopyton mentagrophytes.        | Kurume Med. J.  | 15 : 97-111, 1968.    |
| 129. | 丸田 宏幸<br>占部 治邦                   | Studies on the Herpes Virus Using GMK Cell.                            | Jpn. J. Dermatol., Ser. B.                              | 78 : 11-25, 1968.     |
| 130. | 占部 治邦                            | シンポジウム (III) 汗疱状白癬の治療 内用療法.  | 日皮会誌.   | 78 : 904, 1968.       |
| 131. | 占部 治邦                            | 内用療法 (汗疱状白癬の内用療法).   | 真菌誌.  | 9 : 99-103, 1968.     |
| 132. | 占部 治邦<br>名嘉真武男                   | 九州地方の白癬とその菌相.  | 西日皮膚.   | 31 : 5-14, 1969.      |
| 133. | 占部 治邦<br>岸 正宏                    | 疱疹状膿痂疹の 1 例.   | 西日皮膚.   | 31 : 19-26, 1969.     |
| 134. | 占部 治邦<br>永嶋 哲二                   | Mechanism of Antifungal Action of Potassium Iodide on Sporotrichosis.  | Dermatol. Intl.   | 8 : 36-39, 1969.      |
| 135. | 占部 治邦<br>伊豆統一郎                   | The Ultrastructure of Trichopyton and a Double Cell Wall in the Hypha. | J. Invest. Dermatol.                                    | 52 : 508-513, 1969.   |
| 136. | 占部 治邦<br>安元 健児<br>柿添富久子<br>丸田 宏幸 | セファロリジンによる梅毒の治療.   | 臨床と研究.  | 46 : 456-460, 1969.   |



137. 占部 治邦 九州地方における白癬菌相. 真菌誌. 12: 39-43, 1969.
138. 占部 治邦 白癬の現状と治療の動向. 臨床と研究. 47: 846-853, 1970.  
名嘉真武男
139. 占部 治邦 ペンタゾシンの熱傷その他疼痛性疾患への応用. 療と薬. 7: 1865-1870, 1970.  
加治 英雅
140. 占部 治邦 スポロトリクム症. 日医ニュース. 213: 10-11, 1970.
141. 占部 治邦 樋口点状紅斑様皮疹を呈した薬疹. 西日皮膚. 32: 337-341, 1970.  
柿添富久子  
丸田宏幸  
竹内信親
142. 占部 治邦 スポロトリクム症, とくにその病原菌の土壌からの分離について. 真菌誌. 11: 1-6, 1970.  
他
143. 占部 治邦 Gummatous Sporotrichosis. Intl. J. Dermatol. 9: 301-303, 1970.  
永嶋 哲二
144. 占部 治邦 Isolation of Keratinophilic Fungi from Soil in Japan. Jpn. J. Dermatol. Ser. B. 74: 402, 1964.  
柿添富久子
145. 占部 治邦 熱傷の治療. 臨床と研究. 48: 335-342, 1971.
146. 占部 治邦 シンポジウム「黒色真菌感染症の諸問題」. 真菌誌. 12: 147-149, 1971.
147. 占部 治邦 Premalignant Fibroepithelial Tumor (Pinkus) の1例. 西日皮膚. 33: 579-584, 1971.  
西尾 一方  
丸田 宏幸

## その他

148. 占部 治邦 第55回日本皮膚科学会総会印象記. 皮と泌. 18: 453-455, 1956.
149. 樋口謙太郎 抗療性白癬の問題点. 医人. 6(4): 1-2, 1957.  
占部 治邦
150. 占部 治邦 皮膚科学会総会印象記. 皮と泌. 20: 468-470, 1958.
151. 占部 治邦 テトラサイクリン, メタ燐酸塩による急性淋疾, 軟下疳の治療. 医人. 7(6): 36-40, 1958.  
矢野 豊
152. 占部 治邦 学会印象記. 皮と泌. 21: 72-75, 1959.
153. 占部 治邦 Bicillin V2 錠による抗療梅毒の治療. 医人. 9(4): 26-30, 1960.  
吉田 守男  
高木 憲三
154. 占部 治邦 国際シンポジウム「グリセオフルビンと皮膚真菌症」に出席して. 皮と泌. 22: 89-92, 1960.
155. 占部 治邦 American Academy of Dermatology の印象. 皮と泌. 22: 364-367, 1960.
156. 占部 治邦 Duke 大学真菌研究室便り. 皮と泌. 23: 119-122, 1961.
157. 占部 治邦 第61回日本皮膚科学会総会に出席して. 皮と泌. 24: 351-352, 1962.

158.	占部 治邦	スポロトリウム症, この特異な難治性化膿性皮膚疾患.	日医新報.	2147 : 133, 1965.
159.	占部 治邦	医真菌学会の印象.	日医新報.	2172 : 31-34, 1965.
160.	占部 治邦	臨床医学における戦後 20 年—真菌症の台頭—.	最新医学.	20(臨増) : 2290, 1965.
161.	占部 治邦	西日本連合地方会印象記.	皮膚臨床.	7 : 53-, 1966.
162.	占部 治邦	第 13 回国際皮膚科学会見聞記(シンポジウム真菌症を中心として).	皮と泌.	29 : 1291-1294, 1967.
163.	占部 治邦	第 13 回国際皮膚科学会に出席して.	科学研修.	41 : 104-110, 1968.
164.	占部 治邦	雑誌競争.	皮膚臨床.	10 : 953-954, 1968.
165.	占部 治邦	今後の皮膚科教育—ポリクリ教育の実態と意見.	皮膚臨床.	11 : 599-622, 1969.
166.	占部 治邦	熱傷の治療方針.	福岡保険医ニュース	263 : 1-3, 1971.

## 2) 九州大学在任中の業績

### 著 書

- |     |   |   |   |                        |
|-----|---|---|---|------------------------|
| 1.  | 占部 治邦   | 真菌症の化学療法.   | 第13回日本医学会総<br>会誌  | P. 222-224,<br>1975.   |
| 2.  | 占部 治邦   | Fungal Infection of the Scalp and<br>Hair.  | Biology and Disease<br>of the Hair, Univ.<br>Tokyo Press  | P. 321-328,<br>1976.   |
| 3.  | 占部 治邦<br>末永 義則<br>安田 勝<br>幸田 弘                      | Treatment of Cutaneous Can-<br>didiasis and Chromomycosis with<br>5-Fluorocytosine. | Recent Advances in<br>Medical and Veteri-<br>nary Mycology, Univ.<br>Tokyo Press                                  | P. 97-106,<br>1977.    |
| 4.  | 久木田 淳<br>占部 治邦                                      | 全身疾患と皮膚病変.  | 第20回日本医学会総<br>会誌, 日本医学会   | P. 1363-1366,<br>1979. |
| 5.  | 占部 治邦   | 真菌.   | 現代皮膚科学大系<br>第4巻, 中山書店   | P. 111-119,<br>1979.   |
| 6.  | 本房 昭三<br>占部 治邦                                      | Sporotrichosis in Japan.  | Proceedings VII Con-<br>gress of International<br>Society for Human<br>and Animal<br>Mycology, Excerpta<br>Medica | P. 17-20, 1979.        |
| 7.  | 松本 忠彦<br>占部 治邦                                      | Transfer Factor: Treatment in<br>Chronic Mucocutaneous Can-<br>didiasis.            | Proceedings VII Con-<br>gress of International<br>Society for Human<br>and Animal<br>Mycology, Excerpta<br>Medica | P. 277-282,<br>1979.   |
| 8.  | 占部 治邦   | Some Aspects of Candidiasis.  | Proceedings of The<br>XV International<br>Congress of Derma-<br>tology, Excerpta<br>Medica                        | P. : 630-636,<br>1979. |
| 9.  | 占部 治邦<br>旭 正一<br>幸田 弘                               | Pigment Disorder Due to PCB<br>Poisoning.   | Proceedings Sym-<br>posium on Dermal<br>Pigment Disorder,<br>Univ. of Tokyo<br>Press.                             | P. 127-132,<br>1981.   |
| 10. | 占部 治邦<br>旭 正一<br>倉員 正俊<br>矢幡 敬<br>洵 曠二<br>安田 勝<br>他 | Clinical Results with Bifonazole in<br>the Treatment of Cutaneous Can-<br>didiasis. | Proceedings of Inter-<br>national Antifungal<br>Symposium: Bifon-<br>azole, Excerpta<br>Medica                    | P. 88-83, 1982.        |
| 11. | 占部 治邦<br>松本 忠彦                                      | 慢性皮膚粘膜カンジダ症.  | 先天性代謝病免疫病ハ<br>ンドブック, 中山書店   | P. 250-251,<br>1982.   |
| 12. | 占部 治邦   | ヒストプラスマ症, アフリカ・ヒス<br>トプラスマ症.  | 現代皮膚科学大系<br>第7巻感染性皮膚症<br>II,<br>中山書店  | P. 204-207,<br>1982.   |

- |     |  |  |  |                      |
|-----|--|--|--|----------------------|
| 13. | 本房 昭三<br>占部 治邦                                     | スポロトリコーシス,   | 現代皮膚科学大系<br>第7巻 感染性皮膚症<br>II, 中山書店   | P. 96-106,<br>1982.  |
| 14. | 占部 治邦  | 北アメリカ分芽菌症.   | 現代皮膚科学大系<br>第2巻 感染性皮膚症<br>II, 中山書店   | P. 190-196,<br>1982. |
| 15. | 福代 良一<br>三浦 祐晶<br>高橋 伸也<br>香川 三郎<br>渡辺 昌平<br>占部 治邦 | わが国の真菌症の疫学的, 病理学的,<br>菌学的並びに治療と予防に関する研<br>究.                               | 日本リディアオリリー<br>協会 57 年年報  | P. 57-77, 1983.      |
| 16. | 占部 治邦  | 真菌性疾患, スポロトリコーシスお<br>よびクロモミコーシス.   | 新小児医学大系<br>第40巻, 中山書店  | P. 279-288,<br>1983. |
| 17. | 占部 治邦<br>真崎 治行<br>古賀 哲也                            | 乳児寄生菌性紅斑の統計.   | 日本リディアオリリー協<br>会 58 年度報  | P. 58-61, 1984.      |
| 18. | 中山 樹一郎<br>安元 慎一郎<br>今山 修平<br>壁村 まゆみ<br>占部 治邦       | 皮膚T細胞リンパ腫患者に対する温<br>熱効果の臨床および基礎的検討.  | 皮膚リンフォーマIV,<br>リンフォーマ研究会   | P. 48-51, 1985.      |
| 19. | 占部 治邦<br>本房 昭三                                     | Clinical Treatment of Japanese<br>with Common Deep Mycoses,                | Filamentous Mi-<br>croorganisms,<br>Biomedical Aspects.<br>Japan Scientific Soci-<br>eties Press | P. 391-396,<br>1985. |
| 20. | 松本 忠彦<br>占部 治邦                                     | クロモミコーシス.  | 皮膚科診断治療大系<br>第5巻, 講談社  | P. 112-113,<br>1985. |
| 21. | 松本 忠彦<br>占部 治邦                                     | コクシジオイデス症.   | 皮膚科診断治療大系<br>第5巻, 講談社  | P. 129, 1985.        |
| 22. | 松本 忠彦<br>占部 治邦                                     | 性行為感染症.  | 皮膚科診断治療大系<br>第6巻, 講談社  | P. 20-21, 1985.      |
| 23. | 松本 忠彦<br>占部 治邦                                     | 放射線癌.  | 皮膚科診断治療大系<br>第6巻, 講談社  | P. 53, 1985.         |
| 24. | 壁村 まゆみ<br>中山 樹一郎<br>今山 修平<br>占部 治邦                 | ATL に対する VEMP, および局所<br>温熱療法の1例.   | 皮膚リンフォーマV,<br>リンフォーマ研究会  | P. 110-113,<br>1986. |
| 25. | 占部 治邦<br>今山 修平<br>八島 豊<br>入来 敦<br>佐藤 恵実子           | Von Recklinghausen 病患者におけ<br>る Neurofibroma の間質の微細構<br>造.                  | 厚生省特定疾患神経皮<br>膚症候群調査研究班昭<br>和 60 年度研究報告書   | P. 107-116,<br>1986. |
| 26. | 旭 正一<br>占部 治邦                                      | Two Cases of Granuloma An-<br>nulare with Atypical Clinical Fea-<br>tures. | Proceedings IV Intl.<br>Cong. Pediatr. Derm-<br>mol. Univ. Tokyo<br>Press.                       | p. 395-399,<br>1987. |
| 27. | 松田 哲男<br>松本 忠彦<br>占部 治邦                            | Current State of Tinea Capitis<br>during Childhood.                        | Proceedings IV Intl.<br>Cong. Pediatr. Derm-<br>matol., Univ. Tokyo<br>Press.                    | P. 495-497,<br>1987. |

## 論文

- |     |  |   |         |                          |
|-----|--|---|---------|--------------------------|
| 28. | 占部 治邦  | スポロトリコーシス (Sporotrichosis).                 | 福岡医誌,   | 63 : 292-300,<br>1972.   |
| 29. | 占部 治邦  | 皮膚カンジダ症の病型について.                             | 皮膚臨床.   | 14 : 394, 1972.          |
| 30. | 占部 治邦  | Unusual Keratosis (一種の角化症, 診断例) (図説).       | 西日皮膚.   | 34 : 663-664,<br>1972.   |
| 31. | 占部 治邦  | 一種の角化症 (診断例).                               | 西日皮膚.   | 34 : 665-668,<br>1972.   |
| 32. | 占部 治邦<br>松本 忠彦   | 真菌学的診断法                                     | 総合臨床.   | 21 : 2232-2244,<br>1972. |
| 33. | 占部 治邦  | スポロトリコーシス (Sporotrichosis).                 | 臨床と研究.  | 50 : 63-66,<br>1973.     |
| 34. | 占部 治邦  | 最近の皮膚科診療の実際.                                | 福岡医報.   | 961 : 9, 1973.           |
| 35. | 安川 典宏<br>安田 勝<br>占部 治邦   | 天疱瘡の母子例.                                    | 西日皮膚.   | 35 : 435-441,<br>1973.   |
| 36. | 占部 治邦<br>末永 義則   | 新抗真菌剤 5-Fluorocytosine.                     | 真菌誌.    | 14 : 187-190,<br>1973.   |
| 37. | 中溝 慶生<br>木村 秀人<br>利谷 昭治<br>旭 正一<br>占部 治邦<br>池田 裕子<br>谷川 瑞子<br>皆見 紀久男<br>西本 勝太郎<br>荒尾 龍喜<br>田代 正昭 | 0.1%ビタミンA酸吸水軟膏による尋常性乾癬および諸角化性皮膚疾患の治療.       | 西日皮膚.   | 35 : 743-753,<br>1973.   |
| 38. | 幸田 弘<br>有吉 通泰<br>鈴木 達朗<br>占部 治邦<br>都外川 幸雄  | Cephalexin の病原性 Treponema pallidum にたいする効果. | 西日皮膚.   | 35 : 722-730,<br>1973.   |
| 39. | 占部 治邦  | 序言 (油症).                                    | 福岡医誌.   | 65 : 1-4, 1974.          |
| 40. | 占部 治邦  | 深在性皮膚真菌症の治療と抗真菌剤.                           | 真菌誌.    | 15 : 76-81,<br>1974.     |
| 41. | ビタミンA酸<br>臨床研究班  | ビタミンA酸外用の尋常性痤瘡に対する臨床効果の二重盲検による検討.           | 医学のあゆみ. | 88 : 536-547,<br>1974.   |
| 42. | 旭 正一<br>占部 治邦  | 微生物アレルギー.                                   | 臨床と研究   | 51 : 1242-1248,<br>1974. |
| 43. | 川村 太郎<br>占部 治邦   | TNM 分類予後調査によって知りえた本邦皮膚悪性腫瘍の実態.              | 皮膚臨床.   | 16 : 385-393,<br>1974.   |
| 44. | 幸田 弘<br>西尾 一方<br>占部 治邦   | Histiocytic Medullary Reticulosis (図説).     | 西日皮膚.   | 36 : 465-466,<br>1974.   |

45.	幸田 弘 西尾 一方 占部 治邦	Histiocytic Medullary Reticulosis.	西日皮膚.	36 : 503-510, 1974.
46.	占部 治邦 西尾 一方	若年性黒色腫.	皮膚臨床.	16 : 771-774, 1974.
47.	宮河 昭雄 占部 治邦	表皮の核酸異化過程.	西日皮膚.	36 : 783-786, 1974.
48.	宮河 昭雄 幸田 弘 占部 治邦	Chromatographic Fractionation and Partial Characterization of Acid Phosphatase in Guinea Pig Epidermis.	J. Invest. Dermatol.	63 : 476-478, 1974.
49.	占部 治邦 他	多施設共同試験二重盲検法による Bufexamac の皮膚疾患に対する薬効評価.	医学のあゆみ.	92 : 83-94, 1975.
50.	宮河 昭雄 占部 治邦	表皮酸性ホスファターゼの Heterogeneity.	日皮会誌.	85 : 73-76, 1975.
51.	Desoximetason 研究班	コルチコイド軟膏効果判定における二重盲検法の検討 (続報) —Desoximetason 外用剤の有用性	西日皮膚.	37 : 124-136, 1975.
52.	占部 治邦 川野 正子	Trichophyton tonsurans による "Black Dot" Ringworm. (図説)	西日皮膚.	37 : 1-2, 1975.
53.	占部 治邦 川野 正子	Trichophyton tonsurans による "Black Dot" Ringworm.	西日皮膚.	37 : 15-19, 1975.
54.	幸田 弘 西尾 一方 占部 治邦	皮膚疾患における細胞診 (I).	西日皮膚.	37 : 233-237, 1975.
55.	松本 忠彦 占部 治邦	二重盲検法による外用抗真菌剤の効果判定 —皮膚カンジダ症にたいする Clotrimazole の臨床効果—.	西日皮膚.	37 : 243-252, 1975.
56.	宮河 昭雄 穴井 元昭 占部 治邦	Degradation of Deoxyribonucleic Acid by Guinea Pig Epidermal Extracts.	Arch. Dermatol. Forsch.	254 : 79-85, 1975.
57.	占部 治邦	新抗真菌剤 5-Fluorocytosine によるクロモミコーシスの治療 序 5-Fluorocytosine について.	西日皮膚.	37 : 385-386, 1975.
58.	幸田 弘 西尾 一方 占部 治邦	皮膚疾患における細胞診 (II).	西日皮膚.	37 : 426-429, 1975.
59.	香川 三郎 占部 治邦 安田 勝 末永 義則	陰股部白癬に対する 2-N-hexylox-benzamide 軟膏の有用性の二重盲検法による検討.	医学のあゆみ.	93 : 708-715, 1975.
60.	西尾 一方 幸田 弘 占部 治邦	Über einen Fall von Histiocytic Medullary Reticulosis.	Arch. Dermatol. Forsch.	251 : 259-269, 1975.
61.	幸田 弘 西尾 一方 占部 治邦	皮膚疾患における細胞診 (III).	西日皮膚.	37 : 591-596, 1975.
62.	幸田 弘 石坂 隆 占部 治邦	口囲皮膚炎 (図説).	西日皮膚.	37 : 713-714, 1975.

63.	幸田 弘 石坂 隆 占部 治邦	口囲皮膚炎と酒皸様皮膚炎.	西日皮膚.	37 : 719-729, 1975.
64.	幸田 弘 西尾 一方 占部 治邦	皮膚疾患における細胞診 (IV).	西日皮膚.	37 : 808-812, 1975.
65.	占部 治邦 本房 昭三	スポロトリコーシス.	皮膚臨床.	17 : 857-861, 1975.
66.	幸田 弘 西尾 一方 占部 治邦	皮膚疾患における細胞診 (V).	西日皮膚.	37 : 966-971, 1975.
67.	松本 忠彦 宮河 昭雄 矢幡 敬 占部 治邦	SCH 10649 の皮膚癢痒症に対する臨床効果 —二重盲検法による検討—.	薬理と治療.	4 : : 221-230, 1976.
68.	谷奥 喜平 旭 正一 占部 治邦	パッチテストの再検討.	臨皮.	30 : 319-324, 1976.
69.	L-DOPA 研 究 班	L-DOPA の円形脱毛症にたいする薬効評価 —第2報 二重盲検比較試験—.	西日皮膚.	38 : 305-310, 1976.
70.	安田 勝 末永 義則 本房 昭三 占部 治邦	皮膚カンジダ症にたいする5-Fluorocytosine 軟膏の使用経験.	西日皮膚.	38 : 652-655, 1976.
71.	松本 忠彦 磯田美登里 占部 治邦 渡辺 紀明	慢性皮膚粘膜カンジダ症.	皮膚臨床.	18 : 527-542, 1976.
72.	占部 治邦	白癬の病型.	日皮会誌.	86 : 573-581, 1976.
73.	幸田 弘 金出 明子 本房 昭三 占部 治邦	尋常天疱瘡の治療中に膿疱性乾癬様皮疹を併発した症例.	西日皮膚.	38 : 742-747, 1976.
74.	幸田 弘 日野由和夫 占部 治邦	Letterer-Siwe Disease.	西日皮膚.	38 : 699-700, 1976.
75.	末永 義則 本房 昭三 占部 治邦	5-Fluorocytosine によるクロモミコーシスの治療.	西日皮膚.	38 : 621-626, 1976.
76.	占部 治邦 幸田 弘	Perioral Dermatitis and Rosacea-Like Dermatitis: Clinical Features and Treatment.	Dermatologica.	152 : 155-160, 1976.
77.	宮河 昭雄 占部 治邦	DNA and DNA+Histone Hydrolysis by Guinea Pig Epidermal Enzymes.	Dermatologica.	153 : 346-351, 1976.
78.	占部 治邦	真菌検査法.	臨床医.	3 : 64-67, 1977.
79.	宮河 昭雄 幸田 弘 占部 治邦	Cutis Marmorata Telangiectatica (図説).	西日皮膚.	39 : 5-6, 1977.

80.	宮河 昭雄 幸田 弘 占部 治邦	Cutis Marmorata Telangiectatica Congenita の 3 例.	西日皮膚.	39 : 10-13, 1977.
81.	旭 正一 占部 治邦	皮膚病変と臨床検査法.	臨床と研究.	54 : 19-23, 1977.
82.	占部 治邦 幸田 弘	Present Status of Syphilis in Japan.	大韓皮膚科学会誌.	14 : 291-296, 1977.
83.	福田 英三 金出 明子 占部 治邦	Bufexamac 軟膏・クリームの口コミ 皮膚炎 酒皰様皮膚炎にたいする治 療成績.	西日皮膚.	39 : 637-640, 1977.
84.	武石 正昭 旭 正一 占部 治邦 小栗 良介	Neonatal Lupus Erythematosus.	西日皮膚.	39 : 851-852, 1977.
85.	末永 義則 武石 正昭 占部 治邦	皮膚緑膿菌感染症にたいする KW -1062 の使用経験.	Chemotherapy.	25 : 2279-2281, 1977.
86.	占部 治邦	真菌症の治療.	臨床医.	4 : 112-114, 1978.
87.	幸田 弘 福田 英三 日野由和夫 占部 治邦	ステロイド外用剤による副作用.	西日皮膚.	40 : 177-187, 1978.
88.	西村 正幸 幸田 弘 占部 治邦	Pilomatrixoma—病理組織学的お よび電顕的検査—.	西日皮膚.	40 : 299-314, 1978.
89.	松本 忠彦 占部 治邦	皮膚カンジダ症における抗真菌剤の 臨床効果の検討—Ciclopirox Olamine クリームと Clotrimazole クリームとの比較—.	西日皮膚.	40 : 345-350, 1978.
90.	占部 治邦	口囲皮膚炎 (酒皰様皮膚炎) —外用ステロイド剤の副作用—.	日本臨床.	36 : 2400-2401, 1978.
91.	占部 治邦	スポロトリコーシスの基礎と臨床.	真菌誌.	18 : 387-397, 1978.
92.	幸田 弘 西村 正幸 西尾 一方 占部 治邦	Nodular Apocrine Hidradenoma より 生じたと考えられる Apocrine Adenocarcinoma.	西日皮膚.	40 : 429-438, 1978.
93.	幸田 弘 金出 明子 旭 正一 占部 治邦	Essential IgG Cryoglobulinemia with Purpura and Cold Urticaria.	Arch. Dermatol.	114 : 784-786, 1978.
94.	占部 治邦	小児の真菌症—その臨床—.	小児科.	19 : 805-811, 1978.
95.	西村 正幸 幸田 弘 西尾 一方 占部 治邦	Primary Localized Cutaneous Amyloidosis Tumefactive Form —Colloid Degeneration of the Skin (Plaque Type) との異同につ いて—.	西日皮膚.	40 : 1120-1127, 1978.
96.	占部 治邦 幸田 弘	油症 10 年.	皮膚臨床.	21 : 31-35, 1979.



97.	旭 正一 占部 治邦	放射線による皮膚障害と実態とその問題点。	西日皮膚。	41 : 5-13, 1979.
98.	占部 治邦 武石 正昭	皮膚疾患と抗プラスミン剤。	西日皮膚。	41 : 325-326, 1979.
99.	旭 正一 幸田 弘 占部 治邦 利谷 昭治	油症の皮膚症状 10 年間の推移。	福岡医誌。	70 : 172-180, 1979.
100.	占部 治邦	ステロイドと真菌症—序言—。	西日皮膚。	41 : 222, 1979.
101.	外用ステロ イドの全身 作用検討会	Beclomethasone dipropionate 外用剤の全身作用に関する検討—Betamethasone 17-valerate 軟膏および Fluocinonide クリームとの比較—。	日皮会誌。	89 : 61-68, 1979.
102.	幸田 弘 西村 正幸 本房 昭三 占部 治邦	後腹膜腫瘍をともなった Lichen Ruber Bullosus.	皮膚臨床。	21 : 456-460, 1979.
103.	占部 治邦	油症。	皮膚病診療。	1 : 333-336, 1979.
104.	西村 正幸 今山 修平 幸田 弘 占部 治邦	乳房外ページェット病—電顕的および酵素組織化学的研究—。	西日皮膚。	41 : 682-694, 1979.
105.	桐生 美麿 幸田 弘 占部 治邦	多発性神経鞘腫の 2 例—とくに電顕像について—。	西日皮膚。	41 : 630-637, 1979.
106.	幸田 弘 西村 正幸 本房 昭三 占部 治邦	後腹膜腫瘍をともなった Lichen Planus Bullosus.	西日皮膚。	41 : 619-620, 1979.
107.	占部 治邦	第 2 期頭症梅毒の抗生物質内服療法。	皮膚臨床。	21 : 698, 1979.
108.	占部 治邦	カンジダ症の話題。	皮膚病診療。	1 : 781, 1979.
109.	占部 治邦	真菌症—1979.	皮膚病診療。	1 : 782-786, 1979.
110.	占部 治邦	皮膚真菌症の臨床。	日皮会誌。	89 : 944-946, 1979.
111.	倉員 正俊 占部 治邦	Etretinate (Ro 10-9359) による角化症の治療。	西日皮膚。	42 : 864-869, 1980.
112.	本房 昭三 真崎 治行 占部 治邦	内臓真菌症の菌学的診断。	日本臨床。	38 : 139-145, 1980.
113.	日野由和夫 佐藤実子 占部 治邦	Hydroacanthoma Simplex (図説)。	西日皮膚。	42 : 945-946, 1980.
114.	今山 修平 幸田 弘 占部 治邦	クモ状血管腫の電子顕微鏡による研究。	西日皮膚。	42 : 977-985, 1980.

- |      |                                  |  |                     |                          |
|------|----------------------------------|--|---------------------|--------------------------|
| 115. | 松本 忠彦<br>占部 治邦<br>栗谷 典量          | 外用抗真菌剤の臨床効果—足白癬にたいする Clotrimazole 新液剤の有効性と安全性の検討—.             | 西日皮膚.               | 42 : 1044-1048,<br>1980. |
| 116. | 占部 治邦<br>旭 正一                    | 限界線照射による皮膚障害.  | 日医新報.               | 2936 : 37-40,<br>1980.   |
| 117. | 宮岡 達也<br>本房 昭三<br>幸田 弘<br>占部 治邦  | Keratoacanthoma Centrifugum Marginatum (図説).                   | 西日皮膚.               | 42 : 377-378,<br>1980.   |
| 118. | 宮岡 達也<br>本房 昭三<br>幸田 弘<br>占部 治邦  | Keratoacanthoma Centrifugum Marginatum.                        | 西日皮膚.               | 42 : 390-393,<br>1980.   |
| 119. | 今山 修平<br>幸田 弘<br>占部 治邦           | 動静脈吻合と Glomus 腫瘍の電子顕微鏡による研究.                                   | 西日皮膚.               | 42 : 255-268,<br>1980.   |
| 120. | S-27 研究<br>班                     | ウイルス性疣贅にたいする S-27 の二重盲検法による臨床効果の検討.                            | 西日皮膚.               | 42 : 289-296,<br>1980.   |
| 121. | 西谷 敬子<br>占部 治邦                   | 帯状疱疹の薬物療法.   | 臨床と研究.              | 57 : 184-186,<br>1980.   |
| 122. | 占部 治邦<br>幸田 弘                    | 熱傷創に対する Silver Sulfadiazine Cream (T-107) と Gentamicin 軟膏の比較検討 | 熱傷.                 | 6 : 87-96, 1980.         |
| 123. | 占部 治邦                            | 蕁麻疹.   | 臨床と研究.              | 58 : 78-79,<br>1981.     |
| 124. | 占部 治邦                            | 薬疹.  | 臨床と研究.              | 58 : 80, 1981.           |
| 125. | 日野由紀夫<br>前川美智子<br>今山 修平<br>占部 治邦 | Zosteriform Herpes Simplex.                                    | 西日皮膚.               | 43 : 197-198,<br>1981.   |
| 126. | 占部 治邦                            | PCB Poisoning (Yusho) in Japan.                                | Clin. Med. (Taipei) | 7 : 223-229,<br>1981.    |
| 127. | 占部 治邦<br>本房 昭三                   | 九州地方の白癬菌相.   | 真菌誌.                | 21 : 221-226,<br>1981.   |
| 128. | Amcinoide<br>濃度研究班               | Amcinoide 外用剤の至適濃度設定に関する臨床的研究.                                 | 西日皮膚.               | 43 : 443-448,<br>1981.   |
| 129. | 占部 治邦<br>松本 忠彦                   | Opportunistic infection としての真菌感染症.                             | 皮膚病診療.              | 3 : 311-319,<br>1981.    |
| 130. | 和田 秀敏<br>占部 治邦                   | 凍結乾燥豚真皮 (KT80) の臨床統計.  | 熱傷.                 | 7 : 135-141,<br>1981.    |
| 131. | 占部 治邦                            | 病原真菌の二形性.  | 真菌誌.                | 22 : 28-36,<br>1986.     |
| 132. | 今山 修平<br>占部 治邦<br>幸田 弘           | Multiple Glomus Tumor (図説).                                    | 西日皮膚.               | 43 : 735-736,<br>1981.   |
| 133. | 倉員 正俊<br>占部 治邦                   | Etretinate (経口レチノイド) による皮膚疾患の治療.                               | 皮膚臨床.               | 23 : 1643-1648,<br>1981. |

134. 占部 治邦 乾癬の温熱療法—臨床効果の検討, 西日皮膚, 43: 909-916, 1981.  
西谷 敬子  
今山 修平  
旭 正一
135. 今山 修平 乾癬の温熱療法—電子顕微鏡による 西日皮膚, 43: 917-923, 1981.  
占部 治邦 観察—.
136. 武石 正昭 Lichen Sclerosus et Atrophicus (図 西日皮膚, 43: 1283-1284, 1981.  
占部 治邦 説).
137. 占部 治邦 Hyperthemia in the Treatment of Arch. Dermatol. 117: 770-774, 1981.  
西谷 敬子 Psoriasis,  
幸田 弘
138. Betamethasone 17, 21-di- 皮膚, 24: 99-12, 1981.  
propionate 外用剤の各種皮膚疾患 に対する有用性の検討。臨床 研究班
139. 藤田 恵一 Cefadroxil の浅在性疾患に対する 臨床評価, 10: 175-200, 1982.  
占部 治邦 臨床評価, 一二重盲検法による L-  
武石 正昭 -Cephalexin との薬効比較。  
他
140. デルミット デルドミットゲルの臨床効果の検 西日皮膚, 44: 87-90, 1982.  
ゲル研究班 討。
141. ピメプロ Pimeprofen 外用剤の比較による臨 西日皮膚, 44: 213-224, 1982.  
フェン臨床 床効果の検討。  
研 究 班
142. Pandel 臨床 0.1% Hydrocortisone 17-Butyrate 西日皮膚, 44: 644-656, 1982.  
研 究 班 21-Propionate 外用剤 (Pandel 軟膏 およびクリーム) の二重盲検法による比較臨床試験成績。
143. 武田 克之 0.12% Dexamethasone 17-valerate 皮膚科紀要, 77: 271-281, 1982.  
占部 治邦 軟膏の全身への影響—0.12%  
武石 正昭 Betamethasone 17-Valerate 軟膏  
他 との比較—。
144. 占部 治邦 小児の熱傷, 日小皮会誌, 1: 58-61, 1982.
145. 西谷 敬子 Reiter's Disease (図説), 西日皮膚, 44: 929-830, 1982.  
宮原 裕子  
占部 治邦
146. 旭 正一 Purification and Characterization of J. Invest. Dermatol. 78: 38-43, 1982.  
上田 説子 a New Peptide Antigen Extracted from Dermatophyte Mycelia,  
倉員 正俊  
占部 治邦
147. 占部 治邦 皮膚カンジダ症の診断と治療, 大塚薬報, 356: 1-4, 1982.
148. 占部 治邦 皮膚深部黴菌病在日本, Cli. Med. (Taipei) 11: 12-22, 1983.
149. 旭 正一 昭和55年度—57年度の年次検診に 福岡医誌, 74: 276-279, 1983.  
占部 治邦 おける油症皮膚症状の変化。  
利谷 昭治
150. 西谷 敬子 非ステロイド系抗炎症外用剤, 西日皮膚, 45: 53-59, 1983.  
占部 治邦  
旭 正一

151.	DV - O 臨床研究班	0.12% Dexamethasone 17-valerate 軟膏の二重盲検法による有用性の検討。	皮膚。	25 : 473-485, 1983.
152.	DV 軟膏研究班	0.12%Dexamethasone 17-valerate 軟膏の各種皮膚疾患に対する臨床試験成績。	皮膚。	25 : 486-492, 1983.
153.	N-5' 皮膚科研究班	アトピー皮膚炎に対する N-5' の臨床評価。	西日皮膚。	45 : 621-637, 1983.
154.	ミロリヂン K 帯状疱疹研究班	帯状疱疹に対する K-587 (ミロリヂン K) の二重盲検法による臨床薬効評価。	西日皮膚。	45 : 667-675, 1983.
155.	ミロリヂン K 青年扁平疣贅研究班	青年性扁平疣贅に対するミロリヂン K の二重盲検法による有用性の検討。	西日皮膚。	45 : 676-680, 1983.
156.	東レ・インターフェロン疣贅研究班	尋常疣贅に対するヒト線維芽細胞インターフェロンの局所内投与。	西日皮膚。	45 : 850-855, 1983.
157.	Bifonazole 研究班	皮膚真菌症にたいする Bifonazole クリーム of 臨床的検討—二重盲検法による Clotrimazole クリームとの比較—。	西日皮膚。	45 : 827-838, 1983.
158.	中山樹一郎 安元慎一郎 高木 喬 八島 豊 占部 治邦	Studies of Cell and Organ Culture of Psoriatic and Normal Epidermis in vitro.	J. Dermatol.	10 : 411-419, 1983.
159.	占部 治邦	梅毒の抗生物質療法。	臨床医。	10 : 1516-1518, 1984.
160.	和田 秀敏 占部 治邦	Surgical Treatment of Genital Paget's Disease in Men.	Annl. Plast. Surg.	13 : 199-204, 1984.
161.	今山 修平 占部 治邦	Human Psoriatic Skin Lesions Improved with Local Hyperthermia : An Ultrastructural Study.	J. Cut. Pathol.	11 : 45-52, 1984.
162.	占部 治邦	梅毒の治療について。	皮膚臨床。	26 : 107-108, 1984.
163.	宮岡 達也 真崎 治行 本房 昭三 占部 治邦	最近の九州における白癬菌相。	西日皮膚。	46 : 374-377, 1984.
164.	占部 治邦 徳永 孝道	陰部外下疳 (図説)。	西日皮膚。	46 : 293-294, 1984.
165.	占部 治邦 旭 正一	Past and Current Dermatological Status of Yusho Patients.	Am. J. Indust. Med.	5 : 5-12, 1984.
166.	RS-448 研究班	皮膚真菌症に対する RS-44872 クリーム臨床試験	西日皮膚。	46 : 792-801, 1984.
167.	占部 治邦 占部 慎二	性病 (STD) の治療。	臨床と研究	61 : 1819-1822, 1984.
168.	RS-44872 ソリューション研究班	各種皮膚真菌症に対する RS-44872 (硝酸スルコナゾール) ソリューションの臨床評価。	西日皮膚。	46 : 947-959, 1984.

- |      |   |  |                |                          |
|------|---|--|----------------|--------------------------|
| 169. | 西谷 敬子<br>占部 治邦  | 非ステロイド系消炎外用剤.  | 皮膚臨床.          | 26 : 657-664,<br>1984.   |
| 170. | RS-44872<br>ソリューション研究<br>班                            | 皮膚真菌症に対する RS-44872 ソ<br>リューションの臨床試験 (Pilot<br>Study) 成績.                                     | 西日皮膚.          | 46 : 960-965,<br>1984.   |
| 171. | 今山 修平<br>占部 治邦  | Pericytes on the Dermal Microvas-<br>culature of the Rat Skin.                               | Anat. Embryol. | 196 : 271-274,<br>1984.  |
| 172. | 710674-S<br>研究 班                                      | 抗真菌外用剤 710674-S クリームお<br>よびゲルの皮膚真菌症に対する多施<br>設共同研究による臨床効果の検討.                                | 皮膚.            | 26 : 445-457,<br>1984.   |
| 173. | 山野 龍文<br>安元慎一郎<br>今山 修平<br>占部 治邦                      | 皮膚科領域における TMS-19-QGC<br>錠の臨床的検討  | Chemotherapy.  | 32 : 525-531,<br>1984.   |
| 174. | 藤田 恵一<br>占部 治邦<br>仁位 泰樹<br>陣内 恭子<br>他                 | 浅在性化膿疾患に対する DL-8280<br>と Cefaclor との二重盲検比較臨床<br>試験成績.  | 感染学誌.          | 58 : 793-819,<br>1984.   |
| 175. | 磯田美登里<br>大崎 光彦<br>安元慎一郎<br>占部 治邦                      | Reduction of Chemotactic Activ-<br>ities in Psoriatic Lesions by<br>Hyperthermia Treatments. | J. Dermatol.   | 11 : 386-390,<br>1984.   |
| 176. | 松本 忠彦<br>占部 治邦  | 真菌感染症の現状.  | 生体防御.          | 1 : 83-92, 1984.         |
| 177. | Ketocon-<br>azole 皮膚<br>科 研究 班                        | 白癬に対する Ketoconazole の臨床<br>評価—Griseofulvin との無作為化比<br>較試験による検討一.                             | 基礎と臨床.         | 18 : 423-441,<br>1984.   |
| 178. | Ketocon-<br>azole 皮膚<br>科 研究 班                        | 爪白癬に対する Ketoconazole と<br>Griseofulvin との二重盲検比較試<br>験.                                       | 基礎と臨床.         | 18 : 733-746,<br>1984.   |
| 179. | 武石 正昭<br>伊川 知子<br>占部 治邦                               | Ara-C 軟膏の帯状疱疹に対する臨<br>床効果.   | 西日皮膚.          | 46 : 1402-1185,<br>1984. |
| 180. | 今山 修平<br>占部 治邦  | Electron Microscopic Study of the<br>Hemangiomas in POEMS Syn-<br>drome.                     | J. Dermatol.   | 11 : 550-559,<br>1984.   |
| 181. | DDA 外用<br>剤臨床研究<br>班                                  | Diflorasone Diacetate (DDA) 軟膏<br>の臨床効果の検討.  | 皮膚.            | 26 : 361-373,<br>1984.   |
| 182. | Clobetasol<br>17-Propio-<br>nate 外用<br>剤難治皮膚<br>疾患研究班 | 紅皮症に対する Clobetasol<br>17-propionate 外用剤の臨床的有用<br>性の検討.                                       | 西日皮膚.          | 46 : 1162-1169,<br>1984. |
| 183. | DDA 外用<br>剤 研究 班                                      | Diflorasone Diacetate (DD) 軟膏の<br>臨床効果の検討.   | 皮膚.            | 26 : 374-392,<br>1984.   |
| 184. | DDA 外用<br>剤 研究 班                                      | Diflorasone Diacetate 外用剤の各<br>種皮膚疾患に対する臨床試験成績.  | 皮膚.            | 26 : 393-404,<br>1984.   |
| 185. | Budesonide<br>外用剤研究<br>班                              | 難治性を含む各種皮膚疾患に対す<br>る 0.05% Budesonide 外用剤の臨床効<br>果の検討.                                       | 薬理と治療.         | 13 : 325-344,<br>1985.   |

186. クロベタゾンB外用剤臨床研究班 アトピー皮膚炎に対する酪酸クロベタゾン軟膏の長期使用による全身作用の検討。 西日皮膚, 47: 123-129, 1985.
187. Oxiconazole 研究班 Oxiconazole クリームの皮膚真菌症に対する臨床評価—Well-Controlled Comparative Study による Clotrimazole クリームとの比較—。 西日皮膚, 47: 89-100, 1985.
188. 朔民子 多発性神経炎と内分泌症状を伴う Plasma Cell Dyscrasia (高月病) —特に皮膚所見について—。 西日皮膚, 47: 224-229, 1985.  
今山修平  
占部治邦  
林靖生
189. 利谷昭治 昭和58~59年度の年次検診における油症の皮膚症状。 福岡医誌, 76: 239-243, 1985.  
旭正一  
本房昭三  
占部治邦
190. KH-101研究班 KH-101軟膏(リフラップ軟膏)の皮膚潰瘍に対する臨床効果—多施設によるオープンスタディー—。 西日皮膚, 47: 308-320, 1985.
191. KH-101研究班 KH-101軟膏(リフラップ軟膏)の皮膚潰瘍に対する治療効果の検討。 西日皮膚, 47: 321-330, 1985.
192. 占部治邦 Past and Current Dermatological Status of Yusho Patients. Environ. Hlth. Perspect. 59: 11-15, 1985.  
旭正一
193. 710674-S 研究班 皮膚真菌症に対する710674-Sクリームの有用性の検討。 西日皮膚, 47: 105-116, 1985.
194. Sch-30500腫瘍研究会メラノーマ分科会 Sch-30500の皮膚悪性腫瘍に対する臨床的研究。 西日皮膚, 47: 2302-307, 1985.
195. 占部治邦 0.05% Budesonide 外用剤の臨床効果ならびに安全性の臨床効果ならびに安全性の検討。 皮膚, 27: 130-152, 1985.  
磯田美登里
196. Budesonide外用剤至適濃度研究班 Budesonide 外用剤の至適濃度に関する臨床的検討。 皮膚, 27: 165-176, 1985.
197. 山野龍文 マラセチア毛包炎(図説)。 西日皮膚, 47: 413-414, 1985.  
松本忠彦  
占部治邦
198. 山野龍文 マラセチア毛包炎。 西日皮膚, 47: 434-439, 1985.  
松本忠彦  
占部治邦
199. TMS-19-Q臨床試験班 浅在性皮膚細菌感染症における分離菌とマクロライド系抗生物質を中心とした薬剤感受性。 西日皮膚, 47: 523-529, 1985.
200. Diflorasone Diacetate 研究班 Diflorasone Diacetate 外用剤長期投与による局所および全身性影響。 西日皮膚, 47: 530-537, 1985.
201. 占部治邦 TMS-19-QO錠の浅在性化膿疾患に対する基礎的臨床的検討。 Jpn. J. Antibiotics, 38: 575-594, 1985.  
山野龍文
202. 占部治邦 TMS-19-Q・GC錠の浅在性皮膚化膿症に対する臨床評価—Midecamycinを対照とした2重盲検比較試験—。 Jpn. J. Antibiotics, 38: 1331-1354, 1985.  
山野龍文  
岡本光世

203. 占部 治邦 浅在性化膿性疾患に対する  
吉利 優子 Lenampecillin の使用経験。  
大谷 朋子 他 Jpn. J. Antibiotics. 38 : 1423-1467,  
1985.
204. Budesonide 外用剤の長期投与試験  
外用剤長期 一臨床効果および全身的影響の検討  
投与研究班 西日皮膚. 47 : 727-235,  
1985.
205. 占部 治邦 Lenampicillin の浅在性化膿性疾患  
徳永 孝道 に対する臨床評価—Amoxicillin を  
吉利 優子 対照薬とした二重盲検比較試験。  
Jpn. J. Antibiotics. 38 : 1794-1818,  
1985.
206. 武下 泰三 Eccrine Angiomatous Hamartoma  
今山 修平 (図説).  
占部 治邦 西日皮膚. 47 : 809-810,  
1985.
207. 本房 昭三 抗真菌剤開発の歴史と基礎的事項。  
占部 治邦 日独医報. 30 : 412-422,  
1985.
208. 本房 昭三 スポロトリコーシス, 黒色真菌感染  
古賀 哲也 症の治療  
山野 龍文 一とくにヨウ化カリウムのスポロト  
占部 治邦 リコーシスにたいする作用機序につ  
いて一。  
真菌誌. 26 : 152-158,  
1985.
209. 占部 治邦 最近の白癬。  
日皮会誌. 4 : 552-555,  
1985.
210. 吉利 優子 異なる皮膚疾患を生じた一卵性双生  
磯田美登里 児例—アトピー皮膚炎と尋常乾癬  
占部 治邦 一。  
臨皮. 39 : 33-36,  
1985.
211. D. D 研究 Diflorasone Diacetate 外用剤長期  
班 投与による局所および全身的影響。  
西日皮膚. 47 : 530-537,  
1985.
212. 西村 正幸 Extracellular Matrix in Hepatic  
旭 正一 Granulomas of Mice Infected with  
林 正男 Schistosoma mansoni.  
高園 磯子  
田中 幸男  
幸田 弘  
占部 治邦 Arch. Path. Lab. 109 : 813-818,  
Med. 1985.
213. 占部 治邦 Terfenadine の至適投与量の検討。  
他 一慢性蕁麻疹を対照とした二重盲検  
群間比較試験成績一。  
臨床医薬. 1 : 1283-1295,  
1985.
214. 入来 敦 包虫症。  
今山 修平 西日皮膚. 48 : 9-12, 1986.  
宮岡 達也  
占部 治邦
215. 中山樹一郎 トランサミン注射剤の急性湿疹・皮  
松本 忠彦 膚炎群, 蕁麻疹, 薬疹, 中毒疹に対  
和田 秀敏 する臨床効果。  
占部 治邦 他 西日皮膚. 48 : 108-113,  
1986.
216. 中山樹一郎 ヘルペス皮膚感染症に対するキロサ  
占部 治邦 イド—スタデルムクリーム外用剤の  
使用経験。  
医薬の門. 26 : 123-127,  
1986.
217. DFBA 外用剤臨床研 Difluprednate 軟膏およびクリーム  
究班 の左右比較試験による臨床効果の検  
討。  
西日皮膚. 48 : 119-135,  
1986.

218. 今山修平 菌状息肉症。 皮膚病診療, 8: 157-164, 1986.  
 中野 勉子  
 入来 敦  
 占部 治邦
219. 真菌抗原研 真菌抗原の実用化に関する研究。 西日皮膚, 48: 267-277, 1986.  
 究 班
220. 中山樹一郎 Properties of Partially Purified J. Dermatol. 13: 448-455, 1986.  
 大崎 光彦 Mouse Epidermal Transg-  
 永江祥之介 lutaminase.  
 旭 正一  
 占部 治邦
221. MD 製剤研 Membrane Dressing を用いた Be- 西日皮膚, 48: 313-325, 1986.  
 究班 clobethasone Dipropionate 含有外  
 用剤の左右比較試験による臨床効果  
 の検討
222. Ketotifen 慢性蕁麻疹に対するアレルギー剤 西日皮膚, 48: 333-343, 1986.  
 皮膚科研究 Ketotifen の臨床評価。  
 班
223. Ketotifen アトピー皮膚炎に対する抗アレルギー剤 Ketotifen シロップの臨床 西日皮膚, 48: 417-423, 1986.  
 皮膚科研究 評価。  
 班
224. 今山修平 Von Recklinghausen 病患者におけ 西日皮膚, 48: 491-499, 1986.  
 八島 豊 る神経線維腫の間質の微細構造。  
 入来 敦  
 佐藤恵実子  
 占部 治邦
225. KH-101 研 KH-101 軟膏(リフラップ軟膏)の皮 西日皮膚, 48: 553-562, 1986.  
 究班 膚潰瘍に対する治療効果の検討。
226. Ketotifen アトピー皮膚炎に対する抗アレルギー剤 Ketotifen シロップ剤の臨床 西日皮膚, 48: 534-552, 1986.  
 皮膚科研究 評価。  
 班
227. 占部 治邦 Sporotrichosis, Intl. J. Dermatol. 25: 255-257, 1986.  
 本房 昭三
228. 占部 治邦 Terfenadine の湿疹・皮膚炎群およ 臨床医薬, 2: 723-734, 1986.  
 中山樹一郎 び痒痒症に対する臨床試験成績。  
 伊川 知子  
 他
229. 中山樹一郎 リザベンの血清 GOT, GPT 測定に 西日皮膚, 48: 950-954, 1986.  
 旭 正一 およぼす影響。  
 占部 治邦  
 他
230. 中山樹一郎 慢性湿疹・皮膚炎群に対するヒスタ 西日皮膚, 48: 977-982, 1986.  
 松本 忠彦 グロビン間歇適量療法の効果。  
 武石 正昭  
 占部 治邦  
 他
231. 和田 秀敏 Hypoplasty of the Breast Due to Aesth. Plast. Surg. 10: 137-141, 1986.  
 陣内 恭子 X-Ray Irradiation.  
 占部 治邦
232. 占部 治邦 最近の真菌症と抗真菌剤「序言」。 臨床医薬情報, 26: 686-687, 1986.



233.	今山 修平 占部 治邦	Fine Structural Deformation of the Dermal Capillary Following Immersion Fixation Procedure.	J. Dermatol.	13 : 339-344, 1986.
234.	占部 治邦 中山樹一郎 他	Cefuroxime axetil (CXM-AX) の皮膚組織内濃度と臨床効果の検討.	Chemotherapy.	34 (S-5) : 967-1005, 1986.
235.	占部 治邦 中山樹一郎 他	浅在性化膿性疾患に対する Ciprofloxacin と Norfloxacin との二重盲検比較試験成績.	Chemotherapy.	34 : 1272-1986, 1986.
236.	占部 治邦	序論—皮膚真菌症の概論.	今日の医学.	69 : 6-11, 1986.
237.	今山 修平 伊川 知子 占部 治邦	Basal Lamina of the Dermal Capillary : Concentric Multilamination Following Regeneration Processes.	J. Dermatol.	13 : 456-459, 1986.
238.	桐生 美麿 占部 治邦	Nodular Syphilid (図説).	西日皮膚.	49 : 1-2, 1987.
239.	占部 治邦 他	0.1% Alclometasone Dipropionate (S-3460) 軟膏の有用性の検討.	臨床医薬.	3 : 65-88, 1987.
240.	占部 治邦 他	0.1% Alclometasone Dipropionate (S-3460) 軟膏の各種皮膚疾患に対する臨床試験成績.	臨床医薬.	3 : 89-103, 1987.
241.	占部 治邦 西谷 敬子 他	単純ヘルペスウイルス感染症に対するアシクロビル錠.	臨床医薬.	3 : 167-175, 1987.
242.	占部 治邦 西谷 敬子 他	単純ヘルペス感染症に対するアシクロビル錠の投与量設定に関する臨床試験成績.	臨床医薬.	3 : 337-350, 1987.
243.	S-3460 外用剤臨床研究班	0.1% Alclomelason Dipropionate (S-3460) の軟膏の長期投与および投与試験—全身のおよび局所的影響と臨床効果の検討—.	基礎と臨床.	21 : 305-313, 1987.
244.	八島 豊 旭 正一 占部 治邦	Merkel Cell Tumor (図説).	西日皮膚.	49 : 207-208, 1987.
245.	長山 淳哉 清原千香子 福田 篤志 中村 好一 広畑 富雄 旭 正一 吉村 健清 占部 治邦	油症患者の芳香族炭化水素水酸化酵素活性に関する研究.	福岡医誌.	78 : 301-304, 1987.
246.	利谷 昭治 旭 正一 占部 治邦	昭和 60-61 年度の年次検診における油症皮膚症状の推移.	福岡医誌.	78 : 349-354, 1987.
247.	中山樹一郎 福島 幸子 旭 正一 占部 治邦	抗脂血剤の奏効した尋常乾癬.	西日皮膚.	49 : 320-324, 1987.
248.	中山樹一郎 樋口 理恵 福島 幸子 占部 治邦	円形脱毛症に対するカクレインデボー局注の使用経験.	西日皮膚.	49 : 515-521, 1987.

249. 占部 治邦 浅在性化膿性疾患に対する Cefuroxime Axetil と Cefaclor の二重盲  
中山樹一郎 他 検比較検討. Chemotherapy. 35 : 313-346, 1987.
250. 山野 龍文 スポロトリコーシスー組織内に多数  
本房 昭三 の菌要素が認められる症例について  
真崎 治行 の検討一. 西日皮膚. 49 : 671-676, 1987.
251. 中山樹一郎 Hyperthermic Effects on Peripheral  
安元慎一郎 Lymphocytes Isolated from a  
壁村まゆみ Chronic Lymphocytic Lymphoma/  
今山 修平 Leukemia Patient In Vitro.  
旭 正一 J. Dermatol. 14 : 187-194,  
占部 治邦 1987.
252. 占部 治邦 最近 10 年間に於けるわが国の医真  
真崎 治行 菌学, 真菌症の動向と将来の展望. 真菌誌. 28 : 73-82, 1987.
253. 今山 修平 A New Concept of Basal Cell  
八島 豊 Epithliomas Based on the Three-  
樋口 理恵 Dimensional Growth Pattern of  
占部 治邦 the Superficial Multicentric Type. Am. J. Pathol. 128 : 497-504, 1987.
254. 桐生 美麿 熱傷瘢痕上に生じた異型線維黄色  
和田 秀敏 腫. 熱傷. 13 : 274-278, 1987.  
占部 治邦
255. Ro22-8181 組換え型ヒト白血球インターフェロ  
皮膚科研究 ン A (RLFN-aAiRo22-8181) の帯状  
班 疱疹にたちする二重盲検比較試験. 西日皮膚. 49 : 902-909, 1987.
256. 松田 哲男 Pigmented Spindle Cell Nevus. 西日皮膚. 49 : 1022-1025, 1987.  
旭 正一  
占部 治邦
257. 旭 正一 A Case of "Yusho"-Like Skin  
占部 治邦 Eruptions Due to Halogenated  
PCB-analogue Compounds. Chemosphere. 16 : 2069-2072, 1987.
258. 長山 淳哉 Aryl Hydrocarbon Hydroxylase  
清原千香子 Activity in Yusho Patients. Chemosphere. 16 : 2073-2076, 1987.  
中村 好一  
旭 正一  
広畑 富雄

## その他

259. 占部 治邦 乳児カンジダ症の増加. 日医ニュース 279 号. 1973.
260. 占部 治邦 Regional Conference of Dermatol-  
ogy (Singapore 1974) に出席して. 西日皮膚. 36 : 608-610, 1974.
261. 占部 治邦 対談 小児の皮膚疾患. 臨床と研究. 52 : 2079-2087, 1975.  
森口 正
262. 占部 治邦 第 28 回国際性病学会に出席して. VD. 57 : 56-58, 1976.
263. 占部 治邦 皆見省吾名誉教授を偲んで. 西日皮膚. 38 : 145-147, 1976.
264. 占部 治邦 Pierre de Graciansky 教授のプロ  
フィール. 皮膚臨床. 18 : 147-148, 1976.
265. 占部 治邦 皮膚科教育における特殊領域の問題. 日皮会誌. 87 : 738, 1977.

266. 占部 治邦 世界の皮膚科学者 (Prof. J. Lamar Callaway). 西日皮膚. 42 : 1057-1058, 1980.
267. 占部 治邦 総会シンポジウム: Office Dermatology に何を望むか. 皮膚臨床. 23 : 113-115, 1981.
268. 占部 治邦 梅毒治療とペニシリン. 日医ニュース. 466 : 10-11, 1981.
269. 宇都宮徳馬 座談会 宇都宮徳馬氏を囲んで. 西日皮膚. 44 : 262-270, 1982.  
樋口謙太郎  
小堀辰治  
安田利顕  
占部 治邦
270. 占部 治邦 皮膚カンジダ症の診断と治療. 大塚薬報. 356 : 1-4, 1982.
271. 占部 治邦 第6回日本小児皮膚科学会の話題. 皮膚病診療. 5 : 102-109, 1983.  
山本 一哉
272. 占部 治邦 中国の皮膚科を語る. 皮膚病診療. 5 : 270-284, 1983.  
小川秀興  
今村貞夫  
山本昇壯  
西岡清  
滝内石夫  
安田利顕
273. 久木田 淳 座談会 留学の黎明期. 西日皮膚. 47 : 70-75, 1985.  
吉田良夫  
三浦祐晶  
占部 治邦
274. 占部 治邦 温熱療法の思い出. 西日皮膚. 8 : 198-199, 1986.
275. 占部 治邦 最近の抗真菌剤とその問題点. 皮膚病診療. 8 : 663-677, 1986.  
松崎統  
本房 昭三
276. 占部 治邦 定年退官にあたって. 学士鍋 63号. P. 35-37, 1987.

## 教室業績 (1971~1987)

### 著書

- |     |                |  |                                  |                      |
|-----|----------------|--|----------------------------------|----------------------|
| 1.  | 旭 正一           | 抗体クロブリンの生合成.                             | 免疫化学, 朝倉書店                       | P. 615-639,<br>1973. |
| 2.  | 旭 正一           | 皮膚疾患の治療.                                 | 最新治療指針と処方集, 大道学館出版部              | P. 574-583,<br>1973. |
| 3.  | 旭 正一           | 癬風.                                      | 皮膚病治療二頁の秘訣, 金原出版                 | P. 232-233,<br>1976. |
| 4.  | 旭 正一           | 結節性硬化症.                                  | 症候群-1977, 一概念の変遷と今日的意義-日本臨床社     | P. 786-787,<br>1977. |
| 5.  | 金出 明子          | 梅毒患者における細胞性免疫の検討-とくに抗療梅毒-.               | 日本リディアオリリー協会 53 年度年報.            | P. 79-83, 1978.      |
| 6.  | 旭 正一           | 熱傷.                                      | プライマリケアのための救急医療, 南山堂             | P. 195-206,<br>1981. |
| 7.  | 幸田 弘           | 目で見えるコルチコステロイド外用剤の副作用-外用剤をより有効に使用するために-. | 大日本製薬.                           | P. 1-56, 1978.       |
| 8.  | 松本 忠彦<br>磯田美登里 | 慢性皮膚粘膜カンジダ症.                             | 新小児医学大系第 19 巻, 中山書店              | P. 300-308,<br>1981. |
| 9.  | 松本 忠彦          | 免疫刺激方策.                                  | 内科 Q & A 感染症 (池本秀雄・国井乙彦編), 金原出版. | P. 8-9, 1981.        |
| 10. | 松本 忠彦          | 慢性皮膚粘膜カンジダ症.                             | 現代皮膚科学大系第 7 巻感染性皮膚症 III, 中山書店.   | P. 180-185,<br>1982. |
| 11. | 松本 忠彦<br>桐生 博愛 | 免疫不全.                                    | 皮膚と全身, 金原出版.                     | P. 482-507,<br>1982. |
| 12. | 旭 正一           | 皮膚疾患.                                    | 最新治療指針と処方集, 大道学館出版部              | P. 676-686,<br>1984. |
| 13. | 旭 正一           | 口囲皮膚炎・酒鼓様皮膚炎                             | 皮膚科 Q & A1, 金原出版                 | P. 314-316,<br>1985. |
| 14. | 旭 正一           | 梅毒の治療.                                   | 皮膚科 Q & A2, 金原出版                 | P. 296-298,<br>1985. |
| 15. | 今山 修平          | クモ状血管腫.                                  | 皮膚科診断治療大系 第 4 巻, 講談社             | P. 99, 1985.         |
| 16. | 旭 正一           | 自己免疫性水疱症の治療 金製剤.                         | 皮膚科 MOOK 第 3 巻, 水疱症と膿疱症          | P. 19-22, 1985.      |
| 17. | 松本 忠彦          | 感染症「真菌症」.                                | 皮膚科免疫組織アトラス, 南江堂                 | P. 116-117,<br>1986. |
| 18. | 松本 忠彦          | 皮膚真菌症.                                   | 薬物療法の実際第 3 版, アサヒメディカル           | P. 976-981,<br>1986. |
| 19. | 旭 正一           | 種痘様水疱症                                   | 皮膚疾患最新の治療 '87~'88, 南江堂           | P. 91, 1987.         |

論 文

- |     |                              |  |                            |                        |
|-----|------------------------------|--|----------------------------|------------------------|
| 20. | 利谷 昭治<br>北村 公一               | 油症（塩化ビフェニール中毒症）の臨床的観察とくに皮膚所見のその後の経過。   | 福岡医誌。                      | 62 : 132-138,<br>1971. |
| 21. | 五島 應安                        | Staphylococcus epidermidis の病原性（追加発言）。   | 皮膚臨床。                      | 13 : 110-116,<br>1971. |
| 22. | 樋口講太郎                        | 梅毒。  | 治療。                        | 53 : 736-739,<br>1971. |
| 23. | 北村 公一<br>安川 典宏               | 星芒状小体のみられた白癬性肉芽腫（図説）。  | 西日皮膚。                      | 33 : 1-2, 1971.        |
| 24. | 北村 公一<br>安川 典宏               | 星芒状小体のみられた白癬性肉芽腫の1例。   | 西日皮膚。                      | 33 : 9-15, 1971.       |
| 25. | 松本 忠彦                        | On the Family Gymnoascaceae : Especially as the Perfect States of the Dermatophytes. | Jpn. J. Dermatol., Ser. B. | 81 : 25-32,<br>1971.   |
| 26. | 吉永 博幸                        | 皮膚科領域における MDS コーワ錠の使用経験。   | 治療と新薬。                     | 25 : 417-422,<br>1971. |
| 27. | 松本 忠彦                        | 医真菌学における最近の進歩。   | 臨皮。                        | 25 : 417-422,<br>1971. |
| 28. | 利谷 昭治                        | 薬剤アレルギー。   | 臨床と研究。                     | 48 : 140-145,<br>1971. |
| 29. | 利谷 昭治<br>大隈 貞夫               | Eccrine Spiradenoma（図説）。   | 西日皮膚。                      | 33 : 211-212,<br>1971. |
| 30. | 五島 應安                        | Atypical Tinea（図説）。  | 西日皮膚。                      | 33 : 449-450,<br>1971. |
| 31. | 松本 忠彦                        | 好ケラチン性真菌。  | 西日皮膚。                      | 33 : 539-541,<br>1971. |
| 32. | 中島 幸一<br>利谷 昭治<br>志村 秀彦<br>他 | Fucidin の基礎的および臨床的研究。  | Chemotherapy.              | 19 : 848-854,<br>1971. |
| 33. | 安田 勝                         | Lupus Vulgaris（図説）。  | 西日皮膚。                      | 34 : 1-2, 1972.        |
| 34. | 松本 忠彦<br>安田 勝<br>北村 公一       | 2重盲検法による Fluocinolone Acetonide Acetate FAPG クリーム（RS-410 FAPG クリーム）の効果判定。            | 西日皮膚。                      | 34 : 50-57,<br>1972.   |
| 35. | 利谷 昭治                        | 梅毒一駆梅剤を中心に。  | 治療。                        | 54 : 654-659,<br>1972. |
| 36. | 安川 典宏<br>松本 忠彦               | Bullous Pemphigoid（図説）。  | 西日皮膚。                      | 34 : 35-36,<br>1972.   |
| 37. | 松本 忠彦<br>安田 勝                | Siccanin 軟膏・液の臨床使用成績。  | 西日皮膚。                      | 34 : 202-206,<br>1972. |
| 38. | 利谷 昭治                        | エリテマトーデスの免疫抑制療法。   | 西日皮膚。                      | 34 : 396-403,<br>1972. |
| 39. | 有吉 通泰<br>利谷 昭治               | 両上腕のみにみられた汗管腫。   | 西日皮膚。                      | 34 : 426-427,<br>1972. |

40.	安川 典宏 有吉 通泰	St 1106 クリームおよび軟膏の使用 経験.	西日皮膚.	34 : 446-451, 1972.
41.	有吉 通泰 安田 勝 末永 義則 安川 典宏 松本 忠彦	Ful-base Kowa 軟膏の臨床治験.	西日皮膚.	34 : 452-455, 1972.
42.	末永 義則 有吉 通泰	湿疹, 皮膚炎にたいする Propaderm クリーム. 軟膏の治療経験.	西日皮膚.	34 : 463-469, 1972.
43.	松本 忠彦 有吉 通泰	頑癬様皮膚カンジダ症.	真菌誌.	13 : 95-96, 1972.
44.	阿南 貞雄 野津 徹 有吉 通泰 田代 正昭 永広 雄一	フルベース・コーワ軟膏の使用経験.	西日皮膚.	34 : 625-635, 1972.
45.	利谷 昭治	昭和 46 年度一斉検診による油症患 者の皮膚所見.	福岡医誌.	63 : 392-395, 1972.
46.	松本 忠彦 安田 勝	Chronic Mucocutaneous Can- didiasis (図説).	西日皮膚.	34 : 661-662, 1972.
47.	安田 勝 松本 忠彦	疣状結節および結痂性肉芽腫様皮膚 病変を伴った慢性皮膚粘膜カンジダ 症の成人例.	西日皮膚.	34 : 687-696, 1972.
48.	松本 忠彦 有吉 通泰	皮膚科領域における Josamycin の 使用経験.	薬物療法.	5 : 107-108, 1972.
49.	松本 忠彦	Aspergillus flavus の奇形について.	日皮会誌.	82 : 1147-1149, 1972.
50.	松本 忠彦 副島 直子	Keratomyces (図説).	真菌誌.	13 : 157-158, 1972.
51.	松本 忠彦 副島 直子	角膜真菌症.	真菌誌.	13 : 199-202, 1972.
52.	有吉 通泰 末永 義則 松本 忠彦	Keratosis Follicularis Squamosa Dohi (図説).	西日皮膚.	35 : 1-2, 1973.
53.	有吉 通泰 末永 義則 松本 忠彦	Keratosis Follicularis Squamosa Dohi の母子例.	西日皮膚.	35 : 22-25, 1973.
54.	松本 忠彦 有吉 通泰	皮膚科領域におけるロイクロンカプ セルの使用経験.	診療と新薬.	11 : 175-177, 1973.
55.	安田 利顕 占部 治邦 中溝 慶生 他	Hydrocortisone 17-butyrate 外用 剤の 2 重盲検法による臨床効果の検 討.	西日皮膚.	85 : 152-158, 1973.
56.	幸田 弘	紅皮症の病理分類.	西日皮膚.	35 : 88-89, 1973.
57.	幸田 弘 安田 勝	化膿性疾患にたいする DKB の使用 経験.	西日皮膚.	35 : 159-162, 1973.
58.	日野由和夫 安田 勝	Collodion Baby (図説).	西日皮膚.	35 : 197-198, 1973.

59.	西尾 一方	Giant Cell Tumor of Tendon Sheath (図説).	西日皮膚.	35 : 199-200, 1973.
60.	安田 勝	頭部顔面有棘細胞癌の治療.	西日皮膚.	35 : 225-238, 1973.
61.	日野由和夫 安田 勝 吉田 春彦	Collodion Baby の1例.	西日皮膚.	35 : 275-283, 1973.
62.	西尾 一方 幸田 弘	Storiform Neurofibroma の1例.	西日皮膚.	35 : 284-291, 1973.
63.	旭 正一	パントシンによる各種皮膚疾患の治験.	西日皮膚.	35 : 314-319, 1973.
64.	松本 忠彦 有吉 通泰	皮膚科領域におけるコレキサミンの使用経験.	薬物療法.	6 : 211-123, 1973.
65.	五島 應安 深川 宗男	Propionylmarid の皮膚科領域における臨床的検討.	Chemotherapy.	21 : 1137-1142, 1973.
66.	松本 忠彦 有吉 通泰	Dyschromatosis Symmetrica Hereditaria (図説).	西日皮膚.	35 : 399-400, 1973.
67.	末永 義則 占部 治邦	コルチコイド軟膏効果判定における二重盲検法の検討—新しいコルチコイド剤 desoximetasone を用いての経験—.	医学のあゆみ.	87 : 222-232, 1973.
68.	有吉 通泰 松本 忠彦	Hidradenoma Papilliferum (図説).	西日皮膚.	35 : 519-520, 1973.
69.	有吉 通泰 松本 忠彦	Hidradenoma Papilliferum.	西日皮膚.	35 : 532-534, 1973.
70.	鈴木 達朗 日野由和夫	AGS 固型洗剤(ミノン)の使用経験.	西日皮膚.	35 : 634-636, 1973.
71.	末永 義則	新抗真菌外用剤 Hoe 296 の使用経験.	西日皮膚.	35 : 646-648, 1973.
72.	向井 正子 徳永三千子 末永 義則	皮膚疾患にたいするチオラの治験.	西日皮膚.	35 : 646-648, 1973.
73.	安田 勝	Porphyria Cutanea Tarda (図説).	西日皮膚.	35 : 675-676, 1973.
74.	有吉 通泰 松本 忠彦	皮膚科領域における Amoxycillin の使用経験.	Chemotherapy.	21 : 1812-1816, 1973.
75.	安田 勝 末永 義則	ビタミンEと晩発性皮膚ポルフィリン症.	西日皮膚.	35 : 702-706, 1973.
76.	旭 正一 利谷 昭治 上田 説子	尋常痤瘡にたいする0.01%ビタミンA酸乳剤性ローションの治療効果.	西日皮膚.	35 : 781-786, 1973.
77.	有吉 通泰	ネパールの皮膚病について.	西日皮膚.	35 : 801-806, 1973.
78.	松本 忠彦 有吉 通泰	Cephalexin の皮膚領域における臨床成績.	薬物療法.	7 : 143-148, 1974.
79.	松本 忠彦 有吉 通泰	皮膚科領域における Cephalexin Dry Syrup の使用終験.	薬物療法.	7 : 149-151, 1974.

80.	幸田 弘 旭 正一 利谷 昭治	昭和47年度一斉検診による油症患者の皮膚所見.	福岡医誌.	65:81-83, 1974.
81.	吉永 博幸	Pantethine と副腎皮質機能検査.	診療と新薬.	11:172-174, 1974.
82.	吉永 博幸	二重盲検法による Bufexamac Cream の治療.	西日皮膚.	36:34-88, 1974.
83.	日野由和夫 他	Betamethasone 17, 21-dipropionate 外用剤の二重盲検法による臨床効果の検討.	臨床評価.	2:271-297, 1974.
84.	幸田 弘	ステロイドホルモンの功罪—皮膚科領域から—.	福岡医誌.	65:176-186, 1974.
85.	市川 武城 西尾 一方	Exostosis Subungualis (図説).	西日皮膚.	36:127-128, 1974.
86.	末永 義則	タチオン 600 mg の使用経験.	薬理の治療.	2:119-122, 1974.
87.	旭 正一	免疫抑制剤による天疱瘡, 類天疱瘡の治療.	西日皮膚.	36:316-323, 1974.
88.	松本 忠彦 有吉 通泰 西本勝太郎	Trichophyton verrucosum によるケルスス禿瘡.	西日皮膚.	36:356-359, 1974.
89.	宮河 昭雄	表皮および毛根の核酸分解酵素.	西日皮膚.	36:379-381, 1974.
90.	末永 義則 網脇ヒロ子	新外用ステロイド軟膏 A41304 の使用経験.	西日皮膚.	36:392-395, 1974.
91.	松本 忠彦 有吉 通泰 日野由和夫	Fucidin と化膿性皮膚疾患.	西日皮膚.	36:403-410, 1974.
92.	利谷 昭治 松本 忠彦	Microsporum gypseum によるケルスス禿瘡.	福大医紀.	1:101-103, 1974.
93.	網脇ヒロ子	皮膚科領域における Pivampicillin の使用経験.	Chemotherapy.	22:707-709, 1974.
94.	松本 忠彦	慢性皮膚粘膜カンジダ症とその免疫状態.	臨床と研究.	51:156-157, 1974.
95.	松本 忠彦 有吉 通泰 日野由和夫	皮膚科領域における Cyclacillin の使用経験.	臨床と研究.	51:188-190, 1974.
96.	日野由和夫 幸田 弘	眼角部に生じた皮膚骨腫—骨母斑としての解釈—.	西日皮膚.	36:511-514, 1974.
97.	宮河 昭雄	表皮および毛根核分解酵素 II RNA 分解酵素.	西日皮膚.	36:552-554, 1974.
98.	末永 義則 幸田 弘	九州大学医学部皮膚科教室最近8年間の真菌症.	西日皮膚.	36:555-558, 1974.
99.	松本 忠彦 有吉 通泰 日野由和夫	ヒスタグロビンの大量療法.	西日皮膚.	36:576-577, 1974.
100.	石坂 隆 本房 昭三	痤瘡にたいするアクネローション (アップジョン) の治療効果.	西日皮膚.	36:578-581, 1974.



101.	末永 義則	新抗真菌外用剤 Hoe 296 の使用経験 (統報).	現代の診療.	16 : 164-166, 1974.
102.	宮河 昭雄	表皮のホスホジエステラーゼ I, II.	西日皮膚.	36 : 677-679, 1974.
103.	上田 説子 金出 明子	ラベンテ・ニューソープの使用経験.	西日皮膚.	36 : 715-717, 1974.
104.	松本 忠彦 有吉 通泰 日野由和夫	皮膚科領域におけるメグリンの使用経験.	臨床と研究.	51 : 3268-3269, 1974.
105.	松本 忠彦 本房 昭二	疣状白癬とクリプトコックス髄膜炎を合併した慢性皮膚粘膜とカンジダ症.	西日皮膚.	37 : 24-32, 1975.
106.	川野 正子 鈴木 達朗	Pyoderma Gangraenosum の 2 例.	西日皮膚.	37 : 62-69, 1975.
107.	末永 義則 本房 昭三	真菌症の治療の進歩.	臨床と研究.	52 : 168-170, 1975.
108.	幸田 弘 上田 説子 日野由和夫	星芒状血管拡張をともなつた血管平滑筋腫 (図説).	西日皮膚.	37 : 189-190, 1975.
109.	幸田 弘	Pseudopyogenic Granuloma.	西日皮膚.	37 : 206-211, 1975.
110.	松本 忠彦	慢性皮膚粘膜カンジダ症.	日医会誌.	37 : 233-237, 1975.
111.	松本 忠彦 有吉 通泰	皮膚科領域における PT-122M の臨床的検討.	西日皮膚.	37 : 258-261, 1975.
112.	幸田 弘	化膿性皮膚疾患にたいする Fosfomycin capusule の使用経験.	Chemotherapy.	23 : 2016-2017, 1975.
113.	幸田 弘	老人性瘙痒症.	ほすびたる.	211 : 1-2, 1975.
114.	松本 忠彦 本房 昭三 渡辺 紀明	内分泌-カンジダ症候群—特発性副甲状腺機能低下症を合併した慢性皮膚粘膜カンジダ症—.	西日皮膚.	37 : 345-353, 1975.
115.	幸田 弘 旭 正一 金出 明子	紫斑と寒冷蕁麻疹をともなつた本態性クリオプログリン血症.	西日皮膚.	37 : 354-359, 1975.
116.	末永 義則 安田 勝 本房 昭三	5-Fluorocytosine の Dematiaceous Fungi にたいする実験的研究.	西日皮膚.	37 : 387-390, 1975.
117.	有吉 通泰 松本 忠彦	筋注用水性懸濁 Ampicillin にかんする実験的研究.	西日皮膚.	37 : 420-405, 1975.
118.	石坂 隆 幸田 弘	九州大学医学部皮膚科教室最近 15 年間の梅毒の統計.	西日皮膚.	37 : 430-431, 1975.
119.	松本 忠彦 有吉 通泰	皮膚科領域における筋注用水性懸濁 Ampicillin の臨床的検討.	西日皮膚.	37-432-435, 1975.
120.	松本 忠彦 有吉 通泰 日野由和夫	皮膚科領域における Cyclacillin 細粒の使用経験.	臨床と研究.	52 : 2137-2138, 1975.

- |      |                         |   |                      |                          |
|------|-------------------------|---|----------------------|--------------------------|
| 121. | 西尾 一方<br>丸岡 和也<br>深川 宗男 | タールによる皮膚障害 (I) ピッチ<br>疣贅 (図説).  | 西日皮膚.                | 37 : 485-486,<br>1975.   |
| 122. | 西尾 一方                   | タールによる皮膚障害 (II) ガス斑,<br>その他 (図説).   | 西日皮膚.                | 37 : 500-512,<br>1975.   |
| 123. | 幸田 弘                    | 角化症皮膚疾患にたいする K-UR<br>の使用経験.   | 西日皮膚.                | 37 : 612-615,<br>1975.   |
| 124. | 松本 忠彦<br>有吉 通泰          | 新外用鎮痛消炎剤 ODS の皮膚およ<br>び一般臨床検査成績にたいする影<br>響.   | 西日皮膚.                | 37 : 644-645,<br>1975.   |
| 125. | 末永 義則<br>本房 昭三          | スポロトリコーシス : 自然界の病原<br>菌.  | 真菌誌.                 | 16 : 97-100,<br>1975.    |
| 126. | 松本 忠彦<br>有吉 通泰          | スポロトリコーシスの原因菌名につ<br>いて.   | 真菌誌.                 | 16 : 131-133,<br>1975.   |
| 127. | 石坂 隆                    | 疣贅にたいするプレオマイシンの使<br>用経験.  | Jpn. J. Antibiotics. | 28 : 581-583,<br>1975.   |
| 128. | 松本 忠彦                   | 慢性皮膚粘膜カンジダ症 (図説).   | 感染, 炎症, 免疫.          | 5 : 192-193,<br>1975.    |
| 129. | 松本 忠彦                   | 慢性皮膚粘膜カンジダ症.  | 感染, 炎症, 免疫.          | 5 : 194-204,<br>1975.    |
| 130. | 幸田 弘<br>石坂 隆            | TPHA (Treponema Pallidum<br>Hemagglutination) テストのクリ<br>ーリング検査法としての意義. 一九州<br>大学医学部附属病院検査部血清検査<br>室の昭和 48 年度検査成績を中心<br>に. | 臨床と研究.               | 52 : 2520-2523,<br>1975. |
| 131. | 末永 義則                   | 新しい抗真菌剤.  | ファルマシア.              | 10 : 809-811,<br>1975.   |
| 132. | 末永 義則<br>安川 典宏          | The Quantitative Determination<br>of Griseofulvin by Gas<br>Chromatography (ECD-GC).                                      | Jpn. J. Antibiotics. | 28 : 665-668,<br>1975.   |
| 133. | 松本 忠彦                   | カンジダ感染症の免疫学的研究.   | 西日皮膚.                | 37 : 770-779,<br>1975.   |
| 134. | 松本 忠彦<br>本房 昭三          | オルガドロンクリーム軟膏の使用経<br>験.  | 西日皮膚.                | 37 : 848-850,<br>1975.   |
| 135. | 幸田 弘<br>増田 義人           | 九州大学医学部附属病院油症外来患<br>者の血中 PCB と臨床症状との関<br>係.   | 福岡医誌.                | 6 : 624-628,<br>1975.    |
| 136. | 旭 正一<br>幸田 弘<br>利谷 昭治   | 昭和 48 年度, 49 年度一斉検診にお<br>ける油症皮膚重症度の変動と新しい<br>皮膚重症度評価試案.   | 福岡医誌.                | 66 : 629-634,<br>1975.   |
| 137. | 西尾 一方<br>幸田 弘           | A Case of Storiform<br>Neurofibroma.  | J. Dermatol.         | 2 : 143-148,<br>1975.    |
| 138. | 松本 忠彦                   | Chronic Mucocutaneous Can-<br>didiasis  | Asian Med. J.        | 18 : 915-918,<br>1975.   |
| 139. | 福田 英三<br>幸田 弘           | 皮膚転移にともなつたいわゆる進行<br>性壞疽性鼻炎.   | 西日皮膚.                | 38 : 8-15, 1976.         |

140. 幸田 弘 白毛を有する Trichofolliculoma. 西日皮膚. 38 : 16-19,  
川野 正子 昭三 1976.
141. 旭 正一 新しい免疫学 (I) 免疫アレルギーの分類法. 西日皮膚. 38 : 90-95,  
1976.
142. 松本 忠彦 皮膚癢痒症にたいするマイナートラン キライザーの効果. 西日皮膚. 38 : 103-106,  
本房 昭三 1976.
143. 幸田 弘 皮膚平滑筋肉腫. 西日皮膚. 38 : 239-248,  
西尾 一方 日野由和夫 1976.
144. 旭 正一 新しい免疫学 (II) 免疫グロブリン・ レアギン. 西日皮膚. 38 : 294-300,  
1976.
145. 松本 忠彦 皮膚病変よりの Candida 検出 Microstix-Candida による簡易検 出法一. 西日皮膚. 38 : 301-304,  
本房 昭三 1976.
146. 幸田 弘 いわゆる皮膚混合腫瘍一とくに電頭 像について一. 西日皮膚. 38 : 392-405,  
本房 昭三 1976.
147. 松本 忠彦 Transfer Factor が奏効した慢性皮 膚粘膜カンジダ症. 西日皮膚. 38 : 413-417,  
磯田美登里 姫野 国祐 1976.
148. 宮河 昭雄 表皮酸性核酸分解酵素による胸腺 DNA とクロマチン. 西日皮膚. 38 : 424-426,  
1976.
149. 小田 紘 幼児の顔面病巣よりくりかえし分離 された 2 型単純ヘルペスウイルスの 性状. 西日皮膚. 38 : 427-731,  
日野由和夫 良一 森 南嶋 田崎 高伸 1976.
150. 旭 正一 新しい免疫学 (III) T cell と B cell. 西日皮膚. 38 : 438-444,  
1976.
151. 松本 忠彦 ウイルス性皮膚疾患とリゾチーム. 西日皮膚. 38 : 456, 1976.
152. 吉田 義一 食道カンジダ症一食道に主病変を来 した慢性皮膚粘膜カンジダ症一. 気食会報. 27 : 7-11, 1976.
153. 幸田 弘 肝斑にたいする「クオレ」BS シリー ズの効果. 西日皮膚. 38 : 473-474,  
1976.
154. 倉員 正俊 Hidroacanthoma Simplex. 西日皮膚. 38 : 572-577,  
本房 昭三 1976.
155. 旭 正一 新しい免疫学 (IV) In Vitro の抗原 抗体反応. 西日皮膚. 38 : 643-651,  
1976.
156. 宮河 昭雄 ステロイドによる帯状疱疹の治療. 西日皮膚. 38 : 663-665,  
1976.
157. 松本 忠彦 Triple Fungal Infection—Chronic Mucocutaneous Candidiasis, Exo-phytic Dermatophytosis and Cryptococcal Meningitis: A New and Unusual Combination. J. Dermatol. 3 : 139-146,  
1976.
158. 西尾 一方 皮膚細網症の病理. 日皮会誌. 86 : 573-581,  
1976.
159. 松本 忠彦 食道病変を主徴とした慢性皮膚粘膜 カンジダ症. 真菌誌. 17 : 47-49,  
磯田美登里 吉田 義一 1976.

160. 福田 英三 Dermal Duct Tumor, 西日皮膚, 38 : 748-755,  
本房 昭三 1976.  
幸田 弘
161. 石坂 隆 汎発性帯状疱疹, 西日皮膚, 38 : 767-770,  
1976.
162. 旭 正一 新しい免疫学 (V) In vitro の細胞 西日皮膚, 38 : 812-819,  
免疫反応, 1976.
163. 松本 忠彦 Keratomycosis, Mykosen, 19 : 217-222,  
副島 直子 1976.
164. 土井 福子 ニュートロジーナ石鹼の使用経験, 西日皮膚, 38 : 850-853,  
1976.
165. 石坂 隆 患側下肢の萎縮と有棘細胞癌の発生 西日皮膚, 38 : 920-923,  
をみた汗孔角化症, 1976.
166. 和田 秀敏 広範囲の頭蓋骨露出をきたした重傷 西日皮膚, 38 : 931-936,  
倉員 正俊 熱傷の遊離植皮術, 1976.  
旭 正一
167. 旭 正一 新しい免疫学 (VI) 接触性皮膚炎・ 西日皮膚, 38 : 971-979,  
自己免疫・腫瘍免疫, 1976.
168. 松本 忠彦 慢性皮膚粘膜カンジダ症, 臨床医, 3 : 64-67, 1977.  
磯田美登里
169. 西尾 一方 Pityriasis Lichenoides et Var- 西日皮膚, 39 : 1-2, 1977.  
桐生 博愛 ioliformis Acuta (Mucha-Habermann).
170. 西尾 一方 皮膚科領域におけるウイルス学 西日皮膚, 39 : 85-90,  
日野由和夫 (I), 1977.
171. Clobetasol 17-Propionate 外用剤 臨床評価, 4 : 507-548,  
17-Propionate 外用剤臨床 研究班 検討, 1977.
172. 和田 秀敏 陰茎パラフィノーマ, 西日皮膚, 39 : 168-171,  
末永 義則 1977.
173. 宮河 昭雄 表皮酸性ホスファターゼの酵素学的 西日皮膚, 39 : 199-205,  
中山樹一郎 研究, 1977.  
利谷 昭治  
小倉 良平
174. 西尾 一方 皮膚科領域におけるウイルス学 西日皮膚, 39 : 225-229,  
日野由和夫 (II), 1977.
175. 和田 秀敏 Lyophilized Porcine Skin の使用経 西日皮膚, 39 : 230-234,  
旭 正一 験—デルマトーム採皮創にたいして 1977.  
末永 義則
176. 西尾 一方 Solitary Mastocytosis (Mas- 西日皮膚, 39 : 295-296,  
石坂 隆 tocytoma), 1977.
177. 武谷 健二 Chronic Mucocutaneous Can- Clin. exp. Immunol. 25 : 497-500,  
野本 久雄 didiasis Accompanied by Enhan- 1977.  
松本 忠彦 ced Antibody Production.  
三宅 恆徳  
姫野 国祐
178. 福田 英三 検査法の皮膚科的意義 細胞疹とと 西日皮膚, 39 : 307-312,  
くに悪性リンパ腫について, 1977.

- |      |   |   |       |                        |
|------|---|---|-------|------------------------|
| 179. | 西尾 一方<br>日野由和夫                            | 皮膚科領域におけるウイルス学<br>(III).                            | 西日皮膚. | 39 : 391-395,<br>1977. |
| 180. | 利谷 昭治<br>旭 正一<br>幸田 弘                     | 昭和 50 年度一斉検診における油症<br>患者皮膚所見の推移.                    | 福岡医誌. | 68 : 152-155,<br>1977. |
| 181. | 磯田美登里                                     | ミノン全身シャンプーの使用経験.                                    | 西日皮膚. | 39 : 405-407,<br>1977. |
| 182. | 貝嶋 光信<br>伊規須英輝<br>後藤 幾生<br>黒岩義五郎<br>松本 忠彦 | カンジダ髄膜炎.  | 脳と神経. | 29 : 751-754,<br>1977. |
| 183. | 松尾 健三                                     | Penis Tuberculid.                                   | 西日皮膚. | 39 : 489-490,<br>1977. |
| 184. | 旭 正一<br>上田 説子<br>倉員 正俊<br>河野 剣治           | 検査法の皮膚科的意義蛍光抗体法の<br>手技おこび水疱性疾患における意<br>義.           | 西日皮膚. | 39 : 500-506,<br>1977. |
| 185. | 福田 英三<br>武石 正昭                            | 迷入乳腺に発生した腺癌.  | 西日皮膚. | 39 : 574-577,<br>1977. |
| 186. | 日野由和夫                                     | 皮膚科領域におけるウイルス学<br>(IV).                             | 西日皮膚. | 39 : 605-610,<br>1977. |
| 187. | AF-100 研<br>究班                            | AF-100 の白癬にたいする臨床評価<br>—二重盲検比較試験—.                  | 西日皮膚. | 39 : 611-621,<br>1977. |
| 188. | 金出 明子                                     | リンパ球若化現象微量測定法の研究<br>およびこれによる 2・3 皮膚疾患<br>の免疫学的検討.   | 日皮会誌. | 87 : 469-486,<br>1977. |
| 189. | 西尾 一方<br>日野由和夫                            | 皮膚科領域におけるウイルス学<br>(V).                              | 西日皮膚. | 39 : 785-789,<br>1977. |
| 190. | 上田 説子<br>倉員 正俊<br>河野 剣治<br>旭 正一           | 金療法をおこなった天疱瘡の 7 例.                                  | 日皮会誌. | 87 : 599-607,<br>1977. |
| 191. | 日野由和夫<br>西村 正幸                            | 陰部疱疹.   | 西日皮膚. | 39 : 908-911,<br>1977. |
| 192. | 西尾 一方<br>日野由和夫                            | 皮膚科領域におけるウイルス学<br>(VI).                             | 西日皮膚. | 39 : 929-934,<br>1977. |
| 193. | 松本 忠彦                                     | Chronic Mucocutaneous Can-<br>didiasis.             | 日菌会報. | 17 : 515-531,<br>1977. |
| 194. | 松本 哲朗<br>佐藤 伸一<br>熊沢 浄一<br>和田 秀敏          | 尿道瘻閉鎖の 1 例.   | 西日泌尿. | 39 : 833-836,<br>1977. |
| 195. | 西尾 一方<br>西村 正幸                            | Senile Sebaceous Hyperplasia.                       | 西日皮膚. | 40 : 3-4, 1978.        |
| 196. | 幸田 弘<br>日野由和夫<br>吉松 孝治                    | Hyperkeratosis Lenticularis Per-<br>stans (Flegel). | 西日皮膚. | 40 : 173-174,<br>1978. |
| 197. | 日野由和夫<br>西村 正幸<br>幸田 弘                    | Proliferating Trichilemmal Cyst.                    | 西日皮膚. | 40 : 259-267,<br>1978. |

198. 本房 昭三  
末永 義則  
Candida utilis のマウスにたいする  
病原性. 西日皮膚, 40:320-322,  
1978.
199. 橋本 健  
幸田 弘  
S. L. Blender  
I. Willis  
Psoralen-UVA-Treated Psoriatic  
Lesions Ultrastructural Changes, Arch. Dermatol. 144:711-722,  
1978.
200. 松本 忠彦  
磯田美登里  
慢性皮膚粘膜カンジダ症, Today's Therapy. 2:22-32, 1978.
201. 幸田 弘  
日野由和夫  
Infantile Digital Fibromatosis の  
自然消退. 西日皮膚, 40:609-610,  
1978.
202. 松本 忠彦  
Black Yeast について, 西日皮膚, 40:620-628,  
1978.
203. 磯田美登里  
松本 忠彦  
西尾 一方  
Clofazimine の奏効した壞疽性膿皮  
症. 西日皮膚, 40:644-644,  
1978.
204. 吉田 義一  
松本 忠彦  
Transfer Factor による免疫学的治  
療を行った食道カンジダ症. 耳鼻と臨床, 24:800-805,  
1978.
205. AF-100 研  
究班  
AF-100 白癬にたいする臨床評価  
—ハイアレルギー軟膏との比較試験  
—, 西日皮膚, 40:1189-1194,  
1978.
206. 松本 忠彦  
慢性皮膚粘膜カンジダ症と Trans-  
fer Factor, 真菌誌, 19:214-220,  
1978.
207. Diflucortol-  
one 21  
-valerate  
外用剤臨床  
研 究 班  
二重盲検法による Diflucortolone  
21-valerate 外用剤の臨床効果の検  
討. 臨床評価, 6:379-409,  
1978.
208. 宮河 昭雄  
中山樹一郎  
利谷 昭治  
小倉 良一  
Enzymological Studies of Epider-  
mal Acid Phosphatase, J. Dermatol. 5:209-214,  
1978.
209. 磯田美登里  
幸田 弘  
山下 正文  
米増 祐吉  
潜在性二分脊椎にみられる皮膚症  
状, 西日皮膚, 41:21-24,  
1979.
210. 岩下 宏  
荒木 邦治  
黒岩義五郎  
松本 忠彦  
Occurrence of Candida-Specific  
Oligoclonal IgG Antibodies in CSF  
with Candida Meningoencephalitis, Annl. Neurol. 4:579-581,  
1979.
211. フルゾン  
テープ研究  
班  
フルゾンテープの臨床試験成績, 西日皮膚, 41:141-151,  
1979.
212. 武石 正昭  
桐生 博愛  
西尾 一方  
Juvenile Spring Eruption (図説), 西日皮膚, 41:207-208,  
1979.
213. 本房 昭三  
真崎 治行  
田中 裕幸  
実験的白癬にたいするステロイドの  
影響, 西日皮膚, 41:226-229,  
1979.
214. 武石 正昭  
桐生 博愛  
西尾 一方  
Juvenile Spring Eruption, 西日皮膚, 41:246-248,  
1979.

215.	武石 正昭 土井 福子 江藤 琉美子	皮膚疾患の線溶能の測定とヘキサブ ロミンコーワ錠の使用経験。	西日皮膚。	41 : 331-333, 1979.
216.	松本 忠彦 桐生 博愛	外用抗真菌剤 Tolciclate の使用経 験。	西日皮膚。	41 : 348-351, 1979.
217.	幸田 弘	疥癬—最近の流行によせて。	薬局。	30 : 93-96, 1979.
218.	真崎 治行 幸田 弘	指のポーエン病と爪下ポーエン癌 —九大皮膚科10年間の統計ととも に—。	西日皮膚。	41 : 481-486, 1979.
219.	和田 秀敏	コンピベニックスの皮膚科領域にお ける臨床的実験的研究。	西日皮膚。	41 : 489-495, 1979.
220.	幸田 弘	処方—私の考え方—水痘。	臨床と研究。	56 : 196-198, 1979.
221.	旭 正一	新型プレオマイシン NK631 の使用 経験。	Jpn. J. Antibiotics.	32 : 744-750, 1979.
222.	河野 剣治	皮膚疾患に対するテルギン G ドラ イシロップの臨床効果。	薬物療法。	12 : 79-82, 1979.
223.	真崎 治行 松本 忠彦 松崎 統	Miconazole Cream の皮膚真菌症に たいする治療効果。	西日皮膚。	41 : 983-985, 1979.
224.	松本 忠彦 真崎 治行 岡部 知洋	Cylindrocarpin tonkinense : As a Cause of Keratomycosis.	Trans. Br. mycol. Soc.	72 : 503-504, 1979.
225.	松本 忠彦	院内感染を思わせるクリプトコック ス症。	臨床と研究。	56 : 214, 1979.
226.	幸田 弘 吉松 孝治 西尾 一方	Lupus Tumidus (図説)。	西日皮膚。	41 : 1043-1044, 1979.
227.	河野 剣治 桐生 美麿 和田 秀敏	皮膚科外科における Limberg Flap の経験。	西日皮膚。	41 : 1069-1074, 1979.
228.	上田 説子	白癬菌から抽出した新しい皮内反応 抗原。	日皮会誌。	89 : 627-638, 1979.
229.	本房 昭三	ステロイド剤と皮膚カンジダ症。	皮膚病診療。	1 : 835-838, 1979.
230.	松本 忠彦 桐生 博愛	慢性皮膚粘膜カンジダ症。	皮膚病診療。	1 : 831-834, 1979.
231.	Halcino- nide 外用 剤 研究 班	Halcinonide 外用剤の二重盲検法に よる臨床効果の検討。	臨床評価。	7 : 603-631, 1979.
232.	西尾 一方 日野由和夫	皮膚結核初感染徴候。	産業医大誌。	1 : 417-423, 1979.
233.	松本 忠彦 真崎 治行	慢性皮膚粘膜カンジダ症。 (図説感染症シリーズ 18)	医学のあゆみ。	111(5), 1979.
234.	倉員 正俊 上村 朋子	スポロトリコーシス患者の血中抗体 測定法。	医学のあゆみ。	114 : 1060-1062, 1980.

- |      |                                 |  |                          |                         |
|------|---------------------------------|--|--------------------------|-------------------------|
| 235. | 上村 朋子<br>本房 昭三<br>幸田 弘          | Gianotti 病 (図説).   | 西日皮膚.                    | 42 : 379-380,<br>1980.  |
| 236. | 和田 秀敏<br>本房 昭三<br>河野 剣治<br>幸田 弘 | 鼻翼裂を伴った Nasal Glioma の 1 例.  | 形成外科.                    | 23 : 641-646,<br>1980.  |
| 237. | 本房 昭三                           | カンジダ症.   | 皮膚病診療.                   | 2 : 1013-1016,<br>1980. |
| 238. | 和田 秀敏<br>西谷 敬子<br>倉田喜一郎         | 下腹部熱傷潰瘍の手術例.   | 形成外科.                    | 23 : 69, 1980.          |
| 239. | 本房 昭三<br>和田 秀敏<br>幸田 弘          | Nasal Glioma (図説).   | 西日皮膚.                    | 42 : 1-2, 1980.         |
| 240. | 本房 昭三<br>和田 秀敏<br>幸田 弘          | Nasal Glioma—電顕的観察を中心に—.   | 西日皮膚.                    | 42 : 13-12,<br>1980.    |
| 241. | 和田 秀敏<br>河野 剣治<br>桐生 美麿         | 基底細胞治療法の検討—とくに再発例について—.  | 形成外科.                    | 23 : 299-308,<br>1980.  |
| 242. | ヒスタグロ<br>ビン研究班                  | 二重盲検法によるヒスタグロビンの治療効果の検討—慢性蕁麻疹, 湿疹, 皮膚炎群を対象として—.  | 西日皮膚.                    | 42 : 470-477,<br>1980.  |
| 243. | Bendazac<br>研 究 班               | Bendazac 外用剤の臨床効果の検討.  | 西日皮膚.                    | 42 : 478-486,<br>1980.  |
| 244. | 本房 昭三<br>真崎 治行                  | Black Dot Ringworm (図説).   | 西日皮膚.                    | 42 : 763-764,<br>1980.  |
| 245. | 恒吉香保子<br>和田 秀敏                  | Balanitis Xerotica Obliterans.   | 西日皮膚.                    | 42 : 773-778,<br>1980.  |
| 246. | 佐藤恵実子<br>今山 修平<br>幸田 弘          | Trichilemmoma の電顕像.  | 西日皮膚.                    | 42 : 784-790,<br>1980.  |
| 247. | 真崎 治行<br>宮岡 達也                  | アフタおよび糜爛性口内炎による角化症の治療.   | 西日皮膚.                    | 42 : 864-869,<br>1980.  |
| 248. | 和田 秀敏<br>武石 正昭                  | Acropathies Ulcero-Mutilantes Pseudo-Syringomyeliques non Familiales des Membres Inferieurs の 1 例. | 西日皮膚.                    | 42 : 953-957,<br>1980.  |
| 249. | 松本 忠彦                           | 真菌症治療最近の進歩.  | 福岡医誌.                    | 71 : 532-533,<br>1980.  |
| 250. | 中島 秀樹<br>中井 太一<br>旭 正一<br>利谷 昭治 | Experience in Immunofluorescent Staining Analyses of the Bullous Skin Diseases.                    | Med. Bull. Fukuoka Univ. | 7 : 407-411,<br>1980.   |
| 251. | 松本 忠彦<br>宮岡 達也<br>中村 次弘         | Cutaneous Cryptococcosis (図説).   | 西日皮膚.                    | 43 : 3-4, 1981.         |
| 252. | Amc 研究<br>班                     | Amcinonide クリームの臨床効果と安全性.  | 西日皮膚.                    | 43 : 92-97,<br>1981.    |



253.	Isoconazole 研究班	二重盲検法による Isoconazole クリームの皮膚真菌症にたいする臨床効果の検討。	西日皮膚。	43 : 103-115, 1981.
254.	Tolciclate 研究班	皮膚真菌症にたいする Tolciclate クリームの臨床評価—二重盲検法による検討—。	西日皮膚。	43 : 141-154, 1981.
255.	倉員 正俊	Sporothrix schenckii から抽出したペプチド性抗原の免疫化学的および臨床的研究。	西日皮膚。	43 : 230-241, 1981.
256.	塚本 直樹 柏村 賀子 杉森 甫 和田 秀敏	Glacilis Myocutaneous Flap 使用による外陰再建。	産婦人科治療。	43 : 259-264, 1981.
257.	旭 正一 利谷 昭治 日野由和夫 幸田 弘	昭和 51 年度—55 年度の年次追跡調査における油症皮膚所見の変化とその他の因子との相関性。	福岡医誌。	72 : 223-229, 1981.
258.	今山 修平	Scanning and Transmisson Electron Microscope Study on the Terminal Blood Vessels of the Rat Skin.	J. Invest. Dermatol.	76 : 151-157, 1981.
259.	HF-264 軟膏臨床研究班	帯状疱疹にたいする HF-264 軟膏の有用性—二重盲検法による群間比較試験—。	西日皮膚。	43 : 482-487, 1981.
260.	ビメプロフェンパッチテスト研究班	非ステロイド性外用剤ビメプロフェンのパッチテストについて。	薬理と治療。	9 : 187-193, 1981.
261.	佐藤恵実子 今山 修平	Malignant Hemangioendothelioma の電顕像。	西日皮膚。	43 : 752-757, 1981.
262.	本房 昭三 真崎 治行 今山 修平	脳転移をおこしたクロモミコース。	臨床と研究。	58 : 209-210, 1981.
263.	K-FA 臨床研究班	二重盲検法による Fluocinolone Acetonide 含有粘膜テープ製剤 (フルベアンコーワテープ) の有用性の検討。	西日皮膚。	43 : 816-824, 1981.
264.	リノピン研究班	慢性蕁麻疹に対するヒスタミン加ヒト免疫グロブリンの臨床効果。	西日皮膚。	43 : 845-849, 1981.
265.	日野由和夫 永江祥之介 和田 秀敏	九大皮膚科 75 年間の薬疹の統計。	西日皮膚。	43 : 924-927, 1981.
266.	武石 正昭 中野 勉子 永瀬 浩一	九大皮膚科 75 年間の小児ストロフルスの統計。	西日皮膚。	43 : 928-931, 1981.
267.	旭 正一 河野 剣治 今村 朋子 倉員 正俊	九大皮膚科 75 年間の紅斑症の統計。	西日皮膚。	43 : 932-936, 1981.
268.	和田 秀敏 大野 宏守 幸田 弘	九大皮膚科 75 年間の梅毒の統計。	西日皮膚。	43 : 942-944, 1981.

269. 西谷 敬子 九大皮膚科 75 年間の膿皮症の統計, 西日皮膚, 43: 945-948, 1981.  
佐藤 惠実子  
恒吉 香保子
270. 恒吉 香保子 九大皮膚科 75 年間の動物寄生性皮膚炎患者の統計, 西日皮膚, 43: 962-963, 1981.  
松尾 健三  
幸田 弘
271. 倉員 正俊 九大皮膚科 75 年間の水疱症の統計, 西日皮膚, 43: 964-969, 1981.  
今村 朋子  
旭 正一
272. 塚本 直樹 骨髓臓器摘出術合併症予防のための工夫, 産婦人科治療, 43: 259-264, 1981.  
加来 恒寿  
滝 一郎  
和田 秀敏
273. 今山 修平 乾癬の温熱療法—電子顕微鏡による観察—, 西日皮膚, 43: 909-916, 1981.  
永江 祥之介
274. 松本 忠彦 院内感染としてのクリプトコックス症, 真菌誌, 22: 172-175, 1981.  
宮岡 達也
275. 本房 昭三 Black Dot Ringworm, 皮膚病診療, 3: 329-322, 1981.  
真崎 治行
276. Amcinonide 二重盲検法による Amcinonide 軟膏およびクリームの臨床効果の検討—湿疹, 皮膚炎群および尋常乾癬を対象にした左右比較試験成績—, 西日皮膚, 43: 79-91, 1981.  
研究 班
277. HF-264 軟膏臨床研究班 急性湿疹, 接触性皮膚炎, アトピー皮膚炎にたいする HF-264 軟膏の有用性, 西日皮膚, 43: 474-481, 1981.
278. 本房 昭三 九大皮膚科 75 年間の皮膚結核の統計, 西日皮膚, 43: 937-941, 1981.  
宮岡 達也  
奥野 均
279. 奥野 均 九大皮膚科 75 年間のウイルス性皮膚疾患の統計, 西日皮膚, 43: 949-951, 1981.  
佐藤 惠実子  
恒吉 香保子  
日野 由和夫
280. 真崎 治行 九大皮膚科 75 年間の真菌症の統計, 西日皮膚, 43: 952-961, 1981.  
宮岡 達也  
本房 昭三
281. 松尾 健三 九大皮膚科 75 年間の乾癬の統計, 西日皮膚, 43: 970-973, 1981.  
西谷 敬子  
大野 宏守
282. 和田 秀敏 Necrotizing Fasciitis, 形成外科, 24: 508-513, 1981.  
西谷 敬子  
上村 朋子  
井上 和彦  
東 隆介
283. 中村 次弘 重傷全身性クリプトコックス症に対する Miconazole 治療, 神経内科, 15: 385-387, 1981.  
井上 尚英  
有村 公良  
村上 勝  
松本 忠彦
284. 和田 秀敏 Demonstration of Autonomic Nerve in Transplanted Arteries in Rabbits, J. Microsurg, 3: 20-27, 1981.

285.	和田 秀敏	A Histochemical Examination of Autogenous Arterial Graft.	J. Jpn. Orthoped. Assoc.	56 : 347-354, 1982.
286.	今山 修平	Blue Rubber Bleb Nevus syndrome の 2 例.	皮膚病診療.	4 : 49-52, 1982.
287.	和田 秀敏 幸田 弘	口唇歯溝を挟んだ Divided Nevus.	皮膚臨床.	24 : 98-99, 1982.
288.	西谷 弘 西谷 敬子 沼口 雄治 本房 昭三	Cerebral Chromomycosis.	J. Comput. Assist. Tomogr.	6 : 624-625, 1982.
289.	今山 修平	湿疹, 皮膚炎群に対するルーブルゲルの治療効果.	西日皮膚.	44 : 244-246, 1982.
290.	ハイチオール 研究班	皮膚科領域におけるハイチオールの臨床使用成績.	西日皮膚.	44 : 262-270, 1982.
291.	幸田 弘 本房 昭三	ステロイドと真菌症.	皮膚病診療.	4 : 221-228, 1982.
292.	Clobetasol 17-Propionate 外用 剤難治性皮膚疾患研究 班	Clobetasol 17-Propionate 外用剤の難治性皮膚疾患に対する臨床的有用性の検討.	西日皮膚.	44 : 677-689, 1982.
293.	倉員 正俊 恒吉香保子 松尾 健三 佐藤恵実子	指趾端壊疽をともなった本態性クリオグロブリン血症 (図説).	西日皮膚.	4 : 755-756, 1982.
294.	倉員 正俊 恒吉香保子 松尾 健三 佐藤恵実子	指趾端壊疽をともなった本態性クリオグロブリン血症.	西日皮膚.	44 : 757-764, 1982.
295.	徳永 孝道 今山 修平	Reiter's Disease (図説).	西日皮膚.	44 : 929-930, 1982.
296.	和田 秀敏 松津 天生 今村 英一 塚本 直樹	Gracillis myocutaneous flap による外陰部および膣再建.	手術.	37 : 11-15, 1983.
297.	和田 秀敏	家兔大腿動脈移植における交感神経支配.	日形成会誌.	3 : 1841-1843, 1983.
298.	武石 正昭	Piebaldism.	皮膚病診療.	5 : 139-109, 1983.
299.	大野 宏守	Poroepithelioma Folliculare の 1 例.	臨皮.	37 : 281-285, 1983.
300.	松村 美幸 今山 修平	オスラー病 (図説).	西日皮膚.	45 : 147-148, 1983.
301.	磯田美登里 宮岡 達也	Subsepsis Allergica の 1 例.	西日皮膚.	45 : 177-181, 1983.
302.	ST-35 至 適濃度研究 班	Betamethasone 17-Velerate 含有テープ剤(ST-35)の至適濃度設定に関する比較臨床試験.	西日皮膚.	45 : 345-344, 1983.

303. ST-35 臨床 研究班 Betamethasone 17-Valerate 含有  
テープ剤トクダーム(ST-35)の臨床  
効果の検討。 西日皮膚。 45: 245-252,  
1983.
304. 今山 修平 アトピー皮膚炎におけるリノピンの  
使用経験。 西日皮膚。 45: 266-272,  
1983.
305. 三原 公彦 Eruptive Vellus Hair Cysts of The  
西村 正幸 Face.  
日野由和夫  
幸田 弘 西日皮膚。 45: 360-364,  
1983.
306. 安元慎一郎 D-Penicillamine による天疱瘡様皮  
今山 修平 膚病変。  
旭 正一 九州リウマチ。 2: 136-138,  
1983.
307. 松本 忠彦 Successful Mating of Microspor-  
A. A. um distortum with Nannizzia  
Padhye otae.  
L. Ajello Trans. Br. mycol.  
Soc. 81: 645-650,  
1983.
308. 朔 民子 血管芽細胞腫 (図説)。  
土井 福子 西日皮膚。 45: 545-546,  
弘中 哲也 1983.
309. 古賀 哲也 ケトコナゾールの使用経験。  
山野 龍文 西日皮膚。 45: 869-875,  
真崎 治行 1983.  
宮岡 達也
310. 西村 正幸 Superficial Spreading Melanoma  
三原 公彦 (図説)。  
幸田 弘 西日皮膚。 45: 951-952,  
1983.
311. 旭 正一 エリテマトーデス。 皮膚病診療。 5: 711-714,  
1983.
312. 松本 忠彦 In Vitro Hair Perforation by a  
A. A. New Subvariety of Trichophyton  
Padhye tonsurans var. sulfureum.  
L. Ajello Mycotaxon。 18: 235-242,  
1983.
313. 和田 秀敏 手の軟部腫瘍。  
野間 健 整形外科。 34: 1841-1843,  
桐生 美麿 1983.
314. 和田 秀敏 Microsurgery における動脈移植の  
桐生 美麿 形成外科。 27: 239-244,  
野間 健 1984.
315. 和田 秀敏 熱傷瘢痕癌—自験例 59 例を中心  
船津 天生 一。 熱傷。 10: 105-112,  
1984.
316. 三原 公彦 上肢の Angiokeratoma。  
和田 秀敏 日手会誌。 1: 218-220,  
1984.
317. 林 紀孝 アレルギー性皮膚疾患(慢性蕁麻疹)  
利谷 昭治 にたいする MS-アンチゲン 40 の  
今山 修平 Open Study による治療成績。 西日皮膚。 46: 419-424,  
1984.
318. 本房 昭三 Chronic Dermatophyte Infection:  
H. E. Evaluation of the Ig Class-Specific  
Jones Antibody Response Reactive with  
W. M. Polysaccharide and Peptide  
Artis Antigens Derived from Tricho-  
phyton mentagrophytes。 J. Invest. Dermatol。 82: 287-290,  
1984.
319. 安川 恭子 他 マダニの人体咬着 2 例。 西日皮膚。 46: 492-497,  
1984.

320. 吉利 優子 Atypical Fibroxanthoma of the 西日皮膚. 46 : 518-520,  
今山 修平 Skin.—退縮傾向のみられた 1 例—. 1984.
321. 今山 修平 皮膚血管の平滑筋の走査電顕像. 西日皮膚. 46 : 533-539,  
伊川 知子 1984.
322. 大野 宏守 Poland-Möbius Syndrome の 1 例. 日形会誌. 4 : 193-200,  
和田 秀敏 1984.  
野間 建  
三原 公彦
323. 伊川 知子 急性骨髄性白血病に併発した 西日皮膚. 46 : 704-708,  
Mycobacterium fortuitum 皮膚感 1984.  
染症.
324. 西谷 敬子 毛包性ムチン沈着症 (図説). 西日皮膚. 46 : 679-680,  
1984.
325. 徳永 孝道 皮膚汗腺周囲の微小血管系の走査型 西日皮膚. 46 : 742-747,  
今山 修平 電顕による観察. 1984.
326. 岡本 光世 天疱瘡水疱液における好酸球遊走因 西日皮膚. 46 : 752-755,  
磯田美登里 子. 1984.  
日高 桂子
327. RS 44872 皮膚真菌症に対する RS 44872 (Sul- 西日皮膚. 46 : 769-782,  
研究班 conazole Nirate) クリームの臨床 1984.  
評価—Well Controlled Study による検討—.
328. 武石 正昭 アドコルチン軟膏の臨床評価. 西日皮膚. 46 : 806-808,  
徳永 孝道 1984.  
松村 美幸
329. 松本 忠彦 膿皮症. MEDIC. 19(6) : 9, 1984.
330. 本房 昭三 The Relationship of Cladosporium 西日皮膚. 22 : 209-218,  
A. A. carrionii to Cladophialophora ajelloi. 1984.  
Padhye  
L. Ajello
331. 本房 昭三 Antigenic Relationships Among 西日皮膚. 22 : 301-310,  
P. G. Cladosporium Species of Medical 1984.  
Standard  
A. A. Importance.  
Padhye  
L. Ajello  
L. Kaufman
332. 松本 忠彦 Critical Review of Human Isolates 西日皮膚. 76 : 232-249,  
A. A. of Wangiella dermatitidis. 1984.  
Padhye  
L. Ajello  
P. G.  
Standard  
M. R.  
McGinnis
333. 伊川 知子 Erythema Elevatum Diutinum. 西日皮膚. 46 : 859-898,  
今山 修平 1984.
334. ACV 研究 Acyclovir 静注の帯状疱疹に対する 西日皮膚. 46 : 973-985,  
班 治療効果の評価. 1984.
335. 本房 昭三 真菌症の血清学的診断. 臨床と研究. 61 : 3629-3630,  
1984.

336. 中山樹一郎 他 Benzo(a)pyrene-DNA Adduct Formation and Removal in Mouse Epidermis in Vivo and in Vitro: Relationship of DNA Binding to Initiation of Skin Carcinogenesis. *Cancer Research.* 44 : 4087-4095, 1984.
337. 西谷 敬子 福岡県における非ステロイド系抗炎症外用剤使用現況。 *西日皮膚.* 46 : 1147-1151, 1984.
338. 松本 忠彦 Black Yeasts 感染症の基礎と臨床。 *皮膚臨床.* 26 : 1175-1187, 1984.
339. 松本 忠彦 Phaeohyphomycosis Caused by Sabouraudia, Exophiala moniliae. 22 : 17-26, 1984.  
西本勝太郎  
木村 恭一  
A. A. Padhye  
L. Ajello  
M. R. McGinnis
340. 九州地区パ ンデル臨床 研究 班 パンデル軟膏の臨床的検討—湿疹・皮膚炎群—。 *西日皮膚.* 46 : 1180-1185, 1984.
341. 旭 正一 免疫学の新しい話題 (I) ハイブリドーマとモノクローナル抗体。 *西日皮膚.* 47 : 70-75, 1984.
342. 桐生 美麿 皮膚血管肉腫の臨床病理学的, 電顕的ならびに免疫組織化学的研究。 *日皮会誌.* 95 : 117-134, 1985.
343. 野間 建 手背熱傷の統計的観察。 *熱傷.* 10 : 146-150, 1985.  
仁位 泰樹  
三原 公彦  
和田 秀敏
344. 旭 正一 免疫学の新しい話題 (II) 免疫グロブリンと免疫ネットワーク。 *西日皮膚.* 47 : 286-291, 1985.
345. 旭 正一 Purification and Characterization of Major Extracellular Proteinases from *Trichophyton rubrum*. *Biochem. J.* 232 : 139-144, 1985.  
R. Lindquist  
K. Fukuyama  
G. Apodaka  
W. L. Epstein  
J. H. McKerrow
346. 旭 正一 免疫学の新しい話題 (III) 組織適合抗原・HLA 抗原・Ia 抗原。 *西日皮膚.* 47 : 496-503, 1985.
347. 佐藤恵実子 原発性全身性アミロイドーシス。 *西日皮膚.* 47 : 613-621, 1985.  
今山 修平  
佐藤 裕
348. 西谷 敬子 環状扁平苔癬。 *西日皮膚.* 47 : 640-643, 1985.  
今山 修平
349. 旭 正一 免疫学の新しい話題 (IV) リンフォカイン。 *西日皮膚.* 47 : 685-693, 1985.

350. 西村 正幸 尋常乾癬患者の血漿フィブロンectin値. 日皮会誌. 95 : 1469-1471, 1985.  
 森戸 文隆  
 中山樹一郎  
 旭 正一
351. 和田 秀敏 陥入爪の治療—私はこうしている—. 皮膚病診療. 7 : 165-166, 1985.
352. 和田 秀敏 手放射線皮膚炎と発癌例. 日手会誌. 2 : 234-238, 1985.  
 三原 公彦
353. 松田 哲男 慢性皮膚粘膜カンジダ症. 臨床医. 11 : 1759-1760, 1985.  
 松本 忠彦
354. 渡辺 圭子 虹彩面上白色塊を呈した真菌性眼内炎. 臨眼. 39 : 1141-1144, 1985.  
 山名 敏子  
 猪俣 孟彦  
 松田 哲男  
 松本 忠彦
355. 松田 哲男 眼球摘出後眼窩底に増殖した *Aspergillus terreus*. 皮膚臨床. 27 : 1138-1139, 1985.  
 松本 忠彦
356. 旭 正一 慢性 PCB 中毒—カネミ油症. 皮膚診療. 7 : 835-838, 1985.
357. 旭 正一 免疫学の新しい話題 (V) 免疫学的測定法. 西日皮膚. 47 : 874-883, 1985.
358. 武石 正昭 Oxatomide のアトピー皮膚炎に対する臨床効果. 西日皮膚. 47 : 909-911, 1985.
359. 安元慎一郎 Malignant Fibrous Histiocytoma における好酸球遊走因子. 日皮会誌. 95 : 643-648, 1985.  
 磯田美登里
360. 中野 勉子 外観がいわゆる皮膚混合腫瘍に似た孤立毛包上皮腫. 西日皮膚. 47 : 1015-1018, 1985.  
 今山 修平
361. 旭 正一 免疫学の新しい話題 (VI) 接触皮膚炎とランゲルハンス細胞. 西日皮膚. 47 : 1093-1100, 1985.
362. 松本 忠彦 Chromoblastomycosis and Phaeoerythromycosis. Semin. Dermatol. 4 : 240-251, 1985.  
 松田 哲男
363. 和田 秀敏 手の放射線癌. 形成外科. 29 : 56-63, 1986.
364. 安元慎一郎 悪性胸腺腫に合併し、長期間持続した陰部疱疹と疱疹性瘰癧. 西日皮膚. 48 : 18-23, 1986.  
 大谷 朋子  
 森 良一  
 他
365. 松本 忠彦 カビによる疾病. 建築仕上技術. 11(3) : 64-68, 1986.
366. 仁位 泰樹 Albright's Hereditary Osteodystrophy (図説). 西日皮膚. 48 : 215-216, 1986.  
 入来 敦  
 今山 修平  
 旭 正一
367. 宮岡 達也 Dowling-Meara 型表皮水疱症. 西日皮膚. 48 : 222-227, 1986.  
 八島 豊  
 今山 修平
368. 西村 正幸 Subacute Cutaneous Lupus Erythematosus—A Family Study on the Erythrocyte C<sub>3</sub>b Receptor Reactivity. Proc. Jpn. J. Invest. Dermatol. 10 : 53-54, 1986.  
 高野 美香  
 林 紀孝  
 利谷 昭治  
 森戸 文隆  
 旭 正一

369. 旭 正一 慢性放射性皮膚炎 (物理的原因による皮膚病). 皮膚病診療. 8 : 47-50, 1986.
370. 旭 正一 体部の尋常性乾癬 (局所温熱療法) 皮膚病診療. 8 : 145-148, 1986.
371. 仁位 泰樹 Albright's Hereditary Osteodys- 西日皮膚, 48 : 236-349, 1986.  
入来 敦  
今山 修平  
旭 正一
372. 中山樹一郎 Cisplatin-DNA Adduct の免疫学的 西日皮膚, 48 : 417-423, 1986.  
定量とその臨床的意義.
373. 和田 秀敏 基底細胞癌治療法の検討. 形成外科, 29 : 346-354, 1986.  
野間 健  
仁位 泰樹  
陣内 恭子  
片山 眞里子  
三原 公彦
374. 石井 洋一 Subcutaneous Echinococcosis : A Jpn. J. Parasitol. 35 : 269-272, 1986.  
今山 修平  
宮岡 達也  
他
375. 松本 忠彦 シンバスの安全性に関する検討. 臨床と研究. 63 : 2359-2362, 1986.  
中山樹一郎
376. 松本 忠彦 No Granules, No Mycetomas. Chest. 89 : 151-152, 1986.  
L. Ajello
377. 旭 正一 体部の尋常性乾癬. 皮膚病診療. 8 : 145-148, 1986.
378. 武下 泰三 Eccrine Angiomatous Hamar- 西日皮膚, 48 : 859-863, 1986.  
今山 修平  
toma.
379. 松本 忠彦 抗真菌剤の臨床評価「皮膚科領域」. 臨床医薬情報. 26 : 759-761, 1986.  
栗谷 典量
380. 三原 公彦 Immunohistochemical Study of Brit. J. Dermatol. 115 : 187-192, 1986.  
磯田美登里  
Lysozyme in Lupus Mililaris Dis-  
seminatus Faciei.
381. 松田 哲男 Disseminated Hyalohyphomycosis Arch. Dermatol. 122 : 1171-1175, 1986.  
松本 忠彦  
in a Leukemic Patient.
382. 西村 正幸 Immunohistological Localization Med. Bull. Fukuoka 13 : 229-232, 1986.  
利谷 昭治  
旭 正一  
of Laminin, Heparan Sulfate  
Proteoglycan, Type IV Collagen  
and Fibronectin in the Dermo-  
epidermal Junction and its Alter-  
ation in the Blisters of Porphyria  
Cutanea Tarda.
383. 西村 正幸 Subacute Cutaneous Lupus Eryth- 西日皮膚, 48 : 879-882, 1986.  
林 紀孝  
利谷 昭治  
旭 正一  
ematosus.
384. 陣内 恭子 副陰囊の1例. 形成外科, 29 : 154-157, 1987.  
仁位 泰樹  
和田 秀敏
385. 和田 秀敏 遊離皮弁における Chemical 福岡医誌. 77 : 209-227, 1986.  
Sympathectomy.



386. 和田 秀敏 手植皮片における神経終末の検討。 日手会誌。 3 : 55-58, 1986.  
三原 公彦
387. 石橋 康久 The Pathogenicities of *Cylindrocarpon tonkinense* and *Fusarium solani* in the Rabbit Cornea. *Mycopathologia*. 94 : 145-152, 1986.  
H. E. Kaufman  
松本 忠彦  
香川 三郎
388. 松本 忠彦 *Sarcinomyces phaeomuriformis* : a New Dematiaceous Hyphomycete. *J. Med. Vet. Mycol.* 24 : 395-400, 1987.  
A. A. Pahye  
L. Ajello  
M. R. McGinnis
389. 吉利 優彦 潰瘍性大腸炎に併発した壊疽性膿皮症の1例。 内科。 59 : 183-187, 1987.  
松本 忠彦  
他
390. 和田 恭彦 Dupuytren 拘縮の治療経験。 西日皮膚。 49 : 79-87, 1987.  
三原 公彦  
和田 秀敏
391. 旭 正一 蚊の唾液内のアレルギーンについて。 西日皮膚。 49 : 246-251, 1987.
392. 飯田 隆雄 正常者の血液事ポリ塩化クアテルフェニル濃度。 福岡医誌。 78 : 305-308, 1987.  
竹中 重幸  
中川 礼子  
深町 和美  
高橋 克己  
旭 正一
393. 中山 礼子 ヒト血液と皮下脂肪における PCB 濃度とガスクロマトグラム類似性。 福岡医誌。 78 : 309-313, 1987.  
飯田 隆雄  
竹中 重幸  
深町 和美  
森 彬  
高橋 克己  
旭 正一
394. 竹中 重幸 ヒトにおける血中 PCB パターンと皮下脂肪中 PCQ 骨格異性体の関連性。 福岡医誌。 78 : 314-319, 1987.  
飯田 隆雄  
中川 礼子  
深町 和美  
高橋 克己  
旭 正一
395. 西谷 敬子 Cutaneous Invasion of Mucinous Adenocarcinoma. *J. Dermatol.* 14 : 167-198, 1987.  
西谷 弘  
下田 雄一郎
396. 竹内 実 甲状腺機能亢進症を伴ったサルコイドーシス。 西日皮膚。 49 : 418-421, 1987.  
磯田 美登里  
西村 正二  
三浦 功博
397. 西谷 敬子 抗ウイルス剤療法—臨床例と問題点—。 日小皮会誌。 6 : 3-9, 1987.
398. 中山樹一郎 *Hyperthermia* の悪性リンパ腫治療への応用とその理論。 *Med. Immunol.* 14 : 97-101, 1987.  
樋口 理恵  
壁村 まゆみ

399. 松本 忠彦  
A. A. Padhye  
L. Ajello Medical Significance of the So-called Black Yeasts. Eur. J. Epidemiol. 3 : 87-95, 1987.
400. 松田 哲男  
松本 忠彦 真菌症病名混乱と整理の動向一新しく提唱された「黒色菌糸症」と「無色菌糸症」. 医学のあゆみ. 142 : 755, 1987.
401. 松本 忠彦  
松田 哲男 組織内菌形態と疾患概念. 真菌誌. 28 : 171-174, 1987.
402. 和田 秀敏  
三原 公彦 正中頸裂. 西日皮膚. 49 : 808-811, 1987.
403. 松田 哲男  
松本 忠彦 黒色真菌. 化学療法の領域. 3 : 83-89, 1987.
404. 入来 敦  
幸田 弘 Angioblastoma (Nakagawa) (図説). 西日皮膚. 49 : 871, 1987.
405. 樋口 理恵  
磯田美登里  
三浦 和之 同種骨髄移植後に生じた急性GVHDの3例. 西日皮膚. 49 : 991-995, 1987.
406. 占部 篤道  
松田 哲男  
旭 正一 Pigmented Spindle Cell Nevus. 西日皮膚. 49 : 1032-1038, 1987.
407. 古賀 哲也  
西村 正幸  
木村 秀入  
田代 研児 Follicular Mucinosis の湿潤細胞の電顕的, 免疫組織化学的研究. 西日皮膚. 49 : 1032-1038, 1987.
408. 大崎 光彦  
今山 修平 Von Recklinghausen 病における頭部CT検査の意義. 西日皮膚. 49 : 1056-1059, 1987.
409. 松田 哲男  
松本 忠彦  
下妻 道郎  
渡辺 晋一 炭酸ガスレーザーによる足白癬の治療. 西日皮膚. 49 : 1093-1096, 1987.
410. 三原 公彦  
和田 秀敏 手のポーエン病. 日手会誌. 4 : 670-674, 1987.
411. 松本 忠彦  
L. Ajello Current Taxonomic Concepts Pertaining to the Dermatophytes and Related Fungi. Intl. J. Dermatol. 26 : 491-499, 1987.

### その他

412. 末永 義則 第19回日本医真菌学会総会印象記. 西日皮膚. 38 : 478-480, 1976.
413. 旭 正一 脱毛症. 毎日ライフ. 10月号 : 20-26, 1977.
414. 松本 忠彦  
(監訳) 不完全菌の分生子形成法 (Garry T. Cole) 西日皮膚. 40 : 1083-1104, 1978.
415. 松本 忠彦 書評 (Patterns of Development in Conidial Fungi). 真菌誌. 20 : 227, 1979.
416. 松本 忠彦 書評 (Biology of Conidial Fungi, Vols. 1 and 2). 真菌誌. 22 : 331, 1981.

- |      |                |   |                   |                         |
|------|----------------|---|-------------------|-------------------------|
| 417. | 沢江 義郎<br>日野由和夫 | 合併症としての感染症 (17 回) 福岡<br>感染症懇話会記録。   | 臨床と研究,            | 56 : 201-214,<br>1979.  |
| 418. | 幸田 弘           | 九州大学医学部皮膚科教室 75 年史。   | 西日皮膚,             | 43 : 932-936,<br>1981.  |
| 419. | 松本 忠彦          | 私のピルツ元年。  | 臨床真菌症別刷,          | 1983.                   |
| 420. | 本房 昭三          | 私のピルツ元年。  | 臨床真菌症別刷,          | 1983.                   |
| 421. | 松本 忠彦          | 世界の皮膚科学者 (Dr. Roderick J.<br>Hay)。  | 西日皮膚,             | 47 : 747-748,<br>1985.  |
| 422. | 松本 忠彦          | The 28th Annual Meeting of the<br>Japanese Society for Medical<br>Mycology. (October 27-28, 1984) | Intl.J. Dermatol. | 24 : 675-676,<br>1985.  |
| 423. | 松本 忠彦<br>(監訳)  | Centers for Disease Control (CDC)<br>医真菌部門 (Keith Haglund).                                       | 今日の医学,            | 69 : 61-64,<br>1986.    |
| 424. | 松本 忠彦          | 科学者の映像—Dr. Libero Ajello.   | 今日の医学,            | 69 : 65-66,<br>1986.    |
| 425. | 松本 忠彦          | CDC 留学記。  | JAMIC Journal,    | 1985 (5) : 22,<br>1985. |
| 426. | 今山 修平          | 世界の皮膚科学者 (Prof. Irwin M.<br>Braverman)。   | 西日皮膚,             | 49 : 931-932,<br>1987.  |



昭和62年3月 占部治邦教授退官記念祝賀会



昭和 51 年 4 月 第 75 回日本皮膚科学会総会  
P. de Graciansky 教授を囲んでの昼食会



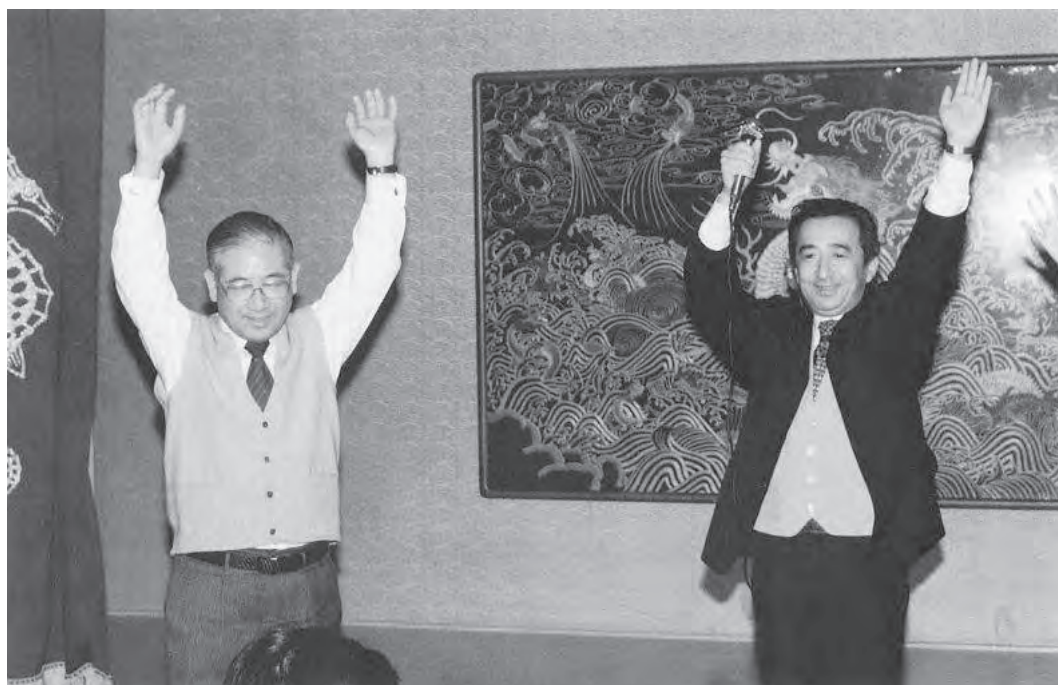
昭和 55 年 11 月 第 24 回日本医真菌学会総会  
懇親会で L. Ajello 博士夫妻との鏡割り



昭和 55 年 9 月 H. Götz 教授と鹿児島海岸にて



昭和 57 年 9 月 福岡を訪れた I. M. Freedberg 教授夫妻,  
K. A. Arndt 博士夫妻と博多人形工房にて



昭和 53 年 3 月 西尾一方講師（当時）の産業医大教授就任を祝って



昭和 55 年 11 月 第 24 回日本医真菌学会総会に先立って  
開催された医真菌学講習会で講師として



昭和 62 年 3 月 退官記念祝賀会にて濱田教授，  
三木教授，岩崎博士らと



昭和 53 年 医局で奥野太一郎博士，幸田 弘助教授（当時）らと





昭和 47 年 医局対抗野球大会で  
安田 勝博士と



昭和 59 年 2 月 還暦記念祝賀会の席上  
奥様，お孫様と



昭和 52 年 6 月 御自宅で医局員と

## 退官記念祝賀会祝辞

### 祝 辞

安 田 利 顕

国際小児皮膚科学会名誉会長

占部先生のこういう祝賀会でまっさきにしゃべれということで、非常に恐縮しています。考えてみますと九大の先生方以外で占部先生とのつき合いが一番長いのは恐らく私ではないかと思えます。今日樋口先生もお見えになっていますが、私は戦後樋口先生に非常に親しくして頂いて、よく福岡に呼ばれて来ました。その時いつも樋口先生について来られた3人の皮膚科の若い先生方がおられました。その一人が占部先生で、あとのお二人は今日ここにお見えの広島市で開業していらっしゃる坪井尚先生と広島県福山市で開業していらっしゃる岩崎先生です。そうして私は御三人を樋口門下の三羽鳥と呼んでたし、そういつて人々に紹介していました。樋口先生がまだきわめてお元気なところで、その3人の先生も御一緒によく飲んで歩いた思い出は私の記憶の中に懐かしいものとして残っています。そのために占部先生はもちろんですが、坪井先生、岩崎先生にも今日まで非常に親しくして頂き、またいろんな事でお世話になっております。占部先生に初めてお会いした時、占部先生はあまり背の高い方ではなくて、岩崎先生が非常に高いものですから、非常にコントラストのいいお二人だったんですが、占部先生は非常に酒が強いというのが第一印象でした。東京の五反田で一緒に飲んだ時、先生は日本酒がお好きで夜が明けるまで一緒に飲んでいた思い出があります。占部先生が若い時にはそういう風に非常に元気な方であり、そうして非常に活潑な方だったんです。ですから私は今でも占部先生と酒を飲む時は、日本酒はどうですかとお勧めしているわけです。

それと同時に占部先生で感じたことは非常にしんのしっかりした方で、また間違ったことの非常に嫌いな方であるということでした。その性格は長い間つき合っただけで今日まで少しも変わらない。しかし先生は決して頑固な方ではなくて、非常に軟らかな面も持っておられます。今日先生の研究回顧の中でも触れておられましたが、私が先生にプレジデンシャルアドレスというのをやってくれるということをお願いしましたら、快よく引き受けて下さいました。現在はいろんなプレジデンシャルアドレスがおこなわれていますが、占部先生のプレジデンシャルアドレスが一番私の頭の中に残っていて、しかも私の考え方

に一致した非常によいアドレスだったと考えています。そういう風に、先生は硬軟両面を持っていらっしゃるどころがあり、それは先生の学問にもあらわれております。先生は真菌を専門にしておられて現在は国際医真菌学会の会長をしていらっしゃると思いますが、そのお仕事の中にも先生の軟らかい面と堅い、ある意味では一徹な面がまざっています。そういう昔の思い出があるせいか、私は何か頼もうという時はまっ先に占部先生が頭に浮かんできます。それでここ10年くらいの間にいろんなことを先生にお願いしてきました。その一つに、私は日本小児皮膚科学会を創設して運営委員長をつとめていましたが、それをやめるにあたってぜひ占部先生に後を継いで頂きたいとお願いしましたところ、快く引き受けて下さり、昨年第3回国際小児皮膚科学会を占部会長のもとに非常な成功裡に東京でおこなうことができました。きのう東大出版会の人々が来ましてそのプロシーディングスが出来て持って来ましたが、非常に素晴らしい本でした。皆様にも占部先生の記念の本として是非一冊求めて頂ければまことに有難いと考えております。

それからもうひとつ、アメリカの学会のことですが皆さんはAAD(American Academy of Dermatology)という学会はご存知と思いますが、もうひとつ、ADA(American Dermatological Association)という学会があります。ADAは今年が104回だったと思いますが、100年以上の歴史をもっているアメリカで一番古い学会です。非常に権威のある学会で、これには国外のhonorary memberというのがあるが日本にもかなりいらっしゃいます。私はここ10年くらい毎年行っておりますが、日本からどなたもいらっしゃらないのですね。そこでどうしても日本からもう少し来ていただきたいと考えました。そのとき占部先生がメンバーになられたら必ず来ていただけるんじゃないかと考えまして、占部先生のデューク大学時代の恩師のCallaway教授という、かなりお年の方ですが、その方にぜひ占部先生を会員にして頂きたいとお願いして、占部先生にメンバーに加わって頂いたわけです。その翌年から毎年一緒に出席して頂いておりますが、私が一番感心したのは、Callaway先生が占部先生を非常に大切にされるんですね。私なんかはそっちのけで、占部先生と奥様のお二人を招待されたりして非常に大切にされる。これは恐らくデューク大学にいらした頃に占部先生の人柄というのをCallaway教授が認めてのことだろうと思います。今年の2月にもハワイのマウイ島でその学会があつて、占部先生とそのときはここにいらっしゃる三浦祐晶先生も出席していただいて私は肩身の広い思いをしたわけですが、その時のゴルフコンペで占部夫人は女子の部のチャンピオンになりました。ですから先生はこれからそういう元気な奥様と今後とも元気でお暮らし頂きたいと思ひますし、今後の御健康を祈ります。

そうしてここで一つ思い出したことは、昔樋口先生にこういうことを言われたことです。それは、「俺は九州の皮膚科の探題だ。だから俺の所を通らない薬は九州にひろげないんだ」と。今はそのころの樋口先生の時代とは違いますけれども、これから九州の皮膚科をまとめていくには占部先生の力がぜひ必要じゃないでしょうか。ですから先生も自分は九州の探題であるという気持ちをもたれて、広く総括的にものごとを眺めて九州の皮膚科をリードして頂く、これを忘れないでいただきたいと私は思っています。そういう意味で、今日ここで教授は退官なさいますが、今後の占部先生の九州の皮膚科における、あるいは日本の皮膚科さらに国際的な皮膚科学会におけるご活躍をお願いして私の挨拶に代えさせて頂きたい。どうも有難うございました。

## 御退官を祝して

石橋 康 正

日本皮膚科学会理事長

唯今御紹介にあずかりました石橋でございます。この度は占部先生、無事御退官おめでとうございます。心からお慶び申し上げます。

占部教授は、先程の先生の御講演にもありましたように、昭和23年九州大学医学部を御卒業になり、その後一時久留米大学の方に転出されましたが、昭和46年教授としてお帰りになってから今日まで、九州大学医学部皮膚科学教室の発展に心をくだいて来られました。

その間にあげられました輝かしい御業績の数々は、既にお手許の資料にもありますので、その一つ一つをここで御紹介する必要はないと思いますが、日本皮膚科学会関係につきましては、私の立場もございますので、若干触れさせて載せます。

占部教授は昭和39年から評議員として、また昭和47年からは理事として、教育委員長、雑誌編集長を歴任され、また昭和59年からは副理事長として、日本皮膚科学会の運営、発展に多大な貢献をされて来ました。殊に、昭和51年には、第75回日本皮膚科学会総会を、この福岡の地で開催され、極めて盛会裡にこれを修められています。まさに日本皮膚科学会の重鎮であり、なくてはならない存在でございます。

私は、昨年はかならずも若輩の身で理事長に推されましたが、慣れないことでもあり、色々とはまどう事も多くございました。そうした際に、占部教授は副理事長としてまるで子供に対する父親の様な感じで、良き相談相手として数々の貴重な御助言を戴きました。ここに改めて厚く御礼申し上げます。

占部教授は、私のような若輩がこう申し上げるのも潜越ですが、やはり判断力、決断力に秀れた典型的九州男子のように思います。そのお人柄につきましては、私、感じるところが沢山ございますが、時間もございませんので、2、3大変印象に残っていることを御紹介させて戴くに止めたいと思います。

その一つは先程占部教授の御講演でもありましたように福岡での第75回日本皮膚科学会総会で、先生が日皮学会では初めての Presidential address をされたことであります。現在では皮膚科学会で会頭が Presidential address をするのは、あたりまえのことのようになっていますが、当時としては画期的な出来事でその後の懇親会の席上当時理事長で

あった安田利顕先生がこの講演を激賞されていたことみ今でも覚えています。

御講演の内容は、浅在性白癬の診断名は従来のもものでは混乱を招くこともあるので病変の見られる部位名を付したアメリカ式のものが良いのではないかと、いった趣旨だったと思います。真にもっともな話で、先ほどの御講演でも皆様お分りと思いますがその淡々とした明快な語り口とともに、聞き終えた後一種の清々しさを覚えたことを記憶しています。

その後占部教授と親しくお話しをさせて戴く機会を得ましたのは、1977年第15回国際皮膚科学会がメキシコ市で開かれた時のこととございます。この旅は、久木田教授、中溝教授ともども御一緒させて戴いたものでしたが、私にとりましては初めてのアメリカ旅行であったこともありまして、大変楽しいものになりました。その旅の中で特に印象深かったのは、アメリカ滞在中丁度ロータリークラブの昼食会の日におつかりました。我々3人は近くのレストランでのんびり昼食を取ることにしましたが、占部教授はメンバーでございましたのでお一人で色々と昼食会の行われる場所をお聞きになり出掛けて行かれました。ロータリークラブではたとえ旅行先であってもその地で昼食会に出席することが義務づけられているそうですが、それにしても慣れない、しかも遠い、見知らぬ人のいる所へ出掛けて行くのは仲々気が進まないと思いますが、先生にとってはごくごく当たり前のことのごとくございました。このこと1つを取ってみましても、先生の常日頃のごまかしのない誠実なお人柄が偲ばれるように思います。

先生はこの度まさに功成り名遂げの御退官となりました。この無事御退官の蔭には奥様の並々ならぬ内助の功もあったことと存じます。心から御苦労様と申し上げます。占部教授は退官の後は第一線を引かれ、地域医療に徹する御所存のように、2、3日前突然戴きました挨拶状で知りました。どうか今後益々御壮健で、我々若輩の日皮会員に対しまして従来にも増して貴重な御助言や御鞭撻を賜りますよう、心からお願いする次第でございます。多少私個人の印象話が長くなった気も致しますが、そのことを最後にお詫びしまして私の祝辞とさせて戴きます。この度は無事御退官本当におめでとうございます。

## 祝 辞

山 元 寅 男

九州大学医学部長

ただいま御紹介いただきました医学部長の山元でございます。本日占部教授のこのおめでたい御退官の記念会におきましてお祝いの言葉を申し上げることは、大変光栄に存ずる次第でございます。

占部教授は昭和 23 年に私共の九州大学医学部を御卒業になり、本日ここにお見えの樋口謙太郎教授のもとで皮膚科学を御専攻になりました。昭和 36 年からは久留米大学の教授として久留米大学皮膚科学教室の発展に尽力されました。そして昭和 46 年紛争のまだ盛んな時に母校の九州大学にお帰りになり、大変御苦勞をされながら皮膚科学教室の発展と九州大学医学部の正常化、発展のために大変御尽力いただきました。それから今日まで、先生は多くの業績をあげられ、多くの後進をお育てになったわけでございます。その間北九州の油症事件というのがありましたが、その原因究明と治療のために九州大学の研究班が組織されましてその班長として班をまとめられ、油症の解明、治療に尽力されました。この点も、九州大学としましては大変感謝申し上げる次第でございます。教育研究におきましてはもちろんのこと、九州大学医学部の附属病院長としても病院の発展に大変御尽力を賜りました。今日の九大病院がこのように活気を帯びて参りましたのに占部先生の御尽力のあったことを私共は一時も忘れることはできないわけでございます。

占部先生には九州大学医学部のみならず大学の評議員として全学の管理運営にも大変御尽力いただきました。九州大学のほかの学部の先生方にも、占部先生の医学部における存在は広く認識されております。また占部先生は九州大学医学部の同窓会への思いも大変熱うございます。皆さんのお手元のこの祝賀会のパンフレットの表紙に、九州大学医学部のシンボルマークがございます。現在、私共はこれをレターヘッドにして公式文書にも、私的文書にも、教室の手紙にもよく使っておりますが、これは占部教授のデザインになるものでございまして、このデザインは占部教授の名前とともに永久に私共のもとに残るわけでございます。

このように占部先生は九州大学医学部にとりましてはなくてはならない存在でございましたが、このたび大学の定めによりまして御退官ということになりました。私は、昭和 60

年の1月に医学部長に就任早々いろんなことで占部教授と一緒に汽車に乗って方々駆けまわりました。その時から占部先生には兄貴のような気持ちで適切な御指示を今日まで頂いております。個人的にもまた教授会としても大変に寂しいことでありますけれども、幸い先生はこの福岡の地で地域医療のために今後御献身なさるといふことですので、私共はもうそれだけでもかなり意を強うしております。御退官後も従来どおり私共残るものに御指導と御教示を賜りますれば大変有難いと思っている次第でございます。どうか今後とも奥様共々御自愛下さいまして、御健康にて地域医療のために、そして皮膚科学会の発展のために、そしてまた九州大学医学部の発展のためにも御指導をお願いいたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。本当に先生、長い間御苦労さまでございました。



## 占部先生の退官を祝す

樋 口 謙 太 郎

九州大学名誉教授

私が九大教授に就任したときの最初の入局生が占部氏のクラスで、いずれも優秀な人達であった。奇しくも九大生体防御医学研究所（旧温研）の中溝教授も同年で、ともに本年定年を迎えられる。私が元気であったとき、教室員とともに東京の学会に出たが、やくざもどきの表現をすれば関東安田組（利顕氏）に対し、九州の樋口一家が子分を引きつけてなぐりこみをかけた格好であった。しかし月日がうつるに従って、親分はファイトを失い、子分の大政、小政が同時に勇退するとなって、淋しいかぎりである。

占部教授は、私のところで助教授を勤められ、ついで久留米大学教授を経て、私の後任として九大教授に就任された。九大皮膚科では、第4代の主任ということになる。私は在職中5回の全国学会を担当し、1年間外遊したが、その間、留守番として、あるいは協力者としての占部教授の労を多とするものである。

占部教授は、皮膚科入局のあと、自力でロックフェラー財団奨学生を受験され、めでたく合格されて、Dr. Conant (Duke 大学) の許で真菌学を勉強して来られた。故に、当然英語には堪能であり、その他ドイツ語にも秀で、その後の国際的な学会活動の基礎を作られた。また真菌学研究の結果は、私どもの「真菌病学」の成書を発刊するに当って、大いに力になってもらった。

いずれ占部教授の業績集が出版されることと思うが、真菌関係のみならず、皮膚科学一般、梅毒学に関する論文が多く、内容はもちろん立派だが、記述も要領よく、かつ綺麗な文字で書かれていて感心させられた。また九大皮膚科で発行してきた「皮膚と泌尿」（のちの「西日本皮膚科」）の編集を担当され、その評価は高いものがあつた。私自身が本誌を出していた頃は、経営に苦心を払ったものだが、占部教授に代わって、ページ数、紙質が向上したにもかかわらず常に黒字を出していて、同教授の手腕に低頭した。私は本誌の編集後記を毎号書かせられたが、占部教授もそれを踏襲し、簡潔で興味ある文章を書かれて評判がよく、この点でも私は彼に及ばなかった。また多数の研究生の指導をただけでなく、最後は附属病院長として管理職の役を立派にやり遂げられた。

占部教授の強味は、健康に恵まれ、病欠された記憶がない。海外に行かれる機会は非常

に多かったが、疲れを知らないようであった。趣味は、絵画が素人の域を脱し、室外ではゴルフに熱心であった。ゴルフについては、最初の手ほどきを私が指導した覚えがある。しかし最近腕が上がり、私など相手にされなくなってしまった。

私どもは占部教授の仲人であり、このことだけは鼻を高くしてよいと思う。何故ならば、優秀な子供さんに恵まれ、ことに3人の男子はお父さんのあとを継いで、医者を目指しておられ、その目的を達成されつつある。夫人は内助のみならず、外助の面でも大いに活躍され、占部氏の活躍に援助の手を伸ばされている。ただ弟さん（皮膚科医師）が最近逝去された点が気の毒であった。占部氏は、退官後その弟さんの医院を引継がれる決心のようである。そうすると福岡の臨床皮膚科医会に有力なメンバーが加わることになるであろう。

## 祝 辞

幸 田 弘

佐賀医科大学教授

占部治邦教授の御退官にあたり、門下生を代表しまして、一言お祝いの言葉をのべさせていただきます。

先生は昭和46年7月、久留米大学より、九大皮膚科教室第四代教授として、母校にお戻りになりましたが、当時大学は学園紛争の直後で、学内は荒廃し、医局の人間関係にも、冷たいものが感じられる時でございました。はじめてお書きになられた「西日本皮膚科」の編集後記に、「ごあいさつ」と題しまして、当時のお気持ちを書いておられますが、その文末に「蟬しぐれの校内を歩いていると、昔習った、国破れ山河ありという古い文句を、ふと思い浮べました」と結んでおられます。そこには、先生の母校に対する深い愛情と一抹の寂寥感が、そうしてその奥から、九大再建に対する脈々たる意欲を感じ取ることができるのであります。それからの先生は、まさに巨人の歩みでございました。直ちに医局の研究体制を整え、厳しい中にも人の和を大切に、医局員を御指導賜りました。そして、早くも5年後には、日本皮膚科学会まで、御在職の16年間、数々の学会を主催され、多くの話題と功績を残されました。先生を慕って入局した者98名、うち学位を頂戴した者は17名に達しております。

一方、学内にありましても、病院長をはじめ、かずかずの要職をおつとめになられたましたが、中でも、私の一番忘れがたいのは、カネミ油症事件でございまして。九大御着任後もない昭和47年に、油症研究班の班長になられたましたが、当時は、油症患者の認定をめぐるまして、もっとも険悪なときでございました。講義の最中に、油症患者やその支援団体が乱入するという状況の中にあつて、先生は、試意をもって根気よく患者団と話し合い、そして、遂には笑って話ができるまでになり、そうして今日の和解の糸口をつくられたのは、まことに偉大な功績でございまして、先生の、計り知れない人間の大きさを、垣間見た事件でございました。

16年間、寸時たりともゆるがせにせず、いつも全力投球で歩いて来られた先生の道は、見事な男の花道であり、私共の到底たどることのできない至高の道でございまして。今月をもちまして先生は、九大を御退官になりますが、私共門下生にとりましては、先生は生涯

の師であり、これからも変わることなく、先生の歩まれるうしろ姿を仰ぎ見ながら生きてゆきたいと存じます。このたびの定年御退官を、心からお祝い申し上げますとともに、先生のますますの御健康をお祈り申し上げます、門下生一同のお礼の言葉といたします。

## 御退官を祝す

高橋良平

九州大学学長

それでは、御指名によりまして、乾杯の音頭をとらせて頂きますが、その前にちょっと一言申し上げます。ただいまは、お褒めの言葉ばかり続きましたので、私は少しケチをつけたいと思います。

私は、占部君とは、中学から一緒でございます。高等学校も理独で一緒でして、私も医者になろうかと思ったんですけども止めまして、医者と石屋とつまるかつまらぬかで少し違いますが、私は、つまらない方の石屋になりました。

占部君は一月生まれで、これは、寸足らずじゃなしに月足らず、早生まれでございます。したがって、クラスの中でも小さい方で、非常におとなしいひねた子でございました。教練の時なんか、ときどき大きな声を出すので、「ああ占部がおるな」ということがわかるくらいで、非常におとなしいほうでございました。同級生の中には、医者の子息さんが何人かおりましたけれども、医学部に残ったのは占部君だけでした。卒業後は、占部君が助教授になっておられた時に、はじめてお目にかかりました。ちょうど私がドイツに行っておりました時に、占部君の親分の樋口先生がやはりドイツにおいでになりました。私の教授が樋口先生と同級でして、はからずも教授・助教授同志が同級というようなことになったわけです。たまたま会がございまして、樋口先生の横に占部君がおるものですから、何だお前かというような次第でございます。

その時までの印象では、占部君は非常におとなしいという感じでしたが、久留米から帰られた時には、非常に立派な、豪快な先生になってこられたものですから、私としては、びっくりしたわけでございます。特に病院長をしておられる時には、病院の井戸水の問題でいろいろかわりができ、病院地区の「井水問題委員会」にも参加して頂きましたが、占部君は実にテキパキとした処置の仕方でもございました。占部さんの、あのナヨナヨとした所から、どうしてああいう風になってきたらうかと、不思議でしょうがなかったんですけれども、今日樋口先生のお話をうかがいまして、あれは奥さんのせいだと私も思いました。(笑声)全く同感でございます。長いこと苦勞なさって、こういう立派な仕事をなさり、これほど沢山な方々に送られて御退官になる占部さんは、誠に幸福だと思います。大

体、学校の先生というのは、銭勘定はできませんけれども、奥様が横にいらっしゃいますので、立派に病院もやっているといます。あなたは、ただ黙々と働けばいい。(笑声) お前さんは、そのくらいの方がいいんで、後は奥さんにまかせて下さい。ときどき、奥様と御一緒に、好きなゴルフをなさって、また、元気な姿をお見せ頂きますようお願いをいたします。誠におめでとうございます。皆さん、どうぞ乾杯の御唱和をお願いいたします。占部御夫妻に乾杯。

## 占部教授の御退官に際して

福 代 良 一

金沢大学名誉教授

占部教授に初めて親しくお目きかかったのは、昭和30年代の初めの頃、五反田のカサブランカにおいてであった。当時関通の安田博士の紹介の言葉は「九州一の酒豪だよ」であった。1959年9月、矢村講師と共に、Idlewild 空港（現 Kennedy 空港）へ占部教授御夫妻を迎えに出かけた。到着口の建物は木造平屋その屋上で就航後まもないジェット機（707）を初めてみたが、凄い音がした。奥様が赤チャンを抱かれ、先生はオムツ籠を持って後からの形であった。その赤チャンが今は九大の大学院生の由である。同年10月マイアミのグリセオフルビン・シンポジウムに、また12月はシカゴのアメリカ皮膚科学会総会に出席したが、いずれも占部教授と同宿をお願いした。因みにその時のツイン料金がマイアミで約13ドル、シカゴ7ドル半；今からみると全く嘘のような話であった。その後も皮膚科と真菌の国際学会ではいつもお目にかかったが、一昨年、アトランタの国際真菌学会（ISHAM）で会長に就任されたことは特筆されねばならぬ。先生の業績・経歴・お人柄からみて当然であろうが、日本医真菌学会の誇りである。

占部教授の数ある業績の中から二つをとり上げてみる。一つは「表在白斑の分類」他は「梅毒の治療」のことである。前者については、わが国で久しく通用していた表在白斑の病型、特に斑状小水疱性白斑・頑癬・汗疱状白斑の3者を止め、英米流の部位別分類の採用を提唱されたことで、今ではそれが定着した。その功績は小さくない。後者については、梅毒のペニシリン療法がわが国においてとかく過剰になり勝ちである点を早くから指摘されたことで、今ではそれが一般に理解されてきたようである。この功績も大である。占部教授はなおスポロトリコーシスのヨードカリ療法にてついても類似の指摘をされている。

占部教授は長年「西日本皮膚科」の編集・発行をやって来られたと思うが、同誌は現在隔月に発行され、1号約200頁で、内容・体裁ともに大きく進歩したように見える。30頁近い文献抄録を備えていることは特異で、若い読者に役立つであろう。本誌にも先生の御尽力と功績がうかがわれる。

占部教授は教室で大声をあげられたことがあるであろうか。弟子を叱られたことがある

であろうか。そういうことは恐らく絶えて無かったであろうと想像している。占部教授を語る時、奥様のことに触れないのは片手落ちのように思われる。ただし、内助の功などというつもりは毛頭ない。先生と奥様が表裏一体というか、息が合っているというか、そういうお二人のように感じられる。御子息は3人あり、初めに触れた赤チャンは真中に当る。御長男も九大の大学院，下の方は金沢大医学部の6年生，いずれも先生の後を継がれるようで、羨ましい限りである。

先生の今後益々の御健康を祈念して筆を擱く。



## 占部先生のこと

大 原 一 枝

関西医科大学名誉教授

占部治邦教授が本年3月九大を停年ご退官と承り、しみじみ年月の経過の早さを感じ入っております。

私が先生にお目にかかったのは、何時のことでしたか、多分皮膚科学会と、当時創立間もなかった医真菌学会の双方でのことと思います。私が関西医科大学の教授に就任したのは昭和33年で、その頃の占部先生の若々しい中にも大人の風格のあるお姿が今でもアリアリと思い出されます。当時先生は九大助教授から久留米大教授にご就任間もない頃でいらっしゃったかと思いますが、以後毎年数回、学会でお目にかかる度毎にそのお人柄にふれ、また含蓄あるご発言内容を拝聴して、益々敬愛の念を深くしたものでした。

昭和46年、私が関西医大を退任しました年に、先生は樋口教授の後任として九大に帰任され、伝統ある九大皮膚科教室を主宰され、内外の学会でご活躍、大きな業績をあげられたことは衆知の通りです。

私自身退任後は開業医となり、学会へもご無沙汰勝ちとなり、在任中に比べてお目にかかる機会はずっと少なくなりました。然し乍ら学会機関誌上で始終ご業績に接し、また対談や座談会の記事でお写真などを拝見していましたので、長くお目にかからないような気はしませんでした。特に西日本皮膚科の巻尾の編集後記を署名入りでお書きになっているのを、毎号楽しみに拝見して、いつもキラリと光るものがある文章に感嘆を禁じ得ませんでした。

1967年のミュンヘンの国際皮膚科学会へ出席のための旅行では、偶然にも樋口教授ご夫妻、占部教授ご夫妻、武田教授、西尾教授など九大関係のご一行と同一のツアーに入れて頂いて、ヨーロッパ旅行のお伴をしました際、美しく明るいご性格の奥様にもいろいろお世話になりました。当時の写真も今尚手許に沢山残っており、私の若き日のよい思い出になっております。旅行のあと、先生からルーブル美術館の中で私が大きなヴィーナス像を下から見上げている写真を送って頂いて、何時の間に撮って頂いたか気付かずにおりましただけに、ご好意のほど殊にありがたく、いつまでも私の心に残っております。そのほか、毎年頂くお年賀状がご自身のお作品の美しい画で飾られていて楽しく拝見したことなど、

思い出は尽きません。

さわやかで温かくほのぼのとした先生から頂きました数々のご懇情に感謝申しあげ、先生ご夫妻の益々のご健康とご発展を心からお祈り申しあげ、拙文をおわらせて頂きます。

## 祝 辞

三 浦 祐 晶

北海道大学名誉教授

占部治邦教授が本年3月で九大を定年退官されることになったと聞いて、ある種の感慨を禁じ得ませんでした。それは、まだまだと思っていたのにもうそういう時を迎えたのかというある淋しさ、それにしても随分永いおつき合いであったなあという懐しさ、そして今度はわれわれの仲間に加わったという嬉しさというか楽しさというか、そんなものが入り交じった複雑な気持ちでありました。

占部先生とお知り合いになったのは多分昭和30年ではなかったかと思います。もちろんその前から学会ではお眼にかかっていたのでありましょが、話を交わしたのはこの年の9月に札幌で北大皮膚科開講30周年記念学会が主催され、「皮膚結核」のシンポジウムで占部先生が「九州における皮膚結核の概況」と題して、また私が「皮膚結核臨床上の2、3の知見」について発表したからであります。しかしこの時はお互いに助教授で、いわば主（「ぬし」と読まずに「あるじ」と読んで下さい）持つ身であり、特に私は学会の世話係で多忙であったのでゆっくりお話をする暇がありませんでした。

その次はそれから間もなく、昭和32年であったでしょうか、福岡で化学療法学会が開かれた時にお逢いしました。私はその時は教授になり立てでしたが、キャバレー「赤い靴」で学会の懇親会が或いはその二次会が開かれて、樋口教授が真先にダンスをなさったのを驚いて見ていたように記憶しております。（記憶違いでしたら御免なさい。）占部先生は助教授で学会を切り廻しておられましたから、その時も親しくお話はできなかったように思いますが、しかしその時から占部先生はいずれ樋口教授の後を継ぐ方だと思っておりました。

本当に親しくおつき合いするようになったのは恐らく先生が久留米に赴任されてからだったようでありましょ。同じ頃にロックフェラー財団の奨学金でアメリカに留学（私にとっては遊学でしたが）して共通の話題もあり、何よりもゴルフという最良の仲立ちによって20数年の御交情を頂くことになったのであります。つい先日もアメリカ皮膚学会の総会でハワイのマウイ島で奥様ともどもゴルフを楽しんで参りました。

先生のゴルフは堅実そのもので余り冒険はしないようですが、時に意外な好スコアを出

されることがあります。特に沖縄から青いヘッドの女性用クラブを入手されてからショットが良くなったようで、それで自信がついたのか最近飛距離が一段と伸びて来た感があります。私にとっては油断のならない好敵手であります。

先生が九大に帰られてからは毎年開講記念地方会にお招きを受けて出席し、時には大相撲九州場所も見物させて頂きました。お蔭様で福岡にもお馴染ができて、中洲の某クラブでは九大出身と間違われれて、「札幌に行って何年になりますか」と尋ねられたこともありました。もっとも当時北大には島啓吾教授（整形外科、故人）という有名な九大出身の先生がおられて、私はその子分の一人と見られておりましたから無理からぬ話ですが、それにしてもテレくさいような、嬉しいような変な気持ちでした。

占部先生は一見謹厳実直で節度のある、すべてに慎重な方ではありますが、こんなエピソードもあります。ゴルフだったか、何か他の会合だったか忘れましたが、大勢でどこかの温泉に泊ったことがあります。皆と一緒に浴衣に着替えて湯に浸ったのですが、あがってみると私の脱いだ浴衣とパンツがありません。「あれー？」と見廻していたら既に浴衣を着ておられた占部先生が「何だかおかしいな」と云って良く見たら私のパンツをはいて浴衣を着ていたという次第でした。大笑いになりましたが、これが占部先生だからなおおかしかったのだと思います。

しかし決して堅物ではなく、洒脱な一面も備えておられるようです。カラオケで「氷雨」など歌われるようになったのは比較的最近のことではないかと思いますが、別府のあるスナックの採点付きカラオケで仲間のうちでは最高点をあげられたのには一驚しました。そのほか絵もお上手ですが、まだその他色々な御趣味をお持ちなのではないかと想像しております。

お見受けしたところ十分な余力を持っての御退官のようです。これからは亡き令弟のあとを継いでの御開業だそうですが、是非新しい意義のある世界を開拓されるように心から期待しております。

今後ともよろしくおつき合い下さるようお願い申し上げます。(1987年3月21日)

## 九州男児

吉田良夫

山形市

樋口先生がガバナーをされ、占部先生も会員であられる国際ロータリーという組織がある。1976年その研究交換グループの団長として30歳前後の若い団員と共に、米国ペンシルバニア州などの中小都市70余りを2ヵ月間にわたって訪問したことがある。ホームステイしながら老若男女各層の人々と話しあう忙しいながら充実した毎日であった。帰国真近かになって団員の1人が「最も米国人らしい米国人は誰だったろう」ときりだした。「最も米国人らしい米国人なんていないのが米国人じゃないか」と私は答えた。

所で日本ではこんな話もある。私の住んでいる山形の銀行、証券会社、保険会社、大手建設会社などの支店長が転勤する時、この土地の人々の性格や習慣、それに応じた商売のやり方を詳細に申し送るといふ。土地っ子でない私にその一端をもらしてくれたが、思い当ることばかりだった。

清寺眞君が東北大学に赴任して間もなく山形を訪れわが家に泊ったことがある。彼は東北人の特徴など知りたがったが、その中にトップリつかっている私には答えようがなかった。話はとんでそれでは九州男児らしい皮膚科医は誰だろうということになった。昭和19年西部46部隊に入隊したのが私と福岡との最初の出会い。オレゴン大学留学中樋口先生をポートランドにお迎えしたことなどもあって、九州大学皮膚科にしげしげといりびたり一山形の医師会は私を九大出身と認定し、家内は皮膚科の学会は九州でばかりと思ひこんだ時期もあった。おかげ様で九州の皮膚科の方々とは大変親しくして頂いている。そうすると九州男児と云われても全く分からない。大体黒田武士とか西郷どんを思いうかべても九州をひっくりめて考えたり、人間を画一的に決めてしまうのはおかしいことである。

しかし清寺君から皮膚科には九州男児はいないんじゃないかと云われた時、西尾一方と占部さんと中溝慶生のことを思いうかべた。これは3人と知りあった順序でもある。

天才はだの西尾一若い頃の彼のカミソリのような切れ味は今もなお衰えをみせない。人生の達人ともいえる中溝のキャンパシティは他に類をみない。占部さん—どういふわけか「さん」をつけてしまうが、彼の学問も身の処し方も非常に明快である。学問も一定のレベル以上に達しないと初心者にも分かるようには話せないものようである。そして頂点近

くなると、一定のレベル以上の人々に対し、本当の問題は何かを考えさせることができるようになる。占部さんの話をきいているといつも何かを考えさせられる。そして素直に勉強しなければと自分に云いきかせる。3月31日に定年退職、4月1日開業された鮮かな身の処し方—これだから人生はすばらしいと胸のすく思いである。

この3人に共通することは心のあたたかさであり、さりげない、からっとした男の友情である。恩師伊藤実先生が亡くなられた時、畏友清寺眞が夭折した時、占部さんが示して下さった心づかいには応える言葉もない。私が第1回日本臨床皮膚科医学会臨床学術大会の会頭をつとめた時は遠路、御多忙中をかけつけて下さり、私がほとんどの会員を知っていることを喜んで下さった。山形はいつがいいかときかれて、真正直にそれは一番寒い時ですよと答えたら、2月厳冬の蔵王の樹氷を楽しみ、山形勉強会、山形ロータリークラブでスピーチをして下さった。数えればきりが無い。

おそらく私は生涯九州参りを続けるだろう。心の広さと暖かさこそ九州男児の真随ではないかと、今なら清寺眞に応えられる思いである。

## 祝 辞

森 岡 貞 雄

日本大学教授

占部治邦教授には本年3月をもってめでたく御退官を迎えられました。此処に先生御在職中の日本皮膚科学会に尽された華々しい多くの御業績、また国際的な先生の数多くの御活躍に対し心から敬意を表するものであります。

先生と私は同年配であり、これ迄多年に亘り御交際をいただき、今考えても数知れぬ思い出をもっております。先生の日本皮膚科学会理事として、また先生の国際皮膚科学会副会頭、日韓合同皮膚科学会々頭、日本皮膚科学会総会々頭等々、先生の見事な手腕と運営に就ては衆知のことであり、今更私から申上げることもないと考え、本稿では皮膚科学者としてではなく、私の身近な友人としての先生とのふれ合いの中で思い出すことを2、3述べさせていただきますことにします。

先ず第一に感じますことは、先生は決して他人の欠点を口に出されないということです。宴会の席、或はその後の二次会、三次会で、お互にかなり intoxicated の状態になっている時私など時々人のことに就て批判がましい言葉を口にしてしまうことがあっても、先生がそうした話をされたことは且て一度も耳にしたことがありません。アルコールがさめて、先生のそうした御人柄の気高さを感じ忸怩たる感に陥ったことが何度あったでしょうか。

次に先生のお酒に就てであります。私の如きは一度アルコールを口にするとブレーキが効かなくなり酔いしれてしまうのに反して、先生は御自分の酒量を辨えておられるのか、ある時点に達せられるとピタリと盃を口にされなくなります。家内から「占部先生を見習いなさい！」と何度云われたことでしょうか。先生の御自分を律する厳しさには頭が下がります。

何年前になるのでしょうか、確か別府で学会の後、例により二次会、三次会に先生と御一緒し、件の如くカラオケの店に行ったものです。そこでは歌い終ると評価の点数が大きく示されます……。話はとびますが、先生とゴルフを御一緒に廻ったことが何度もありますが、勿論先生は格段御上手であり、私の及ぶところではありません。どう考えてみても何をとってみても私には先生に勝るものがない……ただ歌だけは私の方が少しうまいかな？…と、私の負け惜しみの感情で密に思っていることでした。話は元に戻ります。先生が歌

われました。何を歌われたかは覚えていません。そして点数が出ました。何と92点！私も懸命に歌いましたが78点！そしてその時私が感じたことは、“The end. I give up!”

先生は大学を離れられても皮膚科診療をつづけられると伺っております。今後とも先生には皮膚科学者として、そして日本皮膚科学会の為に一層の御活躍をお願い申し上げます。

先生の今後の益々の御健勝をお祈り申し上げます。



## 「編 集 後 記」

久 木 田 淳

防衛医科大学校教授

私の畏友九州大学医学部教授占部治邦先生が15年間皮膚科教室を主宰されて、このたび無事定年退官されることになり誠に御目出度く、心よりお喜び申し上げます。この15年間、先生には九州大学医学部で多くの難問題を解決され、さぞかし御苦労があったことと存じます。

私は昭和40年度より西日本皮膚科学会に会員として加えて載きその年より西日本皮膚科学会の機関誌、「皮膚と泌尿」（後に昭和44年より西日本皮膚科と改称）を愛読しておりますが、会誌の巻末に毎号掲載されている編集後記はもう1つの楽しみで、郵送されて来た「西日本皮膚科」を封筒より取り出すと先づ始めに編集後記を読ませて戴いています。前教授の樋口先生は「ひとりごと」という題で執筆され、その後占部先生は昭和46年第4号より「ごあいさつ」で執筆を始められ、最近号（昭和62年第1号）で「読者への手紙」で終了されました。この間先生によれば94回で、この編集後記の執筆の御苦労話がありますが、どうして毎号の随想は名文で楽しく、きっと「西日本皮膚科」の読者の総てが毎号楽しみにしていたのであらうと思ひます。

これ等の話題の中に2つ程先生と私の会話よりの話が出ましたことを思い出します。1つは私が札幌医科大学に勤務中であつたと思ひますが、学会出張が多く大学の出席簿に出張のはんこだらけであり、占部先生も大部はんこが押してあるのでせうとの話になり、それが「学会出張」という編集後記となり、もう1つは某大学医学部を還歴近くなり卒業した学生が63歳で医師国家試験に合格した話のある新聞が美談として取り上げている話で、私見を先生に申し上げた所、先生は賛同されこれが、「世はさまざま」という編集後記となっています。

話題はさまざまですが、きっと先生の気分の楽しい時は楽しい話題となり、気分のすぐれない時は比較的硬い話題になつたのではないかと愚考しております。

先生には20余年に渡り、公私共お世話様になり、海外旅行もアムステルダム市での外用副腎皮質ステロイドシンポジウム出席を始め、米国皮膚科学会、国際皮膚科学会とご一緒に楽しい旅行をし、また日本皮膚科学会の理事として、雑誌委員長として学会運営に御協

力戴き，またこれからも理事およびマルホ皮膚科セミナーの編集委員としてお付合お願い致します。

終るに当たり，是非先生の編集後記を随筆集として出版されることをお願い致します。

先生のこれからの御健康と御発展を御祈り致します。

## 占部教授の退官に寄せて

朝 田 康 夫

関西医科大学教授

占部教授には九大教授職を去られて次なる新しい途につかれることとなったが、これを機に何か書かうとすると、学会での、ゴルフでの、はたまた二次会での色々の思出が錯綜して来る。占部先生とはここ10年位京都で毎年数回は番組編成会でお会いしており、これからは今後もずっとつづくことであろうし、悠揚迫らぬ安定感に満ちた雰囲気には接し得る楽しみは今後もずっと残ることは有難いことと思う。先生との色々な思出のうち、先生と一緒に出席したAADの学会と其の後のラスベガス・ツアーの思出は殊に印象に残っているので一筆する次第である。

1980年ニューヨークでのAADに占部教授と共に成田を発った。パンナムのニューヨーク行きの12時間ノンストップの直行便で、途中で燃料切れで落ちないかなといったら占部先生もほんとにそんな気もするなと笑われた。先生のアドバイスでバランタイン17年を2本土産に、時差ほけと疲労が洋服を着ている様な姿でニューヨークに降り立ったが占部先生は余り普段と変わらず平気な様に見えた。学会中にビートルズのジョン・レノンが私の泊ったヒルトンのすぐ近くの豪華マンション入口でハワイから来た狂信的ファンに射殺されたりして印象的なAADであった。

学会の後占部教授と一緒に久木田教授御夫妻、石川英一、堀嘉昭の諸氏と共にラスベガスに発った。ラスベガスでは予約していた筈のホテルがオーバーブッキングのため部屋がなく、アラジンという、魔法のランプの御利益を思わせるホテルを紹介されたが、部屋割りの結果私は占部教授と同室となった。御多分に洩れずショー見物に出かけ、そのホールにあったルーレット、スロットマシンなどでかなりすってからホテルアラジンに帰った。アラジンの魔力に賭ける気もあって、ホテル一階のカジノで残り数ドルをはたいて一台のマシンに挑戦した。10セントコインを縦横斜めと全部カバーする様に9個入れてから第1回目のレバーを引いたとたん、ガチャガチャ、ガチャガチャーと快い響きを伴ってとめどなくコインが落ち始め、とうとう受け皿一杯になった後自然にとまった。横の台のアメリカ人らしい老人が大げさなゼスチャーと共に口笛を吹いてくれた。然し私は些か狼狽した。次のゲームをと再びコインを入れてレバーを引いたがびくとも動かない。てっきり故障だ

と思ひ受け皿一杯のコインを両ポケットに入れ、両手にも一杯入れたままそこを離れようとしたら、横の台のアメリカ人が一寸待て、今に誰か来るからという。そのうち掛が来て残額はこちらで払うから一緒に来いという。まだこの上貰えるのかなとよく分からぬままについて行くとコインがよいか紙幣がよいかとのこと。コインだといったら又々コインをどさっとくれた。全額で120ドル位であったかと思うが、何しろ10セントコインでくれるものだから凄く重くて大金持ちになった気になった。アラジンの魔力か、占部教授と同室であったための強運か——と興奮しながらしゃべったのを思い出す。然し御利益もここ迄でその後約1時間の激闘の後すっからかんになって部屋へ引揚げた。若しもう一度占部教授とラスベガスへ行く機会があったら、同じアラジンに泊ってもう一度同じマシンに挑戦して、今度ガチャガチャ出て来たらそれ以上はやらずに金を抱いて寝ようなどとたあいもないことを考える。占部先生と奥様の益々の御健勝と御活躍をお祈り申し上げる次第である。

## 祝 辞

荒 尾 龍 喜

熊本大学教授

占部治邦先生には定年ご退官まことに目出度うございます。先生には皮膚科学、ことに皮膚真菌学、梅毒学の領域では世界的な数々の業績を挙げられ、日本皮膚科学会総会ほか多くの国内学会、国際医真菌学会、日韓合同皮膚科学会など幾つかの国際学会の会頭、会長を努められ、長年日本皮膚科学会副理事長ほか多くの学会の要職にあり、教室にあっては多くの優れた皮膚科学研究者、皮膚科専門医を育成されました。また西日本皮膚科、Journal of Dermatology (Tokyo) などの皮膚科専門雑誌が今日の姿に発展してきたのも先生のご功績の1つと考えております。

退官という言葉には若干さびしい響きを持つためか、お祝とするのはふさわしくないのではないかとささやきを耳にすることがありますが、各大学にはすべて定年の申し合わせがあり、定年になれば後進に道を譲ることになっております。功成り名遂げてご定年をお迎えになり、更に第2の人生にお進みになるわけでありますので、心からお祝いの言葉を申し上げたいと存じます。

占部先生は外部におります私から拝察致しますと極めてご多忙な毎日であったと存じます。いつか西日本皮膚のあとがきに、「この1年東京出張だけで40回を越えた」とか書いておられたようですが、多くの要職についておられた先生ですから、種々な学会、研究会、講演会、会議などと、恐らく席暖まるお暇もなかったのではないかと考えます。私の場合とて、先生程ではないにしても、東京出張だけを数えても20~30回に達し、週末熊本に居られることは1/3以下であろうと思います。学会、会議その他雑用に忙殺され、なかなかまとまった時間をとれないのが実情と言えます。臨床講座の教授としての職務は教育・研究・診療および教室の統轄、指導にあるとされていますが、本邦の臨床教授はその他色々な重要な仕事を遂行しなければなりません。ともすれば自著論文の執筆はおろか、教室員の研究論文の校閲まで遅れ勝ちということではまことに申し訳ないとしばしば反省しています。もう少し余裕があれば更によりアイデアが浮かびそうなものと愚痴をこぼしたい気持ちです。

占部先生には第2の人生としてお父様の跡を継ぐことを選ばれ、福岡市で皮膚科で開業

と窺いました。ご承知の通り、本年5月には第3回皮膚悪性腫瘍学会総会が、来年4月には第87回日本皮膚科学会総会がそれぞれ熊本市で開催されることになっています。先生には今後も決してお暇になられることはないと思存しますが、益々ご自愛下さいまして、後進の私共を何卒いつまでもご指導ご鞭撻戴きます様お願い致しまして、お祝いの辞に変えさせて戴きます。

## 祝 辞

田 代 正 昭

鹿児島大学教授

この度の占部治邦教授の九大教授ご定年ご退官まははおめでたいことと、お祝い申し上げます。

先生の本邦さらに世界の皮膚科学界に貢献された偉業については、他の筆者が述べられることと思われますので、ここでは私はこれまで先生に教えられたこと、お世話になったことの一端を記し、感謝の意を表したいと存じます。

私が先生に始めて面識いただいたのは、私がまだ皮膚科医1年生であった頃、先生が特別講演師としてご来鹿され、難治性の足白癬の発症要因に関する演題で発表されたと存じますが、その詳細にして科学的な解析に驚嘆するとともに、学問の深さ、楽しさを改めて教えられました。その上当時先生は確か九州大学院特別研究生というご身分であったと存じますが、その清涼な若さに感激しました。しかもその夜の歓迎会の席上、先生には未席に位置する私共まで親しく言葉を下され、先生の温かいお人柄に触れた感じを抱きましたが、そのご厚誼を今日まで続けていただき感謝の言葉もありません。

私も昭和47年恩師皆見先生の後任として教室を主宰することとなりましたが、何分不敏の身幾多の失敗を重ねながら経過して参りましたが、その間先生からご指導、ご援助いただいたことは数えきれません。その1つに機関誌西日本皮膚科に投稿論文に重大な推計学的解析ミスがあり、その訂正論文の掲載にあたり先生は一言も叱正なされず、破顔一笑「大変でしたね、良くあることです。今後注意して下さい」の一言でした。われわれの生命とも云える機関誌に汚点を残したことに改めてお詫びを申しあげるとともに、そのご恩情に深く感謝申し上げるものです。

先生はこの度大学教授という此岸から占部皮膚科・性病科ご開業という新たな決意と理想をもって彼岸に到達されると聞いています。何卒これまで通り私共後輩のご指導をお願い申し上げますとともに、先生始め御家族皆様方のご健勝、ご繁栄をお祈り申し上げます。

## 天性の指導者

宮 本 正 光

東京都

日本皮膚科学会の欧文誌の前身が Japanese Journal of Dermatology, Series B として発行されていたことを御存じの方はもはや少数派ではないだろうか。この雑誌は年4回発行の季刊で、月刊の日皮会誌とは直接の関連なしに独立した編集をおこなっていた。昭和40年代の後半、欧文の投稿は極めて少なく Series B の発行も次第に先送りとなり、遂には1年近くも遅れる羽目になってしまった。具合の悪いことにその巻数と年号を邦文の学会誌と同じとする建前であったので、発行遅延の状況は巻数のズレとなって現れ目立ってしょうがない、編集幹事としての私にとっては何とも気の重いことであった。そこにたまたま欧文誌の名称を改めて現行の Journal of Dermatology とする案がでてきた。私はこれに飛びついて改称大賛成、但し巻数は新たに第1巻から始めるという提案をした。具体的には昭和48年分の Series B Vol. 83 を中止し49年から J. Derm. Vol. 1 として再開すれば1年の遅れは自然に消滅してしまうというかなりずるいやりかたであった。編集委員の占部教授にご相談したところ、それは名案だとお誉めを頂いた。先生はじめ関係の方々の御努力のおかげでこの案は理事会で正式に採用され現在の欧文誌が誕生した次第である。この時の欧文誌の1年の空白については、学会の予算執行の改変を伴うことだけでも認められたというほかはない。あるいは事の重大さを大方に気づかせずに、胡麻化してしまったというべきであろうか。編集長の故清寺教授、占部教授それに私の3人は、その後も折にふれてこの問題の無事解決を喜びあったものであった。

危機を乗り切った J. Dermatol. はその後は順調に発展し、学問の国際化の流れに従い投稿の数も次第に増えてくるようになった。そこへ占部先生から非公式に御下命があり欧文誌を隔月刊にするため研究、努力するようにとのことである。年4回の季刊では外国で相手にされないというのがその主な理由である。暫くして編集会議で何気なく隔月刊のことはどうになりましたかと聞いたところ、同席されていた安田利頭理事長から、そういう声が編集部の中から出るのを待っていたのだよといわれ、それやこれやで早くも VOL. 3 から年6回発行ということに決定した。私にとってはとんだ藪蛇で、編集の仕事は大幅に増え大変に忙しい思いをしたものであった。このときのいきさつを考えてみると、お2人の先



生に言葉は悪いがうまくはめられたという感がないでもない。しかし今となっては真相は霧の中である。

隔月刊になって次の問題は当然ながら会計の赤字である。投稿の増加に比べて購読者の数は思ったより伸びず、学会からの補助金も赤字を埋めるに不十分で、独立採算を建前とする欧文誌特別会計の財政建直しが当時の急務であった。占部先生との間に「宮本さん、広告は1頁いくらとっているの。」—「後付で2万円前後ですが。」—「それは安すぎる。10万円取りなさい。」—「それは無茶な。」—「無茶ではありません。東大にいてできないことはないでしょう。」—といったやりとりがあつて、私は覚悟をきめて当時の東大助教授の立場をフルに利用し、出入の製薬会社の人達と交渉を始めた。数社から新しい契約を貰い、次の編集会議に報告すると、占部先生は何と「10万とはよくも取ったものだね。」と言われるではないか。昭和51年の10万円は発行部数500に満たない横文字雑誌の広告にしては確かにべらぼうな額で、我ながら臆面もなくよく押付けたものとは思ふけれど、そもそもそのべらぼうを言い出したのは先生ではありませんかといささかあつけにとられたものであつた。

占部先生との長いお付き合いを通じて、私は計らずも先生のいわばアドミニストレーションの才能をたっぷりと味わつたことになる。そのユーモアある表現から、どこまでが本音でどこまでがおだてか分からないけれど、ともかく先生の言われる通りに行動すると着実に仕事が出来ていくことは確かで、天性の指導者とはこういう人をいうのかと思つている次第である。

## 占部治邦先生の御退官に寄せて

吉 田 彦 太 郎

長崎大学教授

先生、長い間本当に御苦勞様でした。九大教授として、また日本皮膚科学会西部支部支部長として十余年にわたって私達を御指導下さいましたことを心から厚く御礼申し上げます。西部支部が一つにまとまって、和氣藹藹とした雰囲気で発展を続けてこれましたのは一重に先生の指導力、高いご見識、暖かいお人柄の賜物と存じます。先生の深いお考えの一端を学会、研究会、西部支部運営委員会などの御発言をうかがわせていただきながら、随分多くのことを勉強させていただきました。

私は、先生にはやや近寄りたがたい雰囲気を感じておりました。と申しますのも、私が皮膚科医として物心がつき始めました頃、先生は既に教授の地位にお就きになっておられ、学会での御発言にも鋭さと迫力をひしひしと感じていたからです。また、お口数が多くないこともその感を深めたのかもしれませんが、しかし、その考えは間もなく改められました。実は、私の恩師谷奥喜平先生が岡山大学を御退官になりました際、私は西部支部の仕事を九大へ引継いでいただくべく、書類一切を持ちまして九大へ参上いたしましたことがございます。その時、占部先生は青二才の小生を暖かくお迎え下さり、終始笑顔で私は硬くなりながら申し上げました事務的な事項を熱心に聞いて下さいました。その席には幸田弘助教授（当時）も同席なさったと記憶致しております。そしてそのあと、九大の前のレストランで大変結構な夕食をご馳走になりました。そのとき初めて肉の入ったパイと素晴らしいワインをいただきましたことを覚えております。私は美味しいものをご馳走になりましたことの嬉しさと共に、それまでとつつき難いと思い込んでいた偉い先生から親しく声をかけていただき、お話が弾みましたことを心から有難く思った次第でございます。それ以後、私は先生のファンになりました。

また私は「西日本皮膚科」の最後の頁「占部治邦・記」を読ませていただくのが大変な楽しみでした。最近到着しました49巻2号にはそれがありませんでした。同巻1号の最後に「本当に有難うございました」と謝辞が述べられ、お別れのご挨拶があったのですから当然なのですが、これまでの西日本皮膚科とは重さが違うと思いました。そして非常に寂しく思っています。私はその欄から世の中のいろいろな出来事や学問、学会などに対する

先生のお考え方を汲み取り，自らの心の糧とさせていただいて参ったのです。今後も樋口謙太郎先生の随筆集「巡る齒車」のようにまとめて御出版いただけないでしょうか。少々タイミングが遅れましても先生の物事に対するお考えを是非学ばせていただきたいと切望いたしております。

以上，私の占部先生への御礼の気持ちを綴らせていただきました。今後の先生と御奥様のご健康を心からお祈り申し上げ，ペンをおきます。

## 発 赤

三 木 吉 治

愛媛大学教授

「ハッカ」と読む。学生がポリクリや卒業試験でしばしば口にする用語である。皮膚科学では難解な字が多く、学生達にとっては最もとっつき難い領域となっている。フリガナをうった皮膚科学の教科書が出て不思議ではない時代となっている。

このような読み間違えのコレクションを大事に温めていたところ、ある日、占部教授もかなりのコレクションをお持ちであることがわかり、お互いに珍品を出し合って楽しませていただいた。この度、定年御退官に際し、記念文集への投稿を御指名いただいたので、代表例を公表させていただく事とした。

曰く、簡便法「カンピンホウ」、罹患「ラカン」、嚙下「リュウカ」、増悪「ゾウオ」、肉芽腫「ニクメシュ」、壊死「カイシ」、丘疹「ヘイシン」、禿髪「シュウハツ」、鷲卵大「ワシのタマゴダイ」、瘙痒感「カイヨウカン」、落屑「ラクセキ」、第2趾「アシのヒトサシユビ」などなどである。

先日、当大学の教授懇談会でその一部を披露したところ、神経科から発作「ハッサク」というミカンの産地らしい傑作が出てきた。

楽しみは学生達からだけではない。各地の地方会や日本皮膚科学総会でもなかなか乙な作品がある。Hailey-Hailey病「ヘレヘレ病」または「ハイレハイレ病」。後者は入局者の少ない医局長の心情を吐露したものと考えられ、何となくキモチがわからないでもない。先年の学会では講演中“vague”を「バギユ」と発音するのにはびっくりしたが、あとで考えると「バギユウ」とは「馬牛」の事であり、「馬」でも「牛」でもない「漠然とした」ものを指すのであるとすると、実に謂いえて妙であり感激した。ついでにいうと、臍石 omphalith を「へそのゴマ」にひっかけて“goma”と呼ぶことについては宮崎医大の菊地助教授に採り上げて頂いた（皮膚病診療4：303, 1982）が、最近は学生達の用語からヒントを得て、ジベル薔薇色秕糠疹を「ベル・バラ」と略称して悦に入っている。このように二ヵ国語に亘る駄洒落を“bilingual pun”と呼ぶのだそうである。

敬愛する占部教授の御退官記念文集の随想としてはやや不謹慎な主題となったかも知れないが、取っておきの珍品を公表させていただく事で御許し願いたい。

## 恩師占部治邦先生

丸 田 宏 幸

久留米市

昭和 37 年末、考えてみれば占部先生は久留米大学皮膚科教授として御赴任になられてまる 2 年経った齢 38 歳の頃である。折りから卒業試験の真最中であった。私はクラスで皮膚科の試験対策委員を命ぜられていた。皮膚科の再試験を受けなければならない者が 10 数名いた。5 教科試験を受けると自動的に卒業延期という規則があって危険な者が数名いた。そこで私は毎夜先生の御自宅にでかけては事務を通さず特別に再試験をしていただくようにと無理なお願いに参上していた。先生は大変な勉強家で毎夜 10 時頃御帰宅であった。御自宅の手前の角に身をひそめ、先生のお帰りを毎夜待った。小柄な先生がああの独得の胸を張り、右肩を少しいからせ、右手を大きく振る歩き方で帰ってこられるのを遠くで確認すると物影にかくれた。先生が「ただいま」と声をかけられ、奥様のお出迎えをうけられて玄関に消えられた後、数分後におしかける毎日であった。しかし、肝腎な話しはほとんどできずに世間話に時を過ごし、奥様と御一緒に煙にまかれ、酒をのまされては酔っぱらって帰されるのみであったように思う。最後の最後にはやはり私の負けであった。通常の再試験の日、私も付き添ってでかけた。その時「君も一緒に試験をうけなさい」といわれ、終わった後「これで落第するようでは駄目だよ」と念をおされ、グーの音もでなかったことを昨日のように鮮明に覚えている。御無理をかけたが、われわれは全員無事に卒業することができた。私は、若くて学問一筋ではあってもわれわれ学生が毎晩毎晩おしかけるのにも嫌な顔一つなさらずお付き合いいただく温情あふれる先生のお姿に直接接し、密かにこの先生に私の一生を託してみようと決心したものであった。以来 25 年間の長きにわたり、公私ともに一方ならずお世話になっているが、当時の私の決心に間違いはなく、先生の御学問は言うに及ばず、御人格にもいよいよほれほれすること年を経るごとに深まるばかりである。畏敬の念は深まるばかりで、今でも先生の御自宅を訪れる前には、犬ではないが、角の電柱に小便をして、心を落ちつかせてでかけるのが常である。良き師にめぐり会えた喜びは我が人生の最大の喜びである。少くとも、久留米大学御在任中に教えをうけた私の先輩、後輩が一樣に感じている心情である。63 歳の若さで御退官とはいささかもったいなという気持ちで一杯であるが、近くで開業していただき、今までよりももっと気軽に御

指導を受けることができることは大変幸せに思っている。今後も末永く御健勝であらせられ、すばらしい奥様と御一家様に囲まれてお幸せであって、われわれの御指導もよろしくと願うばかりである。

占部治邦先生のご退官を祝す

高岡弘道

福岡市

占部先生ご退官おめでとうございます。

先生は未だお若いのに、退官とは早過ぎるようで惜しまれますが、健康な若い身で職務を全うされての御定年、退職となればめでたい事でお祝い申しねばなりません。

永い間公職に在って、若い医学徒の教育と指導に当たられ、数多くの業績を挙げられました事に対し、敬意と感謝の念を捧げる者であります。

先生は伝統ある九大皮膚科教室に在って旭、皆見、樋口名誉教授等の跡を見事に受け継がれ、多大の業績を遺し、教室の繁栄を益々揺るぎ無きものに育てられました事は末長く顕彰される事と信じます。永年に亘る先生のお仕事を顧みて、労を労い、感謝と共にお祝いを申し上げたいと思います。

先生には私個人としても色々お世話を受けましたが、先生より以前既に御尊父にもお目に掛かり温情を受けて居ります、私は約30年前千代町から天神に移る時、元気でお仕事中の御尊父にご挨拶に伺いましたが、想えば先生が九大からアメリカに留学中の頃であったようです。

昭和35年末、先生が帰国後36才の若さで久大皮膚科教授として久留米に赴任されてからは、地方会や同門会でお会いする機会が多くなり、親しくご交誼を受けるようになりましたが、その頃の事で特に印象に残って居るのは教授就任10周年祝いでしたか、料亭の築山のある庭での祝宴でした。母校久大の少壮教授であられ又若くて元気だったので特に親しみ深く感じられたのでしょうか、愉快だったあの日の事が懐かしく未だ忘れられません。

昭和39年末、日本皮膚科学会に健保委員会が設けられ、全国14名の中の西部(3名)から小川先生(甲種開業・香川)、占部先生(久大教授)と共に私(乙種開業・福岡)も選ばれて責任の重大さに驚きましたが、あの時は先生と一緒にだったので心強く又大過無く過ごし得た事が有難くも懐かしく思い出されます。

年の経つのは速いもので、久留米大学教授としての11年目、樋口謙太郎先生が九大を定

年退職後は恩師の後を継いで母校教授として帰福され、それ以後は年々益々業績を積まれて年毎に多忙を極め、学会理事や西部支部長などの他日皮会のみならず本邦初の国際皮膚科学会や国際小児皮膚科学会開催に当たっては中心となって活躍されました、又最近は国際医真菌学会理事長の要職にも就かれ、愈々これからと云う時に定年退職とは誠に惜しまれてなりません。

然し一応公的に国内第一線を退かれてとも、国際医真菌学会理事長などの要職も未だ残っています。また物は考えようで若くて元気な内に公職を全うされての退官は目出度い限りで、これからは心機一転臨床の第一線でご活躍の予定と聞いて居りますが、そのお仕事は又期待されます。

今までの華やかな舞台でのお仕事は一面御苦労も多かった事でしょう。之から俗に云う「袴を脱いで野に降る」例え、暫くはゆっくりお寛ぎ下さい。そして貴重なご体験を我々開業医の為にも生かしてご指導下さい。福岡には戦後間もなく私の恩師皆見省吾先生が教授を辞して開業された前例がありますし、嫡子紀久男先生もそうですが、私達は今度三人目の偉い先生を迎える事に成りました。他に例の無い事で全国から注目される事でしょうし、益々賑やかになり一層気を呈する事を期待致して居ります。

開業医には又それなりの苦労もありますが楽しみもあります。先生は未だお若いし、円満なるお人柄で仲間達をご指導頂きますよう、又皆で元気で愉快地にやっていますよう願って止みません。幸い当地には先生の恩師樋口謙太郎名誉教授もお元気ですし、同輩の皆見先生や教え子も多いので第二の人生？を幸せにお過ごし下さい。

ご祝辞として、とりとめない事を述べましたが、改めて先生の永年に亘る多大の業績に対して敬意を表すると共に御苦労に感謝し、心からご慰労申し上げます。

末筆ながら先生のご健康と、ご一家の繁栄を祈ります。



## 占部教授の定年退官にさいして

大 島 恒 雄

北九州市

筆者は学生時代に同級であると共に、同じ臨床グループに属する栄をえていたので40年間の思い出のいくつかを綴ってみることにする。

グループで出席するポリクリの授業での一場面が常に私の脳裏に在る。瞳孔から左右に延びる、眼裂に一致した黄色の紐状のもので所々に血管が認められる。全員口を噤ぐんでいたら、唯一人ピンゲクラと答えたのが若かりし時の占部教授であった。

筆者は皮膚科に入局してしばらくして出張を命ぜられ、助手就任のために帰学してみても占部大学院生が誕生したのを知った。大学院生は助手、講師、助教授と、とんとん拍子に昇任し、ロックフェラー財団の研究者としてアメリカへDC6で飛んで行ってしまった。事情在って筆者は早く開業していて、クラス会の席で皮膚科独学に有効な方法を教えられたことを覚えている。地方会で質問したり発表したりするようになったのはこれからである。帰国して久留米の若き教授となられたころ、お祝いに何がいいかと電話したことがあった。皮膚科に入局した同級生でお祝いをしたことを覚えている。

恩師樋口教授の定年退官に伴う後任教授選には当然占部教授が生まれるものと見て安心していた。就任パーティに占部夫人と話した内容は未だ記憶にある。筆者も生活の安定と共に各地の地方会や連合地方会と総会に顔を出すようになり、占部教授の真価を知るようになった。日韓皮膚科学会に財務委員を命ぜられ、西部支部運営委員(社保委員長)、西部支部選出日皮健保委員に推薦された。推薦者の名を汚さぬ様に心がけているが、いささか成果がでていると自負している。

高校生のお嬢さんがミニスカートの膝を揃えてお茶を出して頂いた記憶が薄れないのに結婚のためお別れの席に招かれ、間もなく占部夫人からお孫さんの話が聞けるようになった。占部教授からは孫の話は聞いたことがない。男のお子さんも皮膚科医2人と医学部学生、3人とも国立大の親孝行である。

退官後は御尊父の始められた皮膚科医院を継承される由。同じ皮膚科でもいささか違う路線に移るからには勝手の違うこともあろうし、公務も未だ残っていることとて、いろいろと忙しい思いをされよう。日本臨床皮膚科医学会の設立のとき無理に入会して頂いた事

が役に立つこととおもう。

退官記念会の盛況を見れば、このような有能な人を退官させる定年とは無情とも感じられる。

## 祝 辞

岩 崎 博

福山市

去る3月28日、占部教授退官記念講演会が盛大に行われ、幾つかの協賛講演の後、占部教授ご自身、自ら九大皮膚科教室入局以来の仕事を回顧された。淡々とした語り口で40年に及ぶ研究生生活の思い出を語られたが、それを拝聴しながら私自身、あの頃の皮膚科教室への思いを新たに、懐かしんだことだった。

占部先生は戦中の事情が後を引いた形での昭和24年秋の入局、私達が半年後の25年と、相前後して皮膚科教室に入ったが折しもファイト溢れ、親分肌の樋口教授着任早々のこと、入局者も多く、教室は活気に溢れていた。丁度私達が入局した頃、占部先生は九大温研に出張され留守だった。何ヶ月かしてからの初対面で、既にその頃、大学院特別研究生で格別の秀才、将来の教授候補だという噂はよく耳にしており、その予想に違わず、一見ノープルで温厚ながら意思は強そうで、如何にも品性豊かな教養人らしい風貌は、当時の教室に屯する私達多くの野武士然たるキタナイ人種と別種の趣で、ある人が「はきだめに鶴」のようなもんだと称していたのを思い出す。そういえば、あの万事物の不自由な時代、酒好きの教室員達は質を構わず何でも結構といった趣だったが、占部先生は下手な物には手を出さず、専ら嗜むのは当時最高級、サントリーの角をチビチビ、後年の酒好きの先生の面影はまだ当時は無かった。煙草はピース両ぎりの缶入り、これは大分後まで続いていたと思う。とにかく、プリンスのニックネームに相応しく随分ステータスが高かった印象は強い。

私は教室の一番裏の研究室をあてがわれたが、既にその部屋では占部先生が日本小芽胞菌をテーマに一人こつこつ白癬菌の培養をやられており、それに新たに坪井君のケリオンが加わった。同じ部屋には北村憲一先生が梅毒のペニシリン療法が大分進んで、マウスを使つての再起熱スピロヘータの治癒実験に懸命で、それぞれの仕事を夜遅く迄、適当にだべりながらやっていた。昭和26年、樋口教授が28年総会の宿題報告「梅毒の化学療法」を引き受けられることになって部屋の空気は一変した。教室全員でこれにかかることになり、坪井君と私は占部先生をリーダーとする治療班を担当、当時新しい抗生物質として登場早々のテラマイ、クロマイ、オーレマイシンの治効をそれぞれ分担して、基礎的、臨床

的な研究に3人机を並べて一斉に走り出したが、流石に占部先生の仕事振りは見事なもので、周到な実験計画を立て、最低の労力でサッサと進行され、仕事をキチッと纏められるのに感心した。私共のように何度も無駄な実験を繰り返すような無計画なことはなく、つぶさに傍で拝見した学者としての占部先生の発想、計画性、実行力の調和の取れた展開ぶりは、私にとって随分勉強になった。その後私もカンジダに関わり真菌のスタッフに入ったが、占部先生がコツコツ白癬菌の懸滴標本をつくっては顕微鏡を一心に覗きこんでいられた姿が今も印象深く残っている。

当時樋口教室は新進の気概に満ち、意気天を衝くものがあつた。中央の学会では、演題毎に立ち上がり、「九大樋口」と名乗って発言され、大いに私達を頼もしがらせたが、その頃、総会での際立ったスターは、占部先生名付けるところの東大三人衆で、当時新進気鋭、安田利顕先生（関東通信）を筆頭に、谷奥喜平（信州大）、野口義圀（横浜市大）の3学者、交々立っての歯切れの良い発言は会場の雰囲気を取り導した。当時の皮膚科学会を担う若手学者として、樋口教授はその後安田利顕先生とは特に親密な交友を持たれるようになり、やがてそれは教室を含めての付き合いに発展、しばしば占部、坪井、岩崎とつるんで新橋あたりで安田門下の高弟達にご馳走になったが、この遙か昔のことを安田利顕先生は良く覚えていられて、退官記念会の祝辞でも、「私が一番早くから占部教授を知り、注目してきた」と、その頃の話を話されていた。折りしも古典的な形態皮膚科学に代わって、アメリカ学派による機能的皮膚科学ともいえる考えが導入され、軟膏も従来の油脂性の膏薬に代わり、きれいな親水性基剤が登場するなど皮膚科学界においても新風に溢れ、新しい飛躍に向かって燃えていた時代であつた。

おそらくこうした時代の趨勢の上に学者としての大成を志されてのことであろうが、講師ご就任の頃から、占部先生は当時の若手学者が争って挑戦し、極度の難関として知られたロックフェラー財団留学生試験に挑むべく、米語の勉強をうまずコツコツと続けられていたようである。その後先生は助教授としてさらに白癬、梅毒の研究を進められるが、私は昭和32年山口日赤に赴任、先生とは別な道をあゆむことになったので、ご一緒にした仕事としては教室の50周年記念が最後であつたと思う。やがて先生は螢雪の功実りロックフェラー留学生として、当時真菌を志す者にとり最も知られた臨床真菌学者 Conant 教授のもとに赴かれ、まだ我が国には知られなかつた新しい臨床真菌学の蘊奥を研鑽、真菌学者としての地位を不動のものとした。その後の数々の先生の業績については別な方が書かれると思う。

今祝賀会で、多くの弟子達に囲まれ退官の祝を受けてられる、相変わらず童顔の先生

を見ていると、私はつい、あのピルツ研究室で一生懸命コツコツ懸滴標本をつくっていられた頃の先生の姿を重ねて浮かべてしまう。退官されてもなかなか世間は役職を解放してはくれまいし、却って何かとお忙しくなられると思うが、西日本皮膚科雑誌の編集後記の長年の愛読者の一人として、もう今からはあの名随筆が読めないのは淋しいことである。せめて今迄書き溜められたエッセイを一纏めにして、良い形の本にして欲しい。そしてその際は、毎年年賀状で楽しませて頂いた、先生のうまい画をふんだんにカットに使って頂きたいものである。楽しみに期待したい。

## 占部治邦教授の御退官をお祝いして

利 谷 昭 治

福岡大学教授

占部治邦教授が今春めでたく九州大学を御退官になられます。私ども大学におります者は心から先生のこれまでの御尽力と御労苦にたいし敬意を表します。先生は昭和46年7月に既に11年間の久留米大学医学部教授生活に引き続いて、九州大学皮膚科学教授として着任されました。以来16年間、九州大学皮膚科学教室主任教授として、人事面では幸田佐賀医大教授、故西尾産業医大教授の輩出を果たされ、学会関係では、日本皮膚科学会総会、日本医真菌学会総会、第2回日韓皮膚科合同会議、第4回国際小児皮膚科学会の会頭としてまた16回国際皮膚科学会では副会頭の大役を果たされ、更に現在でも国際医真菌学会会長を務められ、その国内外を問わない御活躍ぶりにはただただ敬服するのみであります。私にとりまして忘れてはならない先生への感謝は、私が昭和47年福岡大学に移りましてから、末永、旭両助教授のお二人を当時けっして教室員の潤沢でなかったにも拘らず派遣していただいたことです。そのため御自分はほぼ1年間助教授欠員のまま過ごされることになりました。

先生は大変御丈夫のように拝見いたします。これからは御開業医になられて地域医療に貢献されるそうでございます。いつまでも御壮健に御励みになられますよう心から御祈り申しあげます。

## 光陰矢の如し

旭 正 一

産業医科大学教授

医学部2年になり、臨床各科の講義がはじまった時、皮膚科総論で占部先生の講義をはじめ聴いた。皮膚科の助教授は若いなあと友人が感想をのべたが、実際、大学院生といってもよいように見えた。昭和34年のことで、先生は当時三十台の半ばであった筈である。事実若かったのであるが、童顔のせいで、なおさらそう見えたのだろう。そのあとすぐアメリカへ留学され、そのまま久留米大学へ赴任されたので、あとは、地方会の学会場や忘年会の折などにお目にかかる位で、あまりご縁のない状態が続いた。昭和46年に九大へ赴任されてからは、ずっとお膝元で働かせて頂いているが、いつの間にか15年も経ってしまった。樋口先生が退官されたのでさえ、さほど昔という気がしないのに、占部先生の退官とは、本当のこととも思えない。しかし考えてみると、やはり15年の間には、ずいぶんいろいろな事があった。着任された頃は、外来・病棟はすでに移転していたが、研究室は明治以来の旧皮泌科の木造建築に居残っており、皮膚科・泌尿器科と放射線科が同居していた。玄関の黒板には、雪状炭酸治療は木曜日うんぬんという、いつ書かれたとも知れぬ案内があり、ために爪先で引っかいてみると、その白墨の文字は黒板と一体化して、褐色に固まっていた。二階のムラージュ（ロウ模型）の部屋には数百のムラージュが壁面に並び、当直の夜の見まわりに部屋に入るのもうす気味悪かった。学園紛争の余波などもあって教室内はバラバラの状態で、研究室の機能も停止状態に近かったから、見かたによっては、ゼロから再発というのに近い状態で教室づくりを始められたことになる。国立福岡中央病院から幸田助教授を呼び戻し、東京労災病院の倉田先生を非常勤講師に招いて形成外科部門をつくり、診療・研究体勢を着々と整備された。久留米大学に赴任された時も、教室員5・6名の状態から出発したとうかがったことがあるが、こうした組織づくりのうまきは流石であった。いくつもの学会を主催され、その一つ一つに我々なりの苦心や裏話もあるが、結局さまざまの障害も何とか克服され、学会本番はきわめて円滑に進行するのが常であった。各人の適性や能力をよく見て、まかせるべきところはまかせ、要点は詳しすぎるほどの指示を出して急所を押えてゆく運営手腕は、まことに見事なものであった。皮膚科学会理事や皮膚科学会西部支部長となられ、その他の各種学会でも要職を歴任されて、

急速に学会における重鎮となられた。学問的業績はむろんの事であるが、こういう行政学的方面においても、はじめから帝王学を身につけておられた方という気がする。まあ平たく言えば人徳であろう。前任地久留米大学のOBの人は、占部会と称して、今でも折りにふれては家族ともども集まるが続いている。私なども、お膝元で辛抱づよく使って頂かなかったとしたら、今ごろは大学にいなかったのではなかろうか。占部教授時代の前半を講師として、後半を助教授として勤めたが、生来の怠け者のこととて、見ていて歯痒いこともさぞ多かつたろうと思うのに、一度としてお小言を頂戴したこともなかった。そういえば樋口教授も決して小言をおっしゃらない方であったし、度量の広い上司に恵まれて幸運であったと思う。御退官ののちは、占部医院を継承して開業医の生活に入られる。いろいろ身の事情もおありであろうが、決して楽な道ではない。御健勝を祈るや切なるものがある。さいわい体調のほうはきわめて良好とお見受けするし、在任中も病欠されたことは殆んどなかった。今後も従来と変わりなく、いろいろ御指導下さるものと安心してゐる。



## 君子の酒

日野由和夫

福岡県宗像郡福岡町

占部教授が赴任された翌年、昭和47年入局で、いわゆる一番弟子の一人です。絵にかいたように不肖の一番弟子からみた占部教授の姿は……。

占部家の酒には毒がはいっているという噂があります。毒のせいで前後不覚になり、庭の犬を蹴飛ばしたか、占部教授を羽交い締めにした先生とか。飲むほどに濃くなる水割り、at home な雰囲気の中での睦子奥様の気さくな話しぶり、いつの間にか前後不覚になり、いわでもの事をグタグタ喋ったとおもうと翌日は冷汗ばかり。西尾一方先生が、僕は酒を敵のように飲む書生の酒、占部先生は君子の酒だ、とっておられたのを思い出します。占部先生は酒席でも正坐し、普段どおりにこやかで、静かに飲まれます。文章にしますと、先生は何となくとっつきにくく、二度とお伺いしたくなさそうですが、不思議なことに、懲りもせず先輩諸子皆さん、また占部家におしかけます。これも毒のせいでしょうか。

占部先生は数多くの学会を主宰され、そのたび好評を博しました。それは、総会における English Speaking Session の新設、医真菌学会での実習を中心にした講習会など斬新な企画とともに、学会をスムーズに、心持よく進ませるという運営のうまさにあるとおもいます。医局員に対して日頃から手厳しいほどの注意があります。皮膚科医にとってはカルテ以上に重要な臨床スライドの撮影ではその構図、バックなど。また誰にも読めないほど小さな文字、数字を羅列した実験データの表を非常に嫌われ、もちろん誤字、脱字まで細かくチェックされます。学会の運営は業者などの手をかりずに、スライド映写、音響、照明など重要な部所は教室員に責任をもってあたさせます。映写での左右スライドの光源のちがいによる微妙な色調の差、ピントあわせ、またマイクの音量、設置場所まで気配りなされます。こんな事までとおもいますが、ちょっとした稚拙さが折角のよい講演をイライラして、講師や聴衆に不愉快な気分を味あわせる事をしばしば経験し、大勢の人の集まる場をいかになごやかに、あるいは円滑に進めるか、いまさらながらその礼儀正しさ、気配りのこまやかさに感服させられます。

戦後生れの礼儀しらずの私にとっては文字どおり父のような存在でした。益々の御健勝をお祈りいたします。

## 今夜は占部治邦先生を思はふ、アメリカで酒を飲みながら

今 山 修 平

九大皮膚科

夜、机に向かつてみると六つになる子供が何時の間にか私の背中に立つて居ります。「どうした」と聞くと「今日は悲しかった」と答へ「けんすけ君が日本に帰つたもん」と言ひながら私の肩に顔を寄せて暫く我慢してゐましたが、とうとう大声で泣いて了ひました。彼の頭を撫でながら、かつては自分がさうであつたことが思ひ出されます。友達の転校に始まり、ポチを死なせ、何度か卒業式を迎へ、決して別れられないと思つた人とも別れて参りました。「会ふは別れの始なり」と教はり、次第にそれを理解できるようになりましたが、それでも泣かないと別れを乗り越えることが出来ませんでした。

遂に占部治邦教授の退官の日が来て了ひました。きつと笑顔で「御世話になりました、皆さん」と、教授室を御出になつたでせう。日本は暖冬とか。丁度医局の前の桜が見頃でせう。序でに花見もしませうよ。花見の時の先生は好きでした。医局の花見はいつも夕方からで、寒さに震へながら桜を見て酒を飲みました。それでも桜の下の先生は夕日を受けて良い色でした。

私は日野由和夫医局長の後を受けて二年間高等雑役夫（百瀬先生の文章にあります）を勤めました。日野医局長時代の皮膚科創立 75 周年記念学会と医真菌学会の総会に引続き、その間に教授は日韓合同皮膚科学会、就任 10 周年記念学会と小児皮膚科学会（東京）を主催されました。とりわけ日韓は日本での一回目であり、当時韓国の事情もあつて遂に当日迄出席者の数が掴めず心配されました。私共医局員は綱渡りを繰り返しながらも何とか無事に会を進行させることが出来ましたが、中でも学会のプログラム等を入れる記念の鞆がなかなか出来て来ず胆を冷しました。開会前日の夜 10 時過に板付空港の航空貨物ターミナルでそれを受け取つた時は本当に嬉しかった。これを運ぶのは医局の男達の仕事でした。鞆も 400 個になると重かつたことを思ひ出します。永江君の軽トラックは重宝しました。それから日本人と韓国人用（英語）に中身を詰めてやうやく開会の日の末明に完成しました。これは女性達の仕事でした。大学と会場との往復には西谷先生のバンが活躍しました。

会場では演者の机が低く、そのため講演を着席で行ふことにしましたが、この責任は私の代りに宮岡君が取りました。韓国からのお見参の先生方の御希望には殆どお応へ致しま

したが、これは医局員各自の裁量に任せました。勿論、事務局長は旭助教授でした。あのときも医局員の全てが本当に良く働きました。私がしたのは学会運営の手引きを書いたことと最後の晩にホテルの他のお客様に陳謝して回ったこと位でした。当時の占部教授は日本中の誰よりも一番多く学会を主催され、従つて、福田、日野、私と続いた頃の我が医局はどの大学よりも学会運営が旨かつたと思ひます。医局員の誰もが何をすべきか知つて居りましたから。教授は学会の前々夜までは直接指揮されましたが、それ以降は完全に任せられました。しかし声を荒立てられる事など唯の一度も有りませんでした。そんな事を致されずとも占部教授、ひいて九大に恥をかかせないと言ふ意識を医局員の全てが持つてゐたのです。その全てが教授の御指導の賜物でしたし、九大の歴史の重みでもあつたと思ひます。

占部教授が案外ユーモアに富んだ方であられるのを御存知の方は少ないのではなからうかと思ひます。このことに気付いたのは医局長になつて身近にお話し出来るようになってからでした。あるとき依頼されてゐた書類を期限間際に持参したときに、その書類の上に「平蜘蛛の如くに頭を下げてゐる私自身の漫画に『遅くなつて申し訳御座いません』と言ふ台詞」を付けて提出しました。すると数日後、絵はその儘に台詞だけが入れ替つて戻つて参りました。漫画の中で今度は占部教授が『有難う御座いました』と頭を下げて居られるのです。だうです！九州大学と言ふやや保守的な校風にあつて充分にそれが發揮出来たとは言ひ難いけれども、それでも私は存分にその空気を吸つて皮膚科医になることが出来たと思ひます。

皮膚科に入局したのは幸田教授（佐賀医科大学教授）に接したからであります。一年間広島で弘中先生（広島赤十字病院長）に教へを請ひ、四年解剖学教室で山元教授（九州大学医学部長）に学び、皮膚科に戻つては教授と幸田助教授は勿論、西尾教授（産業医科大学教授）に、暗くなつてからは教授、助教授に加へて中溝教授（九大温研所長）にまでも教へを賜はりました。これ程スタッフの揃つた医局は今後とも無いでせうね。その意味でも偉大だつたと思ひます。占部教授と、その回りを固めるキラ星達に恵まれて我々若輩共はぬくぬくと育ち過ぎたやうです。私共の力が足りない分を一人先生が背負ひ続けて來られたこと、であればこそ、九大の暖簾を守つて八面六臂の大活躍を続けられたことは痛いほど分つてをりました。それなのに最後まで不肖の弟子であり続けました。これから世間の波に揉まれてみませう。それから御恩返しを致すことになりませう。酒の勢ひで話が物騒になるといけません。今夜はここらでお開きと致しませう。

占部治邦先生。本当に有難う御座いました。

## 編 集 に あ た っ て

占部治邦教授の退官を記念して、有志の者が皮膚科自遠会(九州大学医学部皮膚科教室同門会)や関係の方々の御賛同を得て昭和61年9月に占部治邦教授退官記念事業会を発足させた。その世話人として樋口謙太郎、皆見紀久男、利谷昭治、西尾一方、幸田弘、旭正一の諸先生があたられた。また、旭正一助教授(当時)がその代表として活躍された。

その事業内容は記念学術講演会、記念祝賀会、記念品贈呈、業績集の作成、であった。昭和62年3月28日に福岡市の西鉄グランドホテルにおいて記念学術講演会、祝賀会が盛大におこなわれた。

その後、後任の堀嘉昭教授の就任、代表者の旭助教授の産業医科大学教授就任などにより業績集の作成が遅れていたが、この度漸く出版の運びとなった。記念事業会の最後の任務を果たしたことになる。

本業績集は占部治邦先生の全論文と占部教授九大御在任中の教室業績が記載されている。昭和62年初頭に執筆され出版が遅れている論文がいくつか洩れている可能性があるが御容赦いただきたい。

業績集の後半には退官記念祝賀会における祝辞、退官事業会に寄せられた祝詞、随想を他大学関係者と皮膚科自遠会とに分けて配列した。また、祝賀会における祝辞をそのまま記載した部分は文体が統一されていない。

編集、出版に厳しい眼をお持ちの占部先生から合格点をいただけるかどうか不安であるが、占部教授の御就任から御退官までを見届けることのできた唯一の教室員としてなんとかその責を全うした感慨が残る。

最後に、占部治邦教授退官記念事業会に寄せられた皮膚科自遠会会員、日本皮膚科学会会員、関係各位、医療機関、製薬会社の方々の御援助、御協力に心より御礼申し上げます。

(昭和63年5月 松本忠彦)

## 編 集 後 記

占部治邦教授(現九州大学名誉教授)は昨年3月31日をもって九州大学医学部教授を退官された。占部教授の御退官を記念して先生の御業績をいつまでも記録にとどめる業績集が出来上った。

私は占部治邦教授の後任として昨年10月16日付で九州大学に赴任した。私はかねてより占部教授の医師、医学者として、また教育者として医療、科学と教育に対する厳しく、真摯な態度を遠くより、ひそかに御尊敬申し上げていたところ、はからざるも尊敬する大先輩の後任として身近か

に接する機会を得ることができるのは私にとって非常な光栄であり喜びであると同時に、責任の重大さを感じている次第である。

残された、また、新しく加わった私共は偉大な先輩方の築かれてきたこの伝統と栄光に輝く九州大学医学部皮膚科教室を守り、更に発展させていく義務があり、そのための努力を惜しんではなすまい。

占部治邦教授御退官に際して多くの関係の方々から御祝辞と御祝詞を頂戴したことに厚く御礼申し上げますと共に関係各位の御協力に深謝の意を表するものである。

なお、占部治邦教授退官記念業績集の編集にあたっては、松本忠彦講師に「編集にあたって」に記載されているような次第で、論文と祝辞・祝詞のまとめを、本房昭三講師には写真集のまとめを、論文、資料の整理を南由貴子氏と大熊久美子氏に、そして庶務一般を堀田ツヤ子氏に御願いました。付記して謝意を表する。

(昭和 63 年 5 月 堀 嘉昭)

編集責任者 堀 嘉昭

松本忠彦

本房昭三

